
バラバラマジカル～魔法使いと殺人鬼～

人間狂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バラバラマジカル〜魔法使いと殺人鬼〜

【Nコード】

N8926X

【作者名】

人間狂愛

【あらすじ】

僕、零崎愛識ぜろさきいとしきによる愛と勇気と感動溢れる物語。

——なんて、もちろん戯言だけだね。

本来の物語はただの戯言ファンだったはずの僕が突然零崎として呪われ、異世界に移動して、殺していくだけのつまらない物語だよ。

この物語をわかりやすく説明すると、《豪華客船で行き先自由な贅沢旅行、ただし場所は湯舟の上》みたいなっ！ そんな感じ。

——さて、愉快に素敵に零崎を始めましょう。

昔書いていた不人気小説のリメイク版（？）です。過度な期待はしないでください。小説を読む時はある程度離れて読んでください。視力は大切に。

第零幕 零崎

いつも通りの時間、いつも通りの帰り道、いつも通りの町並み、いつも通りの友達と三人で下校。

けれど、この日は全てがいつも通りとは限らなかった。

——通り魔。

ニユースでよく見る、近いけど遠い現実。

昨日だって通り魔の話を聞いて、京都の通り魔なんて『あの人間失格のようだ』なんて、自分が被害に遭うとは思わずに、僕達は笑っていた。

走る、走る、走る。

襲い掛かる悲劇から逃れる為に僕達は必死に走る。

それでも逃げ込んだ路地裏で、さっきまで笑っていた友人は死んだ。

何の容赦もなく、何の躊躇もなく、何の価値もなく、僕の友人だった彼は、その凶刃に貫かれて死んでしまった。

「くひひひひ……、俺を認めない世界が悪い！ 社会が憎い！ 俺は何も悪くないんだっ！！」

通り魔は笑う。

滅多刺しにされて血塗れで息のない僕の友人を踏み付けながら叫ぶ。

何もかも自分以外のせいにして、子供が駄々をこねるように喚く。

「お前も殺してやる！ 俺を認めない世界の住人なんて一人残らず殺してやるっ！！」

そして通り魔は僕を指差し吠える。

どうやら次のターゲットは僕に決まったようだ。

振り上げた拳に銀色が鈍く光る。

こちらに突っ込んでくる血塗れのナイフを見つめながら、『クビツリハイスクール途中までしか読んでないのになあ』なんて全く関係のない事を考えながら僕は無抵抗で死を待った。

——しかし気付いた時には死んでいたのは通り魔の方だった。

「……あれ？」

首から上と下が別れて絶命している通り魔を見て、僕は腑抜けた声を出す。

手元を見ると、先程まで通り魔が僕に突き刺そうとしていた血塗れのナイフが手の平の中にあった。

「うあつ、愛姫っ、お前……」

先程まで通り魔に怯えていた友人の声が聞こえた。

彼は今僕に怯え恐れ、目の前の現実が信じられず、必死に声を絞り出してながら否定できない現実に苦しんでいる。

僕はとりあえず『こいつを安心させた後自首しに行くかなあ』なんて、ついさつき人を殺したとは思えないほど呑気な事を考えながら振り向いた。

「ひっ——」

彼は屍餅について後退る。

先程友人が殺され、もう一人の友人がその殺した相手を殺したんだから、その態度は当然か。

これは彼の望まぬ非日常なのだ。

非日常を求める人間は多いが、それは日常の大切さに気付いてないからだ。

だから実際に遭遇するとみんなそれから逃げだそうとする。

「とりあえず落ち着いて。これから僕は警察に出頭して裁判的な——」

と、僕は彼を安心させるように手を差し延べる。

——しかし、気付いた瞬間には僕は先程と同じように彼を殺していた。

彼の心臓部に銀色を突き刺していた。

「——ごぶっ」

彼の口から真つ赤な液体が溢れ出す。

彼の瞳は僕の行動が信じられず、自分の状態が信じられないと訴えかけている。

「——あれ？　なんで？」

僕は困惑する。

何故殺した。

何故殺してはいけない。

何故殺す。

何故殺さない。

何故。何故。何故。何故。

思考を深める。

罪悪感が沸いてこない。

悲壮感が沸いてこない。

人を殺してしまったのに。

人が死んでしまったのに。

「えっと……、通り魔を殺してしまった。別に復讐心や恐怖心からではなく気付いた時には死体に変えていた。友人を殺してしまった。何の理由もなく当たり前のように気付いたら自然にナイフを突き刺していた」

状況整理。

ナイフを持ったまま頭を抱え右往左往する僕。

日常から非日常へ変化。
通常から異常へ変質。

一般人から連続殺人鬼に職業変更。
クラスチェンジ

さっきまでの自分とは明らかに別人のような、まるで自分が作り変えられたような気分だ。

南愛姫^{みなみあいぎ}ではなくなってしまったような、人間とは違う恐ろしい何かに変身してしまったような。

「なにこれ？ とりあえずこのまま警察に行った方がいいのかな？ それとも先に救急車と警察に連絡してからの方がいいのかな？」

唯一の家族である姉に言っても「またいつもの嘘？ アホな事言っていないでさっさと帰ってきなさい」なんて言われてしまうだろう。

狼少年は嘘を付きすぎて信じてもらえなくなるのだ。

日常的に嘘を嗜む僕の言葉を、しかも有り得ない非日常を、いくらあの優しく麗しいあのお姉様でも信じてはくれないだろう。

血塗れで帰って驚かせるのもシスコンの僕としては遠慮したい。

てゆうか未来^{みらい}のことだけではなく、現在^{いま}の事をしっかり考えよう。

出会う人出会う人をさっきの友人みたいに殺してしまう事も有り得るのだから。

「あれ？ これじゃあ舞織ちゃんみたいだね。まるで零崎みたい――」

その時、僕の中にあるピースがカチツと嵌まったような気分がした。

その瞬間、僕の意識は深い闇の中に落ちていった。

そして僕は生まれ育った世界に突然の別れを告げた。

目が覚めるとそこは白い空間だった。

上も白、下も白、右も白、左も白、何処を見ても影すら見当たらない真っ白い空間。

一面の白によって僕が浮いているのか、もしくは地面に足を付けているのかすらわからない不思議な空間。

広いのか狭いのか、長いのか短いのかすらわからない、ただ白いだけの世界。

「やあ、呪われた少年よ。悪魔の操り人形よ。気分はどうだい？ 突然の事に驚いたりなんかしているかな？」

その空間に声が響く。

男かも、女かも、子供かも、大人かも、老人かもわからない不確かな声。

——けれど一つだけ。

その声は清らかで優しくて澄んでいて、心に響くような声だというのはわかった。

僕は声の主の正体を尋ねようと、この空間の事を尋ねようとしたのだが声が出せなかった。

パクパクと間抜けに口を開いて閉じてを繰り返す事しか出来なかった。

「ああ、少し声を出せないようにさせてるだけだから心配しないでいい」

声は当たり前のように自然に告げる。

「さて、とりあえず説明した方がいいかな？ 私は君達が神と呼ぶ者、或いは世界の管理人と呼ぶ者、或いは世界の意思と呼ぶ者。まあ、適当に呼んでくれたまえ。悪魔に呪われた哀れな無神論者」

声は僕の心を読んだかのように言葉を続ける。

神なんて人が作り出したものじゃなかったのか。

僕は想像上の物としか考えていない。

死後の世界も存在すら否定している。

てゆーか悪魔に呪われたっていったい何の話だろうか。

次々に疑問が浮かんでいくのだが、尋ねる為の手段が僕にはない。

「悪いけど時間がないから手っ取り早くいくよ。此処は私の住み処であり、居場所であり、仕事場である場所だ」

声は僕の心情を無視しながらも、僕の疑問にドンドン答えていく。

「そして悪魔が君にかけた呪いは“何の感情もなく呼吸をするかのように殺人を犯す”というものだ。君の持つ知識の中だと――零崎一賊というものが似ているね」

その言葉で此処に来る前の事を思い出す。

首を飛ばされた通り魔。

心臓に穴を開けられた友人。

何の理由もなく殺す殺人鬼。

僕八零崎二ナツタノデシタ。

「もちろん似ているというだけで完全に同じな訳ではない。もし全く同じなら覚醒した君に人を殺さないという選択肢は持てないからね」

声は補足する。

つまり僕は殺さないという選択肢を持てるという事なのだろうか。

「その通り。だから私は君をあの世界から引き離れた。その選択が

できるようになるまであの世界で殺し回られるのは厄介だからね。
あの世界は特別なんだ」

声の話を聞いても、僕には悪魔への怒りも、好きな小説の人物と同じ存在になれた喜びも、神様への感謝の気持ちも、通り魔や友人への罪悪感も一切浮かばなかった。浮かべなかった。

何処か壊れてしまったんだろうか。

変質してしまった僕にはわからない。
愛姫だったのならわかったのだろうか。

「私は人間を平等に愛し、平等に何もしないが、イレギュラーによる異常に対しては行動しなければならない。それが君を此処に招いた理由、君は別の世界に送り出す理由」

別の世界？

「そう別の世界だ。私が管理する世界の一つ。その世界の裏側は日常的に戦いがあり、君の世界にはいなかった特別な存在もいる」

声の話を何処か他人事のように聞きながら僕は別の世界というものに興味を抱いていた。

違う世界。違う住人。違う環境。違う技術。違う法則。違う時間。

新しい物に溢れた世界。

「私には悪魔の呪いは解けない。だから君をその世界に送り、君にその世界で生きていける力を与えよう」

声は申し訳なさそうに話を続ける。

「まずは君がその衝動を抑えられるように戦争の時代に送ろう。零崎であつて零崎でない君なら抑えられるはずだ。そしてある程度抑えられるようになったら平和な時代に送る。その世界の物語の主軸になる世界へね」

——戦争。

僕は何人殺すのだろうか。

愛する人間を物言わぬ肉塊に変えてしまふのだろうか。

「もちろん呪いに抗うか受け入れるかは君の自由だけどね」

声の言葉に僕は苛立ちを感じる。

簡単に負けを認めるなんてごめんだ。

「さて、そろそろお別れの時間だ」

自称神様はもう説明は終わったとばかりに突然別れの言葉を告げる。

「じゃあね、呪われた子供よ」

それを聞いて僕は心の中で呟いた。

「ばいばい。僕を救えなかった神様」

それは何故か言葉に、声にすることができた。

口を動かした訳ではないのに白い空間に響き渡った。

「ふふふ、君の人生に幸福が溢れる事を願おう」

そして僕の意識はまた暗転した。

新しい世界への期待と不安を心に宿しながら。

第一幕 新世界

目が覚めたらそこは戦場だった。

少し離れた場所には大勢の人間と絵本や小説や漫画でしか見た事ない亜人。

その人間達が雷や炎や氷なんかで戦っている。

燃える草原。 ひび割れた大地。 凍てつく木々。 切り裂かれた死体。 鳴り響く雷鳴。

ファンタジーもリアルになればファンシーではなくなるみたいだ。

ただの戦う主題の一つでしかない。

彼等は所謂魔法使いってやつかな。

もしくは魔法使いの格好をした超能力者。

とりあえず此処は魔法使いの戦場の中。

周りの現状確かめた後、僕はとりあえず自分の状況を確認する事にした。

身体は十六歳の自分から十歳ぐらいの身長にまで縮んでいる。

視界の低さに少し慣れない。

服装は真っ黒なズボンに真っ白なシャツを着ていて、その上に黒いジャケット。

グイジュアル系のような、厨二病のような服装を見て『まるで一クセラレタ方通行ようだ』なんて感想をポツリと漏らしながら苦笑いをする。

「肌の色と目の色と中性的な顔立ちは似ているけど、あんな白髪の凶悪面にはなりたくないかな」

そう言って更に確認を進める。

人差し指に嵌まった指輪とズボンに付いたチェーンは昔から愛用しているもの。

ピアスは左に二つ右に一つと前の世界と変わっていないようだ。

そして確実に前の世界で持っていなかったものが地面に落ちているのを見付ける。

魔法使いのような真っ黒なローブ。

銀色に光る鋭いナイフが数本。

あの人（自称神様）が用意してくれたものだろう。

これで姿を隠して殺せという事なのだろうか。

神様と名乗った割に殺人を勧め、許可するような行動はどうなんだろう。

感謝はするが感心はしない
——戯言だけどね。

さて、とりあえず見た目の確認はこれぐらいだろうか。

次は中身の確認。

思った通り全く覚えのない知識がある。

魔法という前の世界では持ち得なかった力。

これがあの人の言っていた力だろう。

使える魔法の種類は3つ。

1つは、身体強化。

戦いの歌（カントウス？ベラークス）

2つ目は魔法の矢。

魔法の射手（サギタ？マギカ）

最後に何故かシャボン玉。

僕と同じくように名前がないし、使えるのも僕だけの神様からの
プレゼント。

姉との大切な思い出に関係あるこれを殺す事に使えとは、どうや
らあの人は案外性格が悪いらしい。

この3つの魔法と零崎の本能による殺人、もしくは殺戮が僕の武

器であり手段。

減る事も増える事もないこれからの人生の相棒のようだ。

確認は終わった。

次は実践。実戦。

僕の僕による僕の為の零崎が幕を開ける。

標的は魔法使い達。

人間も亜人も関係なく、平等に無慈悲な慈悲を与えよう。

「おい、嬢ちゃん。此処は危ねえからさっさと逃げろ！ 巻き込まれて死んじゃうぞ！？」

声が聞こえて振り返るとそこには屈強そうな男。

髭を生やした筋骨隆々の男性が僕を見て驚き心配そうに声をかけてきた。

標的は決まり、例外はなし。

「ごめんねおじさん」

「あー？ 気にすんな。いいからさっさと行け！」

男は戦場には似合わない笑みを浮かべる。

僕がどんな存在でこれからどうなるか知らないからこそできる微

笑みを。

「——では、愉快に素敵に零崎を始めさせていただきます」

僕が言葉を発したと同時に地面からシャボン玉が出現する。

男は突然現れたシャボン玉に一瞬驚くが「おおっ、可愛いじゃねえか」なんて言葉を発しながらそれに触れる。

その瞬間、男の右手の肘から先が——パンツ——という音と共に弾けて消えた。

「ぐっ、ぎゃああああ あああああああああああああああア!？」

男はみつともなく醜く悲鳴をあげる。

突然の自体に処理が追い付かないのか、キョロキョロと目を動かしながら、出血の止まらない肘を抑えその場に倒れ込んで、身体をだらし無く忙しく動かす。

僕はその様子をじっと見つめる。

前の世界では見る事ができなかった人間の姿を記憶に刻み込むように、ただ静かにじっと見守る。

「お前、何をっ……」

荒い息を吐きながら男は尋ねる。

戦場に迷い込んだ子供を助けに来たと思ったらいきなり右腕が弾けたのだ。

理解できなくても無理はない。

「零崎を始めるって言ったじゃん。油断する人間は早死にするよ？是非来世で今回学んだ事を活かしてね」

僕は笑う。

天使のような悪魔の笑顔。

男にはそんな風に見えているのではないだろうか。

恐怖と怒りが入り交じった表情の彼からそんな無駄な予測を立ててみる。

「——ばいばい」

言葉と共にいくつもの可愛い泡の風船が男の身体を囲む。

「やめっ——」

パパパンツ——。

弾けて爆ぜて消えて混ざった。

地面ごと消しさったので血液すら残っていない。

彼がいた痕跡は全てこの世から消失したのだ。

頬に飛んだ血を舐め取る。

彼の最後の一滴を舌で遊ぶように味わう。

血も肉も骨も髪も、全てが全て土に還ることなく消失した。

もしかしたら少しぐらい存在しているかもしれないがどうでもいい。

僕は殺人の痕跡を消したい訳ではないのだ。

ただ、新しい自分の力に酔いしれてこんな風にしてしまっただけなのだから。

戦場を見る。

僕が起こした事に気付く者はいない。

少し離れた場所に関心を寄せていたら、戦場では命取りなのだから当然か。

別に気付かれようが気付かれまいが現在の僕に零崎を止める方法は、手段はないのだから関係ないが、どうせなら自分の実力を試したい。

人間は強大な力を得ると、それが暴力であれ財力であれ知力であれ、酔いしれて変わってしまうものだ。

バトルジャンキー
戦闘中毒も似たようなものだろう。

試したいから相手の都合も考えずに力を奮う。

殺人鬼になった僕でもそれは人間と変わらないようだ。

人間を愛する僕が人間を殺すなんて有り得ない変わり方はしているけどね。

今の僕はさながら突然得た大量の給料の使い道を考える子供。

大人ではないから加減もわからない。

黒いローブを纏い戦場を見つめる。

醜く争う人間達は僕にとっては美しく浅ましく、どうしようもないほど純粹に見える。

戦場に正々堂々を求めるのは間違いだ。

だから、だからこそ僕は卑怯な不意打ちで彼等を終わらせよう。

零に変えてしまおう。

「僕は零崎だ。聞こえてないかもしれないけどそれが僕の名前だ。この名前を心に刻んで恨み妬みながら死んでいってくれ」

一步一步、地面を歩みながら宣言する。

その度の下から上から右から左から、何処からともなく溢れる戦場に似合わないシャボン玉。

生き残っている魔法使いの一人が戦場を歩く僕に尋ねる。

魔法も同時に放つが、魔法で守られた僕には届かない。

「人間を愛し慕い敬っている愉快な殺人鬼だよ」

— パンツ。

乾いた音と共に彼の身体は弾ける。

悲鳴をあげる暇もなく一瞬で彼の身体は消失した。

[illegible]

人類最終のような笑い声をあげる。

僕には似合わない下品な笑い声を。

恐怖を与えてもつと彼等の表情が歪んでくれるように。

そしてしばらくすると視界には真つ赤な血飛沫と肉塊が広がる草原になっていた。

はじめての魔法。 はじめての戦場。 はじめての零崎。 はじめての

人間観察の結果。

僕は満足しているはずだ。

しかし何故か心が満たされている気がしない。

「——まあ、いつか」

どうでもいい事を真剣に悩むのは僕には向いていない。

それよりもこれからどうするのかを考える方がよっぽど優良だ。

とりあえず零崎を続ける為に戦場を回る。

衣食住については住は適当な町の家を使えばいいし、衣食とかその他も同じだ。

確実に殺してしまうだろうが、仕方ないと割り切る事にしよう。

殺人鬼のくせに正義の味方ってのもおかしいし、存在自体悪なんだから悪は悪らしく生きよう。

とりあえずその場のノリで生きてみよう。

僕のこの世界での物語はまだ始まったばかりなのだから。

第二幕 過去の未来の英雄

はじめて零崎を開始したあの時から時間が経ち、僕はまた戦場にいた。

様々な戦場を巡り、様々な町並みや景色を見回り、この世界について知り気付いた事がいくつかある。

どうやらここは魔法先生ネギま！の世界らしい。

僕がいる時点で少し違うから、ネギまを元に創られた世界が類似した世界だろうか。

まあ、とにかくその世界と同じような世界で今は魔法世界で戦争中。

つまり英雄が誕生する前なのだ。

あれから何度も何度も戦場に赴き、目撃者も残さずに殺していたのだが、未だに彼等に出会ってはいない。

それどころか最近はどうやら賞金首にされたみたいだ。

念波で死ぬ前に伝えたんですね、わかります。

名称：ゼロザキ

年齢：十代前半

種族：おそらく人間

容姿：黒いローブを着た子供

能力：シャボン玉に酷似した魔法
賞金：100万ドル

オーバーキルドブラック
黒き制裁なんて呼ばれてるみたいです。

哀川潤さんのファンだから嬉しいけど、恐れ多すぎて困る。

てゆうか子供の殺人鬼なんだからキティちゃんことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルのせいになればいいのに。

賞金首になってしまってから、僕はこれ以上情報バレると生活が面倒だから、零崎を抑える訓練をしている。

あの人は零崎を抑えられるようになっていた。

零崎であって零崎でないとっていた。

嘘は言っていないだろうから、僕は訓練次第で呪いをどうにかできるということだろう。

それに気付いてからは少しずつ努力をしている。

だが、やはり難しいものは難しいものだ。

こんなので目標の紅き翼アラルブラに仲間入りして英雄になっちゃおう作戦はできるのだろうか。

そして未来でタカミチに零崎さんお久しぶりですとか感激しながら言われたり、魔法世界に行ったらキヤーキヤー言われるような存在になりたい。

ミハーで悪い？

せっかく漫画の世界に来たんだし、僕は自由気ままに楽しくやりたいんだよね。

なんて考えてる間にも戦いは続く。

零崎は禁止。

ただ戦って実力を磨くだけの戦争。

魔法の雨を避けながら、なるべく殺さないように連合も帝国も関係なく無力化していく。

少し気を抜いたら殺してしまうから難しい。

何人かの人間を殺してしまったし。

「おい、お前——ぶぎゃっ」

変なオッサンが喚いていたから顔面に蹴りを入れて黙らせる。

優しく無慈悲に、僕は戦場を鎮圧していく。

身体強化なんてしなくてもこの身は殺人鬼。

——たかが人間には負ける事はない。

障壁なんて使えなくてもこの身は零崎。

——避けるのなんてたやすい。

何人でかかろうともこの身は悪魔と神に作り変えられた存在。

——有象無象に負けはしない。

「さあ、零崎を始め——っていけないいけない。殺しはだめだめ。不殺主義に目覚めたんです僕はっ！　なーんて、もちろん戯言だけどね」

身体が幼くなつた事と、厨二病と、新しい世界、新しい力、血飛沫舞う戦場のせいでテンションが上がりやすい。

気をつけないと皆殺ししちゃいそうで大変だ。

それから数日後。

何度か戦場で訓練している内に、零崎をある程度抑えられるようになった。

どうしても抑えられない場合は自分を傷付けて我慢するという選択肢も出来た。

再生能力も回復手段もないから最終手段だけどね。

もちろんその訓練の為に何人もの人間が素敵に愉快に痛快に死んでいった。

悲しみも罪悪感もないのだけれど。

そして今日も僕は戦場にいる。

最近食べるか寝るか戦うかしかしてないけれど、なんて十才児なんだろうか。

まあ、元々は十六歳だしいいだろうか。

なんてどうでもいい考えていると巨大な魔力の塊が近付いてくるのを感じ、僕は真後ろに跳ぶ。

そして横に視線を滑らせるとそいつらはいた。

アラルフラ
紅き翼。

魔法世界を救った英雄（予定）。

千の呪文の男。

ナギ・スプリングフィールド。

旧世界の侍マスター。

青山詠春。

千の刃の男。

ジャック・ラカン。

そして変態のアルビレオ・イマ、苦勞人のガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、爺シヨタのフィリウス・ゼクト。

「全員勢揃いか……、丁度いいね」

そう呟いて、僕は両手をあげて無抵抗を装いながら彼等に近付いていった。

飛べないからもちろん歩いてだけれど。

「てめえ、何者だ!？」

ナギの挨拶代わりの千の雷を避けた後、キリアキブル・アストラペー両手を広げて自己紹介。

「やあ、紅き翼諸君。僕の名前は零崎愛識。せうさきいとしきちよつとお茶目な十才児さ。好きなものは人間。特技は解体。趣味は読書。正義と平和と人間をこよなく愛する愉快な殺人鬼だよ」

いつの間にか戦場には僕と紅き翼しか動ける者はいなかった。

「黒いロープの子供……、もしか黒き制裁ですか？」

「あん？　なんだよアル。おーばーなんたらって」

「黒き制裁だ馬鹿っ!」

ナギ、アル、詠春と、コントのような会話が続く。

緊張感が全くないのが彼等らしい。

「黒き制裁つつたら賞金首だろ？　連合も帝国関係なく皆殺しって
いう」

「いやいや、殺す気はなかったんだよ。戦争なんて馬鹿な事をする

連中を止めたかっただけさ。弱すぎて死んじゃっただけで最近はやんと殺してないでしょ？」

ラカンの言葉にすかさず言葉を滑らせる。

今から仲間になろうって相手に悪い印象は与えたくない。

もちろん殺す気はなかったなんて戯言なんだけど言い訳は必要だ。開き直るか否かで相手の心象は変わる。

「へえ……面白え。おい、お前っ！」

きたきたきた。

これはテンプレ通り仲間になれよのパターンですね、わかります。

ここから僕は英雄街道爆進していくことになるのだろう。

《正義の味方になりました、ただし解決方法は皆殺し》みたいなっ！

「俺と戦いやがれっ！」

——しかしナギが発した台詞は僕の予想とは180度違った。

寧猛な目でこちらを射ぬくかのように睨み付ける戦闘狂。

……転生して戦争の時代に来たら仲間には誘われるもんじゃないのだろうか。

「ご都合主義に僕は嫌われているらしい。

「おい、ナギっ！」

「うつせえ、詠春。強そうな奴ならガキだとか賞金首だとか関係ねえだろっ。行くぜっ！ 千の雷っ！！」

言葉と共に撃ち出されるのは極太の雷。

馬鹿の馬鹿魔力によって生み出された力の渦が僕に向かって直進してくる。

「——ちっ！」

すかさず僕は舌打ちと共にシャボン玉で雷を相殺した。

辺り一面に舞う煙。

その煙が晴れた瞬間、目に映る赤。

「おらっ！！！」

ナギ・スプリングフィールドは僕がこれくらいで終わるとは思ってなかったようで、魔法を放つと同時に突っ込んできていたみたいだ。

ナギが打ち出した拳を軽くないし、ナイフを逆手に持って切り返す。

超反応。

本能の赴くままに首元掛けて切り掛かる。

しかし相手は戦いの天才。

接近戦が得意な魔法戦士タイプ。

首を振るだけでナイフを避け、今度は蹴りを放つ。

当たれば吹っ飛ばされそうな程素早い蹴りを。

僕はそれを後ろに跳んでかわす。

軽く掠ったが問題はない。

この程度なら戦闘に支障はない。

と、少し怯んでしまった瞬間にナギは突撃してきた。

「オラオラオラオラ——」

拳が、肘が、脚が、膝が、僕に高速で向かってくる。

それを捌き、避け、受け止め、僕は防戦一方だった。

「どうしたあ？　こんなもんかよ、てめえは！？」

その言葉を聞いて、僕はナギの足を踏み、怯んだナギの心臓目掛けてナイフを走らせる。

「おわつと——」

避けられないように足を踏んだまま突き刺そうとしたのだが、彼は僕の腕を横から殴る事でナイフを防ぐ。

そしてその痛みにナイフを落とした隙を狙い、両手の平で僕の胸の辺りを強く押した。

「うはっ——」

一瞬息ができなくなり、僕はそのまま弾き飛ばされる。

そして、その瞬間を狙い、ナギは呪文の詠唱を始める。

「来たれ、虚空の雷。薙ぎ払え（ケノテートス・アストラプサトー・
デ・テムナトー）。雷の斧（ディオス・テュコス）！！」

——やっぱり戦闘経験が段違いか。

目の前に接近する黄色の閃光への対処を考えながら、諦めにも似た感想が過ぎる。

これが英雄。これが一流。

これが天才。これが戦闘。

これが魔法。これが本物。

今までの相手とはレベルが違う。

流石チートキャラ。流石バグキャラ。

慢心していた僕とは大違いだ。

態度はふざけているが、戦闘には常に全力で取り組んでいる。

シャボン玉でもこのタイミングだと相殺仕切れないだろう。

これが油断。

——与えられた力で満足した結果。

これが甘え。

——所詮漫画の世界だと侮った結果。

これが喜び。

——自分より上の人間に出会えた結果。

これが悔しさ。

——これから初めて敗北という結果に至る事に対する思い。

そして雷が僕の身体に直撃する。

「——やったかつ!？」

煙に包まれた空間を凝視して、本来なら無傷で敵が存在しているフラグを立てるナギ。

ここで追い撃ちをかけないところが彼らしいと僕は思った。

そして煙が晴れる。

その先にはとても無事とは言えないレベルでボロボロの僕がいた。

咄嗟に身体強化を使って避けなきゃ死んでいただろう。

強力で強大な威力だった。

本物を初めて味わった。

「強いね……、参った。降参っ！」

最後に笑顔でそう言い残して僕は倒れた。

虐殺でも殺戮でもないはじめての戦いは、僕の完全敗北で幕を閉じたのだった。

第三幕 愉快で素敵な仲間達

気がつくと僕は何処かのベッドの上に寝かされていた。

周りを見る限り、ホテルの一室だろうか。

何故こんな場所にいるのだろうか。

えっと、寝る前の記憶は確か、——ナギ？スプリングフィールドに一撃も入れる事も出来ずに無惨に敗北。

「Oh...ナンテコッタイ」

それより僕、気絶し過ぎではないか。

この前まで平和な日本で姉に過保護に育てられていた高校生だからとか言い訳してもいいだろうか。

……お姉様、元気かなあ。

なんて前の世界で唯一の家族だった姉の事を思い出す。

もちろん流血ではなく血縁関係の家族である。

姉の事を思い出すと改めて世界でひとりぼっちだという事を自覚する。

この世界に零崎一賊はいるのだろうか。

いないのであれば目覚める人間はいるのだろうか。

弟でも妹でも目一杯愛してあげるから、いつか出来ますように。

と、まだ見ぬ家賊への愛を深めていると、コンコンコンツと小さなノックが聞こえた。

余談だけどノック2回はトイレノックって知った時は驚愕したものだ。

「おや、もう起きてましたか」

返答もせずにはーっとしてると細目のイケメンが入ってきた。

変態アルビレオ？イマである。

「変態という名の紳士ですよ」

口には出してないのだが、どうやら読心術はデフォルトらしい。

最近心を読まれる機会が多くてビックリだ。

「一応手当ではしておきましたが大丈夫ですか？」

「ありがとね。全然大丈夫だよ」

身体を見てみると本当に痛む部分どころか傷ひとつない。

流石は一流の魔法使いということだろうか。

「いえいえ、男の娘の身体に傷を残してしまうなんて紳士失格ですから。金髪赤眼の低身長ツリ目ロリータとは素晴らしいですね」

「すみません。その距離から一步も近付かないでください死ね」

感謝なんてしなければ良かったと落胆する。

アルビレオマジ変態。マジキモい。マジ死ねばいいのに。

ちなみに僕は日本育ちで日本語しか話せないけど、イングランドと日本のダブルだったりする。

「おやおや、嫌われてしまいましたか。ふふふ、しかしハーフだったとは更に素晴らしい」

マジ死ねよアルビレオ死ね。

てゆうかハーフって差別用語になってるらしいぞ。

全く気にしないけれどね。

とりあえずあの笑顔を絶望に歪ませたい感情を抑え込みながらベツドから立ち上がる。

軽く伸びをして身体をポキポキと鳴らす。

「さて、目が覚めたならナギから話があるみたいなのでこちらにどうぞ」

やれやれ。

それじゃあ、紅き翼との楽しい楽しいお話と行きますか。

僕は怠い身体を引きずりながらドアを開けて外に出た。

案内された部屋は同じホテルの少し広い部屋だった。

中にはベッドが二つ、テレビが一つ。

他にもキャビネットや電灯などがあつたりする普通の部屋だ。

どうやら旧世界も魔法世界もあんまり変わりはないらしい。

もちろん動力や効果の違いはあるのだろうけれど見た目は普通だ。

部屋の中にはナギ？スプリングフィールド、青山詠春、ジャック？ラカン、ガトウ？カグラ？ヴァンデンバーグ、フィリウス？ゼクト、そして案内してくれたアルビレオ？イマ、客人の僕の合計八人。

この人数でこの部屋は少し狭いが、タカミチ少年達がない分マシだろう。

「どうやら元気なようじゃな」

最初に話し出したのはゼクト。

シヨタな割に爺口調なのが気になる。

「まったく、ナギの馬鹿は……。すまなかったな零崎」

そして次は詠春。

頭を押さえながらナギを叱り付ける。

しかし詠春とガトウだけが常識人って苦労してそうだなあ。

「うつせえなあ詠春は……。わかってるって言ってんだろ」

「てゆうか話って何？」

このままだとナギと詠春の漫才が始まりそうな気配なので強引に話を変える。

「ああっ、そうだった。おい……。零崎だったよな？ お前、俺らの仲間になれよ。俺達も戦争終わらせる為に戦ってるんだ」

ここでテンプレでご都合主義な勧誘。

ナギと戦う前なら一も二もなく飛び付いてOKしただろう。

しかし、惨敗したのに仲間になるなんてあるはずがない。

今の僕は与えられた力だけで満足していた二流だ。

彼等の仲間に相応しくない。

確かにある程度なら蹴散らせるが一流相手だと話にならない。

弱い。弱い。弱い。弱い。
貧弱。軟弱。脆弱。最弱。

そんなどうしようもなく弱い僕にも、プライドというものはあるのだ。

レベル1でレベル50の勇者パーティーに入るなんて足手まといで惨め以外の何でもない。

「ナギ、僕は弱い。君と戦ってそれを思い知った。だから君達と並び立てる強さを手に入れるまでは仲間にはならない。……だけど僕が君達と支え合える実力になった時、その時は僕を仲間に加えてくれないかな？」

僕は静かに情けない言葉を告げる。

もはや僕の中から慢心は消えている。

「おう、待ってるからなっ！」

ナギの笑顔は眩しくて、まるで人類最強のように自信に溢れた表情だった。

そしてこの時が流されるままだった僕に目標が決まった瞬間だった。

それから僕は紅き翼の面々に別れを告げ、大小関係なく様々な戦場に訪れた。

もちろんたまに殺してしまうけれど、基本的には不殺主義を貫いた。

身体能力の強化、戦い方の観察、魔法の強化を中心に、とにかく実戦を重ねた。

気付いたのはやはり僕は魔法を3つしか使えないという事。

空を飛ぶのも無理。

障壁も無理。

千の雷なんか問題外。

かんかほう
感卦法？ なにそれ食べれるの？と言った具合だ。

魔力を身体強化、魔法の射手、シャボン玉以外に使えない。

しかし使えば魔力が増えていくのがわかったのだけは良いだろう。

そして無音拳や神鳴流なんかの魔力を使わない特技だがやはり無理だった。

才能というものが皆無だったのだ。

肉弾戦も我流でいくしかないだろう。

とりあえずナイフの使い方もしつかりせねばならない。

ちなみに紅き翼の面々とは戦場で会って模擬戦感覚で何度も戦った。

最初の内は全く歯が立たなかったが、最近ではななかいけると感じるレベルになってきた。

勇者パーティー入りはもうすぐだろう。

——なんてフラグを立てたのがダメだったのだろうか。

次の日紅き翼は世界の敵となった。

英雄から一転して裏切り者となった彼等。

僕はその足取りを追っている。

とりあえずあいつらが本当に裏切り者な訳ないし、騙されたのはわかる。

原作知識がある僕には状況が手に取るようにわかる。

という訳で困った時に恩を売ろうという作戦を考えて実行しようと思っていたのだが。

「——主と主の”紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

現在、原作の名場面。

やっと見付けたら最強の7人がどうのこうの言ってる瞬間だった。

さて、どうやって入ろう。

A：僕様ちゃんを忘れるなーっ！

B：へっ、お前等だけに良い格好させるかよ！

C：すいません、牛井まだですか？

D：いやー、昨日実質2時間しか寝てないわー。2時間しか寝てないわー。

……まともなのがねえ。

てゆーか意味がわからねえ。

まったく——

「——傑作ですね」

死ねよアルビレオマジで。

結局、あの後アルビレオのせいで見付かった僕は正式に紅き翼に参加し——タイミングは最悪だったけど——世界を敵にまわしながらも完全なる世界（コズモ？エンテレケイア）とやり合う事になっ

た。

「油断するなナギ」

「サンキュー、詠春！」

「ジャック、どっちが多く倒せるか勝負しようよ」

「はっ、俺様に勝てると思ってるのが愛識！？」

「ふふっ、私はジャック賭けることにしましょう」

「僕は愛識で大穴狙いじゃ」

「はぁ……お前ら、真面目にやれよ」

——こんな戦いの日々や。

「主は本当に馬鹿じゃな」

「うっせえよ姫さんっ！ こちとら魔法学園中退だコラ」

「はぁ、また喧嘩か……」

「妾は見えていて楽しいがのう」

「ちなみに僕は学校自体行っていないかなあ」

「零崎さんですか？ 僕も行っただ事ないんですよ」

「俺様も行つてねえな」

「低学歴集団じゃの」

「タカミチやアスナ姫達はこの戦争が終わったら学校にでも通わせ
てみるか？」

「愛識が行ったら壊滅しそうですけどね」

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよっ！」

「「「やめろっ！」「」「」

——こんな日常を過ごし。

「——さて、愉快に素敵に零崎を始めましょう」

「おらっ、千の雷（キリアキプル？アストラペー）！！」

「神鳴流奥義、真？大雷光剣っ！」

「ふふっ、楽しくなってきましたね」

「豪殺居合拳っっ！！！」

「馬鹿弟子はまだ魔力でごり押しじゃのっ……」

「羅漢適当に右パンチ！」

「《愛識ちゃん印の観光ツアーにご招待、ただし逝き先は地獄》み

たいなっ！」

そして仲間を増やして次の町へをやりながらついに最終決戦の日
まできた。

第四幕 殺人鬼の誕生日

『殺し名』という裏の社会で有名な七つの戦闘集団が存在する。

上から勾宮、闇口、零崎、薄野、墓森、天吹、石凧の7位までで構成されている集団なのだが、零崎一賊はその中で最も忌み嫌われている殺人鬼集団だ。

この世で最も敵に回すのを忌避される醜悪な軍隊にして、この世で最も味方に回すのを忌避される最悪な軍隊。

邪悪と冒涇の宝庫。

理由なく殺す殺人鬼。

血の繋がりでなく、流血で繋がっている一族。

一見ばらばらなようで、結束は固く、家賊に仇なすものは老若男女人間動物植物の区別なく皆殺し。

一般人として暮らしていた者がある日突然零崎の血に目覚めるといふ。

そして零崎ならお互いが零崎だとわかる。

もちろんこの世界には殺し名どころか零崎一賊も僕しかいない。

長兄にして唯一の零崎なのだ。

しかし運命というものは皮肉なもので、僕は誕生するはずがない
新たな零崎の、この世界で最初に生まれた零崎の誕生の瞬間に出会
う事となった。

記念すべき最初の私の家賊に。マイファミリー

ぜろざきかなしき
零崎叶識。

歓迎しよう、私の弟よ。マイブラザー

それは空が泣いているような雨の日だった。

その日はナギ達紅き翼とは別行動。

単独で完全なる世界に協力している奴らの殲滅を担当すること
なっていた。

「——さあ、皆さんにお待ちかねの零崎をプレゼントします」

いつも通りの零崎。

「うわっ、やめっ——」

「助けてく——」

いつも通りの命請い。

「この悪魔め！」

「呪い殺してや——」

いつも通りの罵詈雑言。

「やだっ、来ないでっ」

「だから俺は嫌だっって言っただんだ！」

そしていつも通り、零崎を終えた後は死屍累々の光景が広がっていた。

生き残りは僕一人。

仕事は今日も完璧。

「London Bridge is broken down,
Broken down, broken down, London
Bridge is broken down, My fair
lady」

一仕事終えて、鼻唄を歌いながらの帰り道。

嫌いな雨の中、傘も差さずに飛べない僕は歩いて帰っている。

「飛べない零崎はただの殺人鬼だ」

なんてくだらない事を言っていると、僕はおかしな気配を感じた。

初めての感覚だけど、これは間違いなく零崎の——家賊の気配。

有り得ない。

でも有り得ないなんて事は有り得ないってグリードさんも言ってたっけ。

気付いた時には僕は走り出していた。

瞬動も使わず、己の脚力のみで家賊目掛けて全力疾走。

びしょ濡れになりながらも渾身の力で雨の雑木林を走り抜ける。

そして森の中に小さな小屋を見付けた。

古くててばろい、でも温かみのある小さな小屋を。

ゆっくり近付き扉を開けると、そこには小さな少年が一人。

僕よりも幼い少年が一人だけいた。

——もちろんそれは生きている人間は、の話だけれど。

少年の周りには恐らく両親だろう人間の首無し死体。

少年は自分の手には不釣り合いな大きな包丁を赤く染めながら茫然としていた。

「やあ、何か良い事でもあったかい？」

僕が話し掛けると少年は初めて僕の存在に気付いたようで、その包丁を僕に向けて突き刺そうと突っ込んでくる――が殺人鬼歴は僕の方が長いのだ。

嘗めてもらっては困る。

慢心を捨てた僕に成り立ての一撃が通用するはずがない。

包丁を指で挟みそのまま叩き折ると、少年は折れた包丁を手放し、床に滑るように座り込んだ。

僕はその様子を黙って見つめる。

「僕の名前は零崎愛識。本名は南愛姫っていうんだけど、どっちかって言うと零崎が本名で南を偽名に使うかな。偽名をいちいち考えるのなんて面倒だしね。ちなみに君と同じ理由もなく人を殺す殺人鬼と、それに一応零崎一賊の長兄をやらせてもらってるよ。と言っても家賊はまだ僕しかないんだけどね」

少年はまだ混乱状態のようだ。

僕の言葉のマシンガンに頭がついていけない。

しかし僕は構わずに言葉を紡ぎ続ける。

「とりあえず君は零崎という名の理由なく息を吐くかのごとく殺す殺人鬼になった。これはおーけー？ まあ、つまり僕は君を勧誘しに来た訳だよ。だからさ――」

一呼吸入れる。

初体験するのは緊張するね。

「――僕の弟にならないかい？」

｝side：新たな零崎の少年｝

森の中にある村から離れた小屋。

俺は両親と三人で仲良く暮らしていた、仲良く暮らしていたはずだった。

そう、はずだったのだ。

気付いた時には包丁を持って、両親の首を切り落としていた。

意味がわからない。

確かに小さな家も、貧乏な家庭も、遊びに行くのに不便な場所も、不満はあげたらきりが無い程あった。

人間なんてそんなものだ。

今の自分が幸せなんて事に気付かずに更に幸せを求め、失った時にはじめて気付く生き物だ。

しかしだ。

何故自分は幸せな日常を自分で壊した。

何故自分は両親の死を悲しんでいない。

何故自分は両親を殺したのを当たり前のように感じている。

そんな混乱の中に彼女——後で聞いた話によると彼らしい——は来た。

殺人現場を見て「良い事があったかい？」なんて聞いてきて、いきなり切りかかれても平気で、何事もなかったかのように振る舞う。

そんな金色の女神様の名前は零崎愛識というらしい。

聞いた事がある。

黒き制裁、人類狂愛なんていろいろ呼ばれてる賞金首で、あの有名な紅き翼の一員。

何故彼は俺に——ってさっきから説明してるか。

理由なき殺人鬼、零崎一賊か……。

あはは、ごめんな父さん、母さん。

どうやら俺、質の悪い殺人鬼になっちゃったみたいだ。

意味不明で理解不能な言葉なのに、この人の言葉を聞くと安心してしまう。

自分の中にピースが嵌まっていく。

とりあえず今の俺に選択肢なんてひとつしかないよね？

だからこう言うしかない。

せつかく宛てもない人生に宛てができたのだ。

どうせ死ぬならこの人に着いて行ってみよう。

「よろしく姉ちゃん。とりあえず俺にも名前くれない？」

俺の零崎がこれから始まります。

Side：零崎愛識

よし、初弟獲得。

しばらくはナギ達と別れてこいつが生きていけるように鍛えるかな？

もちろん完全なる世界狩りもやりながらだけれど。

とりあえずは零崎一賊の掟とか関わったらいけない奴とか——流石に人類最強や人類最悪とかはこの世界にいないだろうけど——いろいろ教える事はたくさんあるね。

巫女子ちゃんネタとかも仕込んでおくべきだろうか。

優しく、厳しく、激しく、緩かに丁寧に仕付けてあげよう。

僕は殺人鬼は嫌いだけど家賊は好きだから殺して生かそう。

実験台は完全なる世界（零崎の敵）。

被験者は僕の弟（零崎の次男）。

担当者は僕（零崎の長男）。

真っ赤に彩って飾ってさしあげましょう。

誕生日パーティー（愉快的連続殺人）の始まり始まり。

あ、でも一つだけ言っておかないと。

「弟よ、僕は男だからお兄様と呼べ」

「えっ!？」

間抜けな顔の弟を見て、僕は久しぶりに楽しい気持ちになった。

第五幕 最終決戦

現在位置は、完全なる世界の本拠地である世界最古の都、王都オスティアの空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

僕達、紅き翼はついに最終決戦間近まで来ることができたのだ。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の秘密結社なんてそんなもんだ」

ピリピリとした緊張感の中ナギとラカンが言葉を発する。

僕はその中でも緊張なんか全くしていない。

ナギが勝つ。僕達が勝つ。

正義が勝つ。人間が勝つ。

今回の決戦は予定調和の通過イベントみたいなものだ。

クリアする前から勝つとわかっている。

正義は必ず勝つ、逆に勝たなければ正義ではない。

……僕は殺人鬼っていう存在自体害悪だけだね。

「ナギ殿！ 帝国？連合？アリアドネー混成部隊準備完了しました」
セラスの言葉に一同身を引き締める。

さあ、いよいよ最終決戦。

てゆうかこれ終わったら何をするか予定が全くない事に今更気付いてしまった。

そろそろ殺人衝動もある程度抑えられてきたし——と、言ってもたまに紅き翼を殺しそうになることもあるけど——あの人が言っていた未来に行くのだろうか。

ネギ少年はあんまり好きではないし、中学生に興味ないからあんまり嬉しくない。

僕の好みは年上だしね。

……今の僕には年上だけど。

「それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願い出来ないでしょうかっ!？」

「おあ？ ああ、いいぜ。それくらい」

セラスの願いを快く引き受けるナギ。

モテモテナギきゅんには僕と違って女性ファンがたくさんいる。

殺人鬼にファンがいたら驚くけどね。

てゆうか最終決戦前にサインとか何考えてるのだろうこのバカ女は。

年齢の数だけバラバラに解体してあげたい気分になってくる。

「ふふっ、嫉妬は醜いですよ?」

アルビレオが微笑みながら僕を宥める。

死ねアルビレオ死ね。

てゆうか嫉妬じゃないから。

「おやおや、そうですか」

変わらぬにやけ面で緊張感のカケラもない様子のアルビレオ。

そういえば、なんだかんだで一番アルビレオと仲が良い僕。

よく二人で殲滅に行ったりした。

こいつは女装勧めてくるから僕としては鬱陶しいのだけどね。

「てゆうか僕は昔からガトウみたいなワイルド系目指してるからね」

「無理じゃな」

「無理だろ」

「無理だな」

「アイドル系ですか？」

僕の言葉に、ゼクト、ジャック、詠春が口を揃えて即座に否定し、アルビレオがわざと聞き間違える。

アイドル系のガトーってなんだよ。

マジでアルビレオ死なないかな。

人間は愛してるけどアルビレオみたいな変態は例外。

「おや、それは残念です」

ちつとも残念そうではない様子でにこやかに話すアルビレオ。

死ねアルビレオ死ね。

「そういえばガトウは？」

「連合と帝国の正規軍の説得だ。お前は話を聞いてなかったのか？」

呆れた様子で口を開く詠春。

僕は苦笑を浮かべて平謝りをする。

「てゅーかガトウは最後まで苦労人ポジションだなあ」

なんて呟いているとサインを終えたナギが話し掛けてくる。

「そろそろタイムアップだな」

「ええ、彼らは既に『世界を無に還す儀式』を始めています。世界の鍵『黄昏の姫御子』は彼等の手にあるのですから」

ナギの言葉に真剣な表情で返答するアルビレオ。

やっぱり間に合わなかったか。

正直外の敵の数だと連合？帝国？アリアドネー混成軍じゃ足りない。

「外の敵は頼んだぞ。愛識」

ナギは少しも心配していない表情で僕に話し掛ける。

正規軍が間に合わなかった時点で僕の担当は外と決まったのだ。

「しくじらないでよ、みんな？」

「誰に言ってるんだよ」

僕とナギの言葉にみんな自然と笑みが零れる。

無駄に自信满满、けれどそれに見合った実力を持つ若き英雄達。

断言しよう。

紅き翼は最強だ。

その翼を落とす事なんて、誰にもできはしない。

「ああ。よおっしつ、野郎共。行くぜっ!!」

ナギは言葉と同時に飛び出して、それにジャック、詠春、アルビレオ、ゼクトが続く。

もちろん僕も戦闘態勢だ。

今、紅蓮の翼が空を舞う。

撃ち落とせる自信があるならかかってこい。

「さあ、哀れな弱者達よ。愉快に素敵に零崎を始めさせてもらおうか。魔法の射手？連弾？氷の392矢っ!!」

僕の魔法が確実に紅き翼の敵を撃ち落としていく。

「ほらほらほら、どうせなら全力でかかってきなよ!!」

僕は叫ぶと戦場に似合わない可愛らしいシャボン玉が出現する。

そして悪魔達を喰い散らかしていく。

味方には頼もしく敵には恐ろしい球体の魔法が躊躇も遠慮もなく噛み殺していく。

飛べない僕は接近戦で混成軍を助ける事はできないが、普通の魔法使いのように遠距離からならこの場の誰よりも何よりも強い自信がある。

その時一匹の悪魔が僕等の船に乗り込む。

そして近くにいたセラス目掛けて爪を振るう。

「きゃっ——」

悲鳴をあげるセラス。

魔法を使う暇もないようだ。

目を閉じて衝撃を待つ。

しかし彼女に悪魔の一撃が届く事はなかった。

「僕の目の前で味方を傷付けられる訳にはいかない。後で、ナギ達に怒られるのも嫌だしね」

——七閃。

懐から取り出したナイフで悪魔をバラバラに切り裂く。

目を開いたセラスは驚きながら尻餅をついた。

「——さっさと家に帰れクソ悪魔」

ニヤリツと笑いシャボン玉で悪魔を弾き消し飛ばす。

それからセラスに手を差し出し引き上げる。

「あ、ありがとうございます」

「油断したら死ぬから気をつけてね」

そして軽く言葉を交わして持ち場に戻った。

うじゃうじゃと何体もの悪魔が僕達から逃げ回る。

「踊れ踊れ。ちょっとばかり早いけどダンスパーティーの幕開けだっ！」

弾き、爆ぜ、消え、凍てつき、燃え、痺れ、切り刻まれ、悪魔達の数はどうどん減っていく。

脆弱、軟弱、貧弱っ！！

まるで手に入れた力で強者を気取っていた昔の僕のようなようだ。

今の僕と昔の僕は違う。

友情、努力、勝利というジャンプ漫画のようなストーリーの中で僕は自分を鍛えた。

世界を、人間を諦めた奴らに負けるはずがない。

悪魔だろうが何だろうがかかってこい。

手加減も油断もせずに全員纏めてこの世から愉快に消失させてやる。

そして混成軍と僕で完全なる世界狩りを続けていると、墓守り人の宮殿から大きな爆発音が聴こえた。

「ナギ達が勝ったのかな」

僕が呟くとセラスは嬉しそうな表情をする。

しかしそれに続いて宮殿から光が溢れてきた。

敵の儀式が完成したんだろう。

僕が光の原因を尋ねるセラスにそう言うと彼女は慌て出した。

でも心配はない。

《諦めるなお主等！ それでも世界最強か！？》

——神様は主人公達を見放さないのだから。

《こちらスヴァンスヴィート館長リカルド！！ 助太刀するぜ！！》

まあ、僕は無神論者なんだけどね。

会った事があるうと信じなければ一緒さ。

続々と仲間オスティア、連合、帝国の面々達が駆け付けて紅き翼

に激励を飛ばす。

《魔導兵団 大規模反転封印術式展開！！》

そして大規模な術式が発動する。

こうして世界は救われた。

——1人の想いと1つの国と、その国の人々の犠牲の上にだけ
れど。

何もかも犠牲なしで全てが全て上手くいくなんて戯言以外の何
もない。

僕はこの後にどうなるか知っているのだ。

醜い大人による罪のなすりつけ、哀れな民の救われない生活、平
和を目指した女性の生贄、答えを探す若き英雄、世界と一人を天秤
にかけて、物語はまだハッピーエンドを認めてはくれない。

第六幕 零崎愛識の消失

大歓声に包まれる式典。

戦争が終わった喜び、世界が救われた喜び、救った英雄が目の前にいる喜び、これから幸せになれる権利を手に入れた喜び、連合も帝国も大人も子供も関係なく、今この場にいる誰も彼もが歓喜に浸っている。

望まれぬ戦争が終わった喜びをみんなで分かち合っている。

千の呪文の男【ナギ？スプリングフィールド】

千の刃の男【ジャック？ラカン】

旧世界の侍マスター【青山詠春】

そして僕、黒き制裁【零崎愛識】

ゼクトは消えて、アルビレオとガトウはサボっているが、民衆にそんな事を気にしている人はいない。

僕達、紅き翼は魔法世界に知らぬ者なしの英雄となった。

その英雄が目の前にいる。

ただ、それだけのことなのだ。

「おい、詠春！ 見ろよ、すげえぞっ！」

「馬鹿やめろっ」

「こんなぐらいで緊張してんじゃねえよ」

「ナギやラカンみたいな単細胞と詠春と一緒にしたら可哀相だよ」

「ああ、んっ？」

馬鹿みたいに騒ぐナギとラカンに、緊張で潰れそうな詠春。

そんな三人に笑いながら話し掛ける僕。

民衆にはそんな馬鹿な会話は聞こえていないようで、羨望の籠った瞳で僕らを見つめている。

ちよつと恥ずかしいが嬉しい。

僕はそんな気分の中、柄にもなくはしゃいでいた。

そういえば最終的に200万にまでなっていた僕の賞金も消えたらしい。

英雄が賞金首というのはおかしいので抹消してくれたようだ。

もちろんそれにはガトウも関わって必死に働いてくれたことも追記しておく。

老害だけでは僕を生贄に捧げようとしたかもしれないしね。

うむ……英雄になれたし、零崎をある程度抑えられるようにもなつたし万々歳かな。

「おい、愛識」

そんな事を考えていると、頭上からナギの声が降ってきた。

いつものナギらしくない少し焦りを含んだ不思議そうな声だ。

「何？ 言っておくけど僕は手を振ったりとかする気はないよ？」

僕は呆れを含んだ声で返答する。

しかしナギは冗談を言っている様子もなく続け様に言った。

「いや、お前なんか透けてんぞ？」

「「「はあ？」「」」

僕とジャック、詠春は「何言ってるのこいつ？」みたいな表情でナギを見る。

人間も殺人鬼も幽霊のように透けたりするはずがない。

そんな当たり前の事を忘れてしまったのだろうかこの馬鹿は……
って、あれ？

「マジで透けてるっ!？」

一応手の平を確認してみると本当に身体が透けていた。

しかも、どんどん薄くなっていくようだ。

そして僕は悟る。

つまりここで僕の過去の冒険は終わりのようだ。

「あーあ、タイムリミットか」

誰にも聞こえないように小さな声で呟く。

民衆も僕の様子に気付いたようでざわついていた。

この後はオスティアを救ったり、戦災復興したり、アリカ姫を助けたり、テオドラに帝国を案内してもらったり、ガトウについて行ったりいろいろ予定があっただけだなあ。

「おい、愛識っ！？」

詠春が焦ったように身体を揺らそうとする――が、しかし僕の身体は簡単にすり抜けて詠春は反対側に倒れ込んでしまった。

「悪い、紅き翼（お前ら）。タイムリミットがきたみたいだ。実は僕って異世界人で未来人で超能力者で宇宙人なんだよね」
まほうつかい　ちきゅうじん

僕がふざけながら話すと、ナギ達はぽかーんとした表情でこっちを見る。

ハルヒの願望3つ叶えられる僕がそんなに珍しいのだろうか。

僕は構わずに言葉を続ける。

「ナギ、なかなか楽しかったよ。これから大変だと思うけど頑張れ。再会したらまた戦おうねっ。リベンジをまだ果たしてないんだから

さ」

「詠春はいつもナギのお世話お疲れ様。結婚式も子供の主産も祝えないけど、まあ許せ。その内挨拶しに行くから美味しいケーキとか用意しておいてくれ。あ、苺のやつがいいなあ」

「ジャックはいつまでも馬鹿で元気なままでいてね。お前の性格が真面目なんかに変わったらつまんないからね」

ナギ、詠春、ラカンの順番に最後のメッセージを告げていく。

民衆も含め、みんな展開についていけないみたいだ。

でも時間がないから待つ事はできない。

「それから他のメンバーに伝言。アルビレオには死ぬ。ガトウには死ぬな、タカミチとアスナ姫を立派に育てろ。テオドラにはごめん。帝国案内してもらった約束は何年か待たせる事になりそう。アリカ姫には貴方の選択は間違いなく正しかった。僕はそう思う。だから自分を責めないでね」

言葉と共に消失がどんどん加速していく。

もう足の先が見えなくなっていて、本当に幽霊になった気分だ。

「おい、待てよっ！！」

ナギが必死の形相で叫ぶ。

ふと見回すと詠春もラカンもまだ何かを言い足そうな、悲しそう

な、怒鳴り出しそうな、そんな表情だった。

今生の別れじゃないんだから、そんな顔するなよ馬鹿。

「完全なる世界の人形達に会ったらお前等の願いは絶対に叶わない
って伝えておいて」

最後のメッセージを告げる。

これはフェイトに向けてのメッセージのようなものだ。

立場が違うもう一人の主人公のような彼に向けての僕からのメッセージ。

「……愛識」

悲しそうな表情の詠春。

何故か今にも泣き出しそうだ。

じゃあね、詠春。

「よし、そろそろお別れだ。未来でまた会おう。それまではいばい
っ！」

その言葉を最後に僕は式典の会場から姿を消した。

後に残ったのは楽しいはずの式典なのに静寂だけだった。

そして舞台は一転真っ白。

上下左右真っ白で影もなく、浮いているか地面を踏み締められているかも、広いか狭いか長いか短いかもわからないただ真っ白なだけの空間。

純白に包まれた世界。

まさか二度も此処に来るとは思ってもしなかった。

「やあ、無神論者」

そしてその世界に音が響く。

男かも女かも子供かも大人かも老人かもわからない、けれど澄んでいて優しく麗しい声だということが心に響いてくる声が広がる。

「やあ、自称神様。縁があつたみたいだね？」

僕は軽やかに挨拶を交わす。

久しぶりに会ったのに、久しぶりに会った気がしない。

いや、姿は見えないから会ったとは言わないけれどそんな感じなのだ。

「本来はそのまま未来に送るつもりだったんだけどね。少し君に感

想を聞きたかったんだよ」

神様は僕の言葉に楽しそうに答える。

僕はそれを聞いて疑問を浮かべた。

「感想？」

「そう、感想だ。虚像の世界の感想。新たな家賊の感想。戦友との冒険の感想。殺人鬼として生きてみた感想。君があの世界に感じた感情が知りたい」

男にも女にも子供にも大人にも老人にも聞こえる声が僕に尋ねる。

まるで好奇心旺盛な子供のように純粋な感情で聞き出そうとする。

「決まってるじゃん、そんなのさ」

僕は表情を変えて呟いた。

たぶん神様にもその表情だけで伝わるだろう。

それは僕にしては上出来な表情だったのだからね。

「そうだね。安心したよ」

優しくも厳しくも聞こえる声はそう言って笑った。

心底安心して言ったのではないだろう。

魚の小骨が取れた程度の小さな小さな疑問だったのだろう。

声からはそんな気持ちが伝わってきた。

僕に物凄く関心がある訳ではないようだ。

別に特別になりたいとは思わないけどね。

「それじゃあ、そろそろお別れだ」

神様は突然告げる。

この為だけに、この時間の為だけに、僕を自分の居場所に招き入れたらしい。

「ばいばい自称神様」

僕はそれを聞いて静かに言葉を紡ぐ。

それに対して神様の言葉も同じようなものだった。

「さよなら無神論者。縁があつたらまた会おう」

神様は短く告げる。

それと同時に初めての時と同じように気が遠くなっていく感じがした。

視界が暗転していく。

そんな中、白い空間に笑顔の誰かが見えた気がした。

第七幕 真祖の吸血鬼

《あなたが殺されている時がありますか。あなたが殺されている条件があれば、それを聞かして下さい。あなたがどんな時でも殺されるのがいやなら、少なくともあなたは人殺しをしてはいけない》
僕には殺されている条件はあるが、いついかなる時でも殺されてもいいという訳ではない。

人殺しは罪。

知っているし、僕もそう思う。

しかし僕は殺す。

理由もなく、容赦もなく、後悔もなく、ただ、ただ殺すだけ。

人間というものは本来、同種を殺せないという話を聞いた事がある。

ドラマや小説のように頻繁に連続殺人が起きないのは、それが理由なのではないだろうか。

禁忌を何度も破れる者は人間ではない。

おとなしく死んだ方がいいだろう。

D・L・L・Rシンドローム（殺傷症候群）という自分や他人を傷つけずにはられない、自動症の一種がある。

いや、自動症の最高峰と言った方が正確かもしれない。

とにかく、埒外に最悪で、問題外に性質の悪い、とびつきりに凶悪な精神病。

存在そのものが疑わしいほどに稀な精神病だが、零崎は全員それじゃないかと言われている。

しかし、それがどうだというのだろう。

病気だから殺しました。

そんな跡付けの理由など、どうでもいい。

どんな理由があろうと殺す事は悪。

殺されそうになったから殺したなんていうのも悪。

戦争で殺しても悪。

安楽死なんてのも悪。

「君はそついうのどう思う?」

目の前の吸血鬼に話し掛けてみる。

何の警戒も持たず、待ち構えていたら思わぬ大物が釣れてしまった。

「……いきなり何だ?」

吸血鬼は怪訝そうな顔でこちらを見る。

その瞳には正体不明の敵をどう排除するべきかという警戒心と、

どうせ自分には敵わないだろうという慢心に満ちていた。

ああ、アルビレオが読心術ばかり使うせいで心を読まれるのが当たり前になってたよ。

本来はバレないように読心術を使うのなんて無理なのだ。

魔法なら魔力でバレてしまっし。

「ふんっ……まあいい。貴様も運が悪かったな。私が担当する警備の日に此処に侵入するとはな」

目の前の吸血鬼は鼻を鳴らす。

僕の態度がそんなに不満だったのだろうか。

さて、現状説明。

目の前にはロリ吸血鬼こと、エヴァンジェリン？A？K？マクダウェル嬢。

恐らく現在地はマホラだったか。

原作の舞台となった埼玉にある学園都市だ。

そしてその世界樹という巨大な樹の前に僕は飛ばされていた。

いつも通りの赤と黒の上下の服に黒いジャケット。

ローブは何故か地面に落ちている。

魔法発動帯の指輪にいくつかのナイフもきちんとある。

身体は十四歳ぐらいに成長しているが、何故か違和感はない。

うむ、どうやら問題はないようだ。

「さて、名前ぐらい名乗っておいてやろう。我が名はエヴァンジェリン？A？Kマクダウェル。誇り高き真祖の吸血鬼にして、最強の魔法使いだ」

エヴァンジェリンは余裕そうに笑みを浮かべながら自分の名を告げる。

流石ネギま一の慢心王。

くしゃみに負けた幼女だ。

自分が負ける事など微塵も感じていないだろう。

実力がわかっていない馬鹿ではなく、実力をわかっているのに慢心している。

最強種としての誇りなのだろうか。

「僕の名前は零崎愛識。ちょっとお茶目な殺人鬼さ」

それに対して僕は油断も慢心もしない。

もうナギの時のような惨敗は懲り懲りなのだ。

戦場では、雑魚ですら油断すると僕を殺せるような戦いをするところがあつた。

人間を嘗めるとろくな目に合わないのはもうわかりきっている。

そしてお互いに距離を保ちながら相手を睨む。

「零崎、……あの殺人鬼集団か。しかも行方不明だった長兄にして英雄殿とはな。クッククク……、今夜は楽しめそうだ。茶々丸を置いてきて良かった」

エヴァンジェリンは少し考えるようなそぶりをし、すぐに気付いたように僕の情報をすらすらと述べる。

しかし英雄だと、学園に悪意を持つ者ではないとわかっていて戦う意味があるのだろうか。

それに集団って、僕がいない間に叶識の奴が勧誘でもしたのだろうか。

——今、何人ぐらいいるんだろ？

まあいつか。

それよりも目の前の吸血鬼だ。

確かナギに魔力を封印されてるくせに、パートナーなしで僕と踊るつもりなのだろうか。

そこまで慢心していいのだろうか。

「魔力は持ちそうかい？ 吸血鬼」

僕は一応確認を取る。

せっかく最強クラスと戦えるのだから、自分を磨く為に万全の状態で戦いたい。

「嘗めるなよ殺人鬼。貴様こそ私についてくれるかな？」

吸血鬼はフラスコを揺らしながら、愉快そうに笑う。

いいだろう。

その慢心して長く伸びた鼻っ柱をへし折ってやろうではないか。

「レッツパーティー！！」

ふざけた言葉と共にニヤリと笑うと、僕は魔法の射手を吸血鬼に放った。

まずはお手並み拝見に17矢。

普通の魔法使いでも余裕でこなせる初心者レベルの魔法。

それを吸血鬼は簡単に防いだ。

レフレクシオー
氷盾。

フラスコを媒介に発動したそれは、僕の魔法の射手を軽々と消し去った。

だけど、これはほんの籠手調べ。

僕はここからが本番だと宣言するかのように、ナイフを手に持ち相手に近付く。

「リク？ラク？ララック ライラック 来たれ氷精 爆ぜよ風精 氷爆（ニウイス？カースス）！！」

しかし吸血鬼もただ待っている訳ではない。

呪文を唱えて、僕に向かって魔法を行使してきた。

凍気と爆風が僕を包み込もうとする。

しかしそれは無駄に終わった。

既に身体強化も完了した僕の身体には届かなかった。

横っ飛びで避け、直ぐさまエヴァンジェリンの方へ方向転換。

僕は速さには自信があるのだ。

もちろん、エヴァンジェリンもあれで仕留められると思ってなかったように、追撃を加えてきた。

人形使いらしく糸を使った攻撃。

複数の糸が僕を搦め捕ろうと、切り裂こうと向かってくる。

確かに素晴らしい技術だ。

何年も磨き抜かれた、極みに達している攻撃だ。

しかし僕には通用しない。

僕はあらかじめ彼女の攻撃方法を知っていて、彼女は僕の攻撃方法を知らない。

魔力も封印されていて、手札も相手に知られているのだ。

これほどの八百長試合はないだろう。

ハンデにハンデを重ねた接待試合のようなものだ。

だからこそ僕はすぐに次の行動に移せた。

糸を切断。切断。切断。切断。

月に反射してきらきらと光るバラバラになっていく糸。

「なっ——！？」

ここまで簡単に突破されるとは思っていなかったのだろう。

吸血鬼は驚愕して驚きの声をあげている。

僕はその隙をついて、吸血鬼の長い髪を掴み首を切り落とした。

——はずだった。

そう、そのはずだったのだが僕の手にはナイフはなく、彼女の首も未だに健在だった。

「……久しぶりに会ったのに変わりませんね」

横の方から声が聞こえてきた。

呆れを含んでいるが、歓喜の感情の方が大多数の割合を締める声が聞こえた。

僕のナイフを弾き飛ばした技に覚えがある。

——居合拳。

この学園には使い手は一人しかいないはずだ。

ガトウ？カグラ？ヴァンデンバーグの弟子にして紅き翼の一人。

「久しぶりになるのかな。元気だったかいタカミチ？」

僕はにこやかに笑う。

煙草が似合う年齢になったかつての少年であり、現在の中年。

高畑？T？タカミチがそこにいた。

「お久しぶりです、愛識さん」

タカミチはニコニコと気持ち悪い顔で僕に言葉を告げる。

僕は今、笑顔のオッサンの案内で学園長室まで歩いていった。

後ろには不機嫌なロリ吸血鬼とそれを心配そうに見つめる従者の口ポ。

——なんだろうこの集団。

「なんかタカミチが援交してるみたいな感じだね」

「……勘弁してくださいよ。愛識さん」

流石のタカミチもこれには苦笑い。

教職員として成人男性として、ロリコンの烙印を押される事は望んではないらしい。

ゴスロリ服の金髪ロリ。

中性的な金髪ショタ。

緑髪のメイド服口ポ。

煙草を吸う髭のオッサン。

当事者でなければ、絶対に関わりたくはない集団なのは客観的に考えなくてもすぐに理解できる事だった。

「そつえばみんなは何してんの？」

僕は突然思い出したかのようにタカミチに尋ねる。

一応原作知識はあるが確認というやつだ。

それに対してタカミチは静かに答える。

「ナギは死んだって言われてますね。詠春さんは京都の関西呪術協会の長をしていますよ。アルは行方不明でラカンさんは魔法世界にいるのはわかってます」

淡々と告げる言葉に落胆する。

……詠春以外行方不明かよ。

「ナギはまあ死ぬはずないから大丈夫でしょ。ガトウは？」

先程詳細を教えられる事がなかった人物についても聞いてみる。

原作知識だと死んでしまうのだが。

「それが……」

「……そっか」

タカミチは一瞬寂しそうな表情を浮かべてポツリと呟いた。

僕はその言葉で全てを理解した。

やっぱり死んじゃったか。

あいつの煙草の匂いは好きだったんだけどなあ。

なんて、悲しくも哀しくもないのに憐れむかのように心の中で呟く。

「タカミチ。煙草１本ちょうだい」

僕はふと思い付いた事をする為にタカミチにお願いをする。

昔は僕が何かタカミチにお願いするとガトウが「あんまり虐めたりするんじゃないぞ」なんて、呆れ顔で言ってたのを思い出してしまった。

「吸うんですか？」

「吸った事はないけど、僕が吸ってたらガトウが頭を押さえながら説教してくるような気がしてさ……。なんていうか浸りたいのだよタカミチ少年」

タカミチは不思議そうに尋ねるが、僕は直ぐさま肯定する。

天国は信じてないからお墓参りはいかないけど、この煙草を君に線香替わりに捧げよう。

タカミチから煙草を受け取り、火をつけてもらう。

——赤い紅い朱い。

オレンジ色に燃え盛る小さな火種が紙で包まれた草に移る。

僕はそれを口元に運び、大きく息を吸い込んで肺に入れた。

「ごほごほっ……、まずいねこれっ。ガトウもタカミチも馬鹿じゃないの?」

すると、僕は直ぐさま噎せる事になった。

はじめて煙草を吸うのだからこうなる事はわかっていたのだが、どうしてもやりたくなってしまったのだ。

受け入れる事には時間がかかる。

どうやらそれは悲しみだけの問題ではないようだ。

タカミチの方を見ると目につつすらと光る涙が見えた。

彼にとっては一番尊敬している自分のただ一人の師匠なのだ。

悲しみも人一倍だろう。

デスメガネの目にも涙だね。

まあ、もともと僕は今回の事を誰彼構わず言い触らすつもりはない。

むしろそんな事を言い合う友達とかも知りはない。

彼の名誉の為にここは煙が目に入ったせいということにしておいてやろう。

だから存分に悲しむといいや。

第八幕 学園を統べる者

それからタカミチに僕が消えた後の話をいろいろと聞いた。

オスティアの崩壊。アリカ姫の処刑。ナギ達の救出劇。京都旅行。ガトウとアスナ姫との旅。ガトウの最後。アスナ姫の記憶封印。詠春の結婚と子供の事。麻帆良での学生生活。魔法世界のその後。警備員としての日々。

「記憶封印か……。僕としては記憶が失くなる＝死ぬことだから反対だけど、ガトウの遺言なら仕方ないね、デスメガネ」

「そう言ってもらえると——ってなんで知ってるんですかそれ!？」

「僕は何でも知っているよデスメガネ」

僕の言葉に一瞬苦い表情を浮かべるが、デスメガネと聞いて途端に態度を変えるタカミチ。

麻帆良に来たばかりの僕がその名前を知っていることがかなり意外だったらしい。

ちなみに本当は知っていることだけ知ってるんだけどね。

英雄の息子の歩む困難な人生とか。

デスメガネがアスナ姫に告白される事とか。

「おい、零崎」

そんな風に談笑していると、後ろからロリババアに呼ばれた。

「零崎だと複数人いるから愛識でいいよ」

それに対して僕はフレンドリーに話し返す。

友情に熱い殺人鬼を目指してるからね。

「そんなことはどうでもいい。貴様はナギから私の封印について聞いていないのか？」

本当にどうでもよさそうに切り捨てる吸血鬼。

そして自分を何年も悩ませている問題について僕に尋ねる。

僕は本来なら封印されている事実すら知らないはずなんだけどね。

「知らないよ。僕は魔法世界の式典の後すぐに此処に来たからね。むしろナギともついさっき話してたような心境だから」

吸血鬼の質問に正直な気持ちで返答する。

過去と現在で移動する間に挟まれた時間は言う必要はない。

まず、世界移動の話自体、誰にも言っていないことなのだから。

「——ちっ」

僕の答えに満足出来なかったのだろう。

吸血鬼は舌打ちして、そのまま黙り込んだ。

その従者は「マスター」と小さな声で心配そうに尋ねる。

僕に呪いは解けないし、そういう知識すらない。

僕は魔法学校中退のナギよりも魔法について知らないのだ。

魔法は身体強化と魔法の射手とあのシャボン玉しか使えないし、初級の火を出す事すら無理な僕に馬鹿の馬鹿魔力で無理矢理封印した呪いなんて解けるはずがない。

そういうのはアルビレオやゼクトみたいな本物の魔法使いの担当なのだ。

僕様ちゃんには解決できないよ。うにー。

……こほんっ。

閑話休題。

そんな風に歩いていると気が付いたら麻帆良学園の女子中等部エリアの校舎内に入っていた。

……あの滑瓢めうりひょう、女子中等部のエリアに学園長室を作るとか変態なのだろうか。それとも孫馬鹿なのだろうか。

孫馬鹿ならまだ許せるからそっちの方がいいのだが、もし変態でロリコンなら救いようがなさすぎてこの学園を壊滅させたくなくなってしまう。

そしてそんな思考を繰り広げていると、漸く学園長室前のドアまでたどり着いた。

コンコンコンとタカミチが3回ノックをして扉を開く。

「失礼します。学園長、零崎愛識さんをお連れしました」

タカミチはそう言って先に入る。

僕と吸血鬼主従もそれに続いて中に入ってしまった。

そして入った瞬間、視界に妖怪の総大将である滑瓢と呼ばれている頭が仙人のように長い老人がいた。

滑瓢は髭を撫でながらこっちを見ている。

頭長え……てゆーかなんかキモい。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

殺したら仙人殺しの称号か二つ名を貰えるかもしれないが、コレを殺すことで名が売れるなんて真っ平ごめんだ。

「ほっほっほ、ようこそ零崎愛識殿」

目の前の頭長爺が笑いながら僕に話し掛けてくる。

個人的な感想を言わせてもらえば笑い方も気持ち悪くて生理的に無理だ。

アルビレオより気持ち悪い人に会ったのが初めてで若干混乱してしまう。

前から原作で知っていたのに実際に見るとインパクトがヤバイ。むしろヤバイがインパクトだ。

意味不明な感想が頭を過ぎる。

そんな風に僕が混乱しているのも構わずに、滑瓢は構わずに話続けていた。

完全に聞き流している僕にはもちろん内容はわからない。

たぶん何かの話を真面目に話しつつ、頭の中で僕をどうやって利用しようか策略を巡らせているのだろう。

そういえば、妖怪、人間、殺人鬼、吸血鬼、ロボとこの場にいる者達は見事にみんな種族バラバラだ。

人間が一人しかいない部屋なんていくらファンタジーが当たり前な世界でも珍しすぎる。

「――で、引き受けてくれんかのう？」

「だが断るっ！！」

「ほっ！？」

滑瓢の話を少し聞いてみると何かを引き受けてもらおうとお願い

していたみたいなので、なんだかよくわからないけれど問答無用で断ってみた。

この僕が一番好きなのは断られるはずがないと思っている奴からお願いにノーと言うことだからね。

もちろん戯言だけど。

「愛識さんはどうせ聞いてなかったただだから大丈夫ですよ。学園長」

僕の言葉を聞いて失礼な事を言うタカミチ。いや、デスメガネ。

タカミチの言葉を聞いて滑瓢と吸血鬼の学園御長寿コンビは呆れている。

今にも頭を抱え出しそうな感じだ。

はあ、会わない内に随分と生意気になったじゃないか小僧。

「愛識さん。この学園で働いてみませんか？ 学園長は教師と夜間の警備をお願いしたいそうです」

そしてどうせ僕が滑瓢の話を真面目に聞くはずがないとわかったのだろう。

僕に向かって先程滑瓢が長々と話していただろう内容を短く纏めて話し出すタカミチ。

14歳の先生というのは法律的にアウトだろう。

また14歳で夜間の仕事も確かアウトだったはずだ。

この世界の日本には来たばかりなのだが、前の世界の日本と法律が違うのだろうか。

原作を読む限り確か同じはずだったが、治外法権のような麻帆良学園では関係ないか。

この麻帆良学園は魔法で生徒達を洗脳してる学園なのだから

それよりも教師をやるとしたら問題は知識だ。

前の世界じゃ高校1年生までの勉強しかしておらず、この世界では学校機関にさえ行っていない僕を教師にするつもりとは。

「やるね、滑瓢。最高権力者はやりたい放題なのか」

そう言って笑う僕。

もちろん怒ってなどはいない。

生徒が可哀相だなんて自己中心的な考えの僕は思わない。

可哀相と思う気持ちがあるなら、殺人鬼になった瞬間に自らの命を絶つと思う。

僕は正義の味方なんかではない。
むしろ存在自体悪の殺人鬼だ。

この学園にいる魔法使いは正義の味方を目指してるみたいだけど知らない。

矛盾してる部分には自分で気が付くべきだ。

……あれ？

僕ってアンチ小説とか好きだったのにいざ自分がその立場になると何もしないのか。

昔はオリ主みたいな立場になったら、英雄になって立派な魔法使いを目指す魔法使いを断罪して、生徒を守って、ネギ坊主をこれでもかってぐらい虐める、なんて妄想をしていた軽度の厨二病患者だったのだが現実と妄想は違うみたいだ。

「……まあ、いつか。その仕事引き受けてあげるよ」

僕は滑瓢の提案を受ける事にして肯定する言葉を伝えた。

現在の僕には予定も目標もないのだ。

詠春や家賊に会いに行くぐらいしかやることはないけど、詠春は2年生の修学旅行で会えるし、家賊には縁があつたら会えるだろう。

いや、何処に叶識がいるか全く検討がつかないし会える確率の方が低そうだね。

てゆーか今更だけど今が原作前か後どっちかすらわからない。

ネギ少年はいるのだろうか。

そんな事を考えていると丁度いいタイミングで滑瓢が話し出す。

「ほっほっ、そうか。なら君には1―Aをの副担任を担当してもら

おう。タカミチくんが担任だからいろいろ教えてもらつとええぞい」

その言葉を聞いて理解する。

つまり原作前ということだろう。

吸血鬼、ロボ、幽霊、魔法世界のお姫様、忍者、魔法使い、半魔族、純魔族、英雄の娘、侍、未来人などの濃いメンツと3年間過ごすなんて退屈しないで済みそうだね。

毎日楽しく過ごせそうだよ。

……何故かアルビレオが「傑作ですか？」なんて言っているのが聞いてきた気がした。

だからそれに一応答えておこう。

——戯言だよ。

第九幕 新任教師

それからの話、僕は正式に書類を作って中学校の教師となった。

偽造に偽造を重ね、戸籍に免許証に保険証に住民票などを嘘で覆い隠して作り、学歴を表では普通の学校をしている魔法学校から借り受け、完全に嘘と戯言で造られた僕を証明する手段が完成した。

滑瓢やタカミチは出生届けすらないストリートチルドレンレベルの僕の過去を気にしていたが「大切なのは何処から来たかより何処に行くのか。燃料と行き先が決まっていればそれでいいだよ」なんて無駄に格好良い台詞でごまかしておいた。

それから何故か一緒に着いてきていたエヴァンジェリンに「明日の放課後に家に来い」と誘われた後、タカミチに職員寮まで案内されて真新しい新鮮な匂いがするこれからのマイホームまで来た。

寝具どころか家具すらない部屋だ。

対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスの殺風景な部屋の方がまともな感じの生活感の全くない部屋。

「明日いろいろと運び込みますので、とりあえず今日はこれで我慢してください」

隣の家（タカミチの部屋らしい）から高そうな布団を持ってきたタカミチが苦笑いしながら僕を見ていった。

僕はそれを聞いて別段文句を言う事もなく、布団を敷いてくれた

タカミチにお礼を言い部屋から「また明日ね」と見送った。

紅き翼の逃亡者生活に比べたら屋根があってアルビレオがいない分随分と快適だ。

それに特定の住家をこの世界で得た事がない僕にとっては、とても嬉しい。

一人暮らしは自分の自由にできる自分だけの城を持てるということなのだ。

家具は明日タカミチが手配してくれたのが届くみたいだし、衣服や食料品や生活必需品は明日の帰りに適当に買えばいい。

仕事用のスーツは学園長が明日の朝に用意するみたいなので無問題。

つまり今日やることはもうない。

「明日は楽しく忙しくなりそうだなあ」

そう呟いて僕は布団の中に潜り込み眠る事にした。

予想よりも更に忙しい一日になるとは知らずに。

久しぶりにぐっすり眠れた次の日。

朝にタカミチに起こされて、タカミチの部屋でシャワーを借りた後で通勤し、学園長室でスーツを受け取り着替え、職員室で同僚に自己紹介をし、教師らしく伊達眼鏡をかけて、タカミチから生徒名簿を受け取り、意気揚々と1―Aに来た。

ここまでは何も問題なく大丈夫だった。

しかし眼前には明らかにトラップだらけで、ある意味歓迎している扉が控えていた。

苦笑いのタカミチに呆れ顔の僕。

「……すいません愛姫さん」

それを見て謝るタカミチ。

本当に申し訳なさそうだ。

ちなみに愛姫さんとは僕の名前だ。

零崎愛識という名は僕が思うより有名で危険で凶悪で醜悪で劣悪な名前なのだ。

英雄としてだけなら栄光と栄華と栄誉な名称だ。

しかし零崎一賊としての名前を知っている人間にとっては恐怖でしかない。

殺人鬼集団【零崎一賊】の長男。

英雄と讃えられる実力を持つ殺人鬼。

日常に紛れ込む非日常。

そんな物騒な名前を名乗る事はこの平和な学園では許されるはずがない。

だから零崎では珍しく偽名ではなく【南愛姫】という昔の名前を使うことにしたのだ。

「初日から先が思いやられるよ」

僕はこれからの日々を想像して小さく溜息をはいた。

同時に呟いた言葉は教室内の賑やかな声に掻き消される。

《首位独走のまま全力疾走、ただし残り30km》みたいな？

さて、いつまでもこのままじゃあれだろうからそろそろ教室に入ることにする。

ガラガラッ——。

扉を開くと同時に落ちてきた黒板消しを名簿で叩き落とす。

恐らく引っ掛けてコケさせる為に用意したであろう足元にある糸を靴で踏みつけ、落ちてきたバケツをまた生徒名簿で叩き飛ばし、最後にドリフのように落ちてきたタライをキャッチして教卓の隣に置く。

「「「「「おおっ」」」」」

その様子を黙って見守っていた生徒達は僕が無傷のまま教卓に辿り着くと完成をあげる。

他のクラスの迷惑になりそうな歓声だ。

それをスルーして僕は黒板に自分の名前を書いていく。

「本日付けでこのクラスの副担任になりました南愛姫です。至らぬ点がたくさんあるでしょうが、どうぞよろしく願います」

口角をあげてなるべく優しそうな印象を与えられるようにゆっくりと語りかける。

ニコツと営業スマイル。

それを見て聞こえる「可愛いー！！」という女子中学生達の声。

エヴァンジェリンなんかは胡散臭そうな顔していたけれど、まあ成功したのではないだろうかと思考する。

ちなみに身構えていたけれど、原作のネギ坊主のように揉みくちやにされることはなかった。

「はいはい、質問いいですか！？」

あさくら かずみ
朝倉和美。

出席番号は3番で報道部所属の通称【麻帆良パラッチ】と呼ば

れている生徒。

彼女が真っ先に挙手して発言してきた。

「ええ、どうぞ」

僕はそれに静かに言葉を返す。

「えーっと……、まずは簡単にプロフィールを教えてください」

「名前は南愛姫。年齢はタカミチより年上。性別は男。趣味は人間観察で、特技は料理。イギリスと日本のダブルなので髪や眼の色が違います。日本生まれ日本育ちなので、日本語は大丈夫というか得意です。尊敬している人物は人類最強。好きなタイプは自分に自信を持っている人。嫌いなタイプは嘘つき。担当する科目は英語ですが、タカミチ少年がいない場合のみになります」

僕が一気に自己紹介をするとタカミチより年上で男というのに驚きの声が上がった。

もちろん僕は身体年齢も精神年齢もタカミチより下なのだが、基本的に僕は基本的に性格的に不変的に嘘つきなのだ。

教員免許すら持ってないし、大学どころか今生では小学校にすら行っていない詐欺師の嘘つきである。

僕の言葉を信じる方が間違いで、騙された方が間抜けなだけだ。

「……えっと、高畑先生より年上というのは？」

「本当です。僕は生まれつき成長が遅い体質なのでこんな見た目ですが、タカミチ先生の少年時代の面倒をみてますから」

「そ、そうなんですか。あと、本当に男性なのでしょうか？」

「ええ、これも生まれつきのホルモンの関係で曖昧に見えるだけでれっきとした男です。何ならタカミチが証明しますよ」

朝倉は僕に困惑気味で質問を重ね、僕はそれを嘘偽りだらけで答える。

ちなみにタカミチが証明できるというのは一緒に温泉に入った関係ということだ。

しかし、触感を生やした女の子を中心とした生徒はそうは受け取らなかったみたいできゅーきゅーと叫んでる。

腐女子思考乙としか言いようがない。

てゅーか僕とタカミチが絡み合ってる本を書くなんて話を本人達の前で話すのはやめてください。

「えっと、じゃあ最後の質問をなんですが、このクラスで気になる人は？」

腐女子のざわめきを気にせず朝倉さんは僕に質問をしてきた。

……ふむ、気になる人か。

「キティちゃんかな」

僕はそれに対してごく自然に答える。

ちなみに理由は違いはあるが同じ鬼同士だからだ。

それを聞いて「誰それ？」と騒ぐクラスと、立ち上がり叫び出すエヴァンジェリン。

「誰がキティちゃんかあつ！ てゆうか何故貴様が知っている！？」

「アルビレオ？イマ」

「あの変態がああつ！！」

怒るエヴァンジェリンと無表情の僕と事態についていけないクラスメート。

もちろん知識は原作のおかげなのだが、確か原作でアルビレオが言ったのが最初だと記憶してるし一緒に問題はないはずだ。

てゆうかキャラ崩れてるぞ吸血鬼。

「アハハ……、ありがとうございました」

苦笑いで朝倉が話を締める。

いつも静かな同級生の豹変にちよつと引いた朝倉和美と1―Aの一同でした。

第十幕 人間の歡迎会

冬休み間近の授業というものは、皆やる気が出ないものだ。

僕も学生時代はもうすぐ冬休みという時期の授業は単位計算して、そのまま冬休み終わりまで休む事を真剣に悩んでいたぐらいだ。

しかし、これはあまりにも酷すぎるのではないだろうか。

目の前の光景を見て頭を抱えなくなる衝動を抑える。

僕は現在、タカミチの英語の授業を見学させてもらっている。

学歴詐称教師がぶつつけ本番で授業なんて、戯言なしじゃやっていけない。

僕は元々計画を緻密に立ててから行動するタイプだし、いきなり「じゃあ、お願いします」と任されて完璧にこなせる程の天才ではない。

授業を進める速度、一人一人の理解力、やるべき内容とやらずに済ませてもいい内容、授業を行う前に確認すべき事柄はたくさんたくさんあるのだ。

いきなりプリントを用意してやらせるなんて愚策で愚行だ。

それが最も優れた方法なら何処の学校もそれを採用しているというものだ。

だからこそまずは先達の授業のやり方を見てどうすればいいのかを考える。

教育実習すら受けてない僕は生徒よりも必死に授業を見ている。

タカミチが授業を行っているのは1―A。

つまり担任のクラスで最もやりやすいであろうクラスだ。

しかし先述したようにこれは酷い。

「ねえねえ、帰りにコンビニ寄ってかない？」

「いいよー。セブンイレブンの濃厚いちごオレに最近嵌まってるんだよねえ」

教員の話を中心に聞き流しながら、放課後の予定について話に花を咲かせる少女達。

「また彼氏ー？」

「はあ、次のデート何処行くか悩んでるんだよねえ」

授業中にも拘わらずに堂々と携帯を取り出しておそらくメールをしている少女とその少女をからかうようにニヤけながら話しかける少女。

「まだ1時間目なのに……」

「いやー、朝ご飯食べるの忘れちゃってさ」

更に呆れ顔の少女とそれに苦笑いで答えながら教師から隠れることもせずにお菓子を食べている少女。

「あらら、寝ちゃってるよ」

「起こさないようにね？」

更に更に惰眠を貪る少女とそれを起こさずに、むしろ優しく見守る少女達。

教員の立場になってみると、学生時代は当たり前だった行為がひどく不真面目に見えるから不思議というものだ。

立場を少し変えるだけで物の見方というものは180度変わってしまう。

いや、流石に僕の学生時代もここまでは酷くはなかったのだが。

原作で知ってはいたがこのクラスは本当に不真面目だ。

自由気ままに社会のルールに縛られる事なく自分勝手に自己中心的に行動する。

学園結界の影響だけではない。

叱り付ける事ができない教師。

ゆとり教育、PTA、モンスターペアレントなどなど。

教師にとって現代の教育では勉強しか教える事ができないのだ。

昔のように悪い事をしたら頭を叩いてでもやめさせ、生徒が健やかに清らかになるように育てていくことは難しい。

新田先生のように生徒に真面目に接して、嫌われようが態度を変えない先生はこの学園どころか今の日本の教育機関には少ない。

正直タカミチには出張なしで頑張ってもらいたいっていうか、むしろ僕が出張の方を担当したくなる。

もちろん真面目な生徒はいるのだが、お気楽な1―A、この前まで小学生だった彼女達には最初から期待するだけ無駄なのだろう。

親元を離れ、叱り付けてくれる大人が少ない中で育ち、性格を形成してしまったのだから。

ちなみにこのタカミチの授業での真面目筆頭は神楽坂明日菜。

好き好き大好き高畑先生愛してるな彼女はこの授業だけは真面目に受けているらしい。

他の授業はこんなにも真面目に受けてはいないのだろうと予測してみる。

それでも成績が悪いのには悲しすぎて涙を誘う。

もしや他の授業もちゃんと聞いているのに理解できないのだろうか。

アスナ姫は頭がずば抜けて良かったし、いろいろと才能溢れる子

供だったのだが、記憶封印で生まれ変わった少女はまるで全くの別人のようだ。

いや、記憶がないならやはり別人なのだろうけど、当時の面影が見た目以外ないのが悔やまれる。

アスナ姫は神楽坂嬢の現状を見て嘆くのだろうか。

もしくは幸せな日常を喜ぶのだろうか。

僕には全く検討もつかない。

教員の仕事とやらは副担任だろうが大変なようだ。

学生時代の恩師に感謝のメッセージを伝えたくなくなってしまった。

いろいろな授業の見学や書類仕事、今後の予定の確認を終えた僕は非常に疲れていた。

この後、キティちゃん宅で鬼同士の交流会をして、夜の0時に魔法使い達との歓迎会——という名の殺人鬼お披露目会——をして、警備の打ち合わせをして。

「……うわぁ、何時に眠れるんだろう」

僕は頭を抱える。

真面目に仕事なんかを頑張っている殺人鬼なんて滑稽で哀れな僕に、自称神様が何か嫌がらせてもしているのだろうか。

それとも2度も会っているのに無神論者なままの僕を見て、とうとう堪忍袋の緒がプリティでキュートなロリっ娘戦士のように切れてしまったのだろうか。

水樹奈々さんなら僕は歌唄ちゃんの方が好きなのだが。

そんな風にどうでもいいことを考えながら職員室から出て歩き出す。

「愛姫ちゃん！」

すると、後ろから声が聞こえた。

誰かが僕を呼んでいる！？　なんてアンパンのヒーローのような事を考えながら振り向くとそこには新体操部の馬鹿がいた。

名前は残念ながらまだ覚えてない。

いや、原作を知っているのだから忘れたと言っべきなのだろうか。

てゆうーか初日から愛姫ちゃんか。

僕は「私を苗字で呼ぶな。苗字で呼ぶのは敵だけだ」なんて言った記憶はないのだけど、親しみやすい雰囲気と彼女達とあまり変わらぬ容姿のせいでそう呼ばれることになったのだろうか。

「何かご用ですか？」

僕はとりあえず優しく笑顔を浮かべながら返事をしておく。

伊達眼鏡越しに少女を見つめる。

すると少女は笑顔のまま「ちょっと教室まで来て」と腕を掴みながらそう言って歩き出した。

ああ、歓迎会か。

僕は頭の中で予想を立て、少し嬉しい気分になる。

他の可能性としては、初対面で惚れられて告白されるなんていうのもあるが、確かにこの世界は漫画を元にした世界だが、僕はモテモテで最強なオリ主なんかではない。

チートでハーレムな最強物語が歩めないのはナギに負けた時に気付いたさ。

まあ年下に興味ないし、ハーレムは大嫌いだから別にいいのだけど、それだと少しネギまに登場する男らしくはないかな。

そもそも僕の物語が二次創作として存在するなら、今回のクラスでの歓迎会は人間の歓迎会、魔法使いの歓迎会は殺人鬼の歓迎会なんて題名がつくのだろうか。

紅き翼時代はどうなのだろう。

なんて自分を二次創作のキャラクターのように考えているといっ

の間にか1 - Aの教室の前まで辿り着いていた。

今か今かと静かに待ち構えているだろう少女達の為に僕は扉を開ける。

僕が誰かの為に行動するなんて戯言だけだね。

てゆうか今更だけど僕って戯言遣いの真似して戯言って言葉を使いすぎだね。

嘘や戯言だらけの生き方な僕が悪いのだけれど。

『愛姫先生、1 - Aによっこそーっ!!!!』

扉を開け一本教室の中に入った途端に鳴り響く歓迎の言葉。

少女達の声が重なり合い、教室中どころか学校中に響き渡ったのではないだろうかと無駄な事を考えてしまう。

愛姫先生ってやっぱり名字では呼ばないのかと少し落ち込んでしまう。

いつの間にか「名字で呼ぶんじゃないか」とか言っていたのだろうか。

僕はいーたんのような記憶力の悪さを持っているつもりはなかったのだが、ここまで名前しか呼ばれないと若干疑問に思ってしまう。

「さささ、愛姫ちゃんこっちこっち!」

生徒の一人が僕を引っ張って教室の真ん中に連れていく。

先程案内してくれた新体操少女は友達の輪に加わり、楽しそうな笑みを浮かべているようだ。

席に案内されて座ると、隣にはタカミチとせずな先生（眼鏡なかつたらタイプです）がいた。

「やあ、タカミチ。せっかくのハーレムを壊して悪かったね」

「ちよつ、何か僕に恨みでもあるんですかつ!？」

「久しぶりに会ったら、僕より渋くなつてた恨みとかならあるかな」

挨拶しようとするタカミチより先に戯言で口撃する。

するとタカミチは少し慌て気味で僕に問い掛けてきて、僕はそれにニツコリと答え返した。

すっかりガトウみたいになりやがって。

まだ僕の身体はまだ14歳だからまだ大丈夫と信じたい、まだ信じていたい。

「あはは……」

苦笑いで何も言わないタカミチ。

それを見て僕はがっくりと落ち込む。

「まあまあ、あまり落ち込まずに」

そんな僕の様子を見てしずな先生が慰めの言葉を紡ぐ。

「人には向き不向きがありますから」

そんな優しいしずな先生の言葉が僕には突き刺さった。

向いてないって……。

「ねえねえ、愛姫ちゃんって何歳なの？」

そんな風に落ち込みにトドメを刺されていると生徒の一人が僕に質問をしてきた。

「高畑先生より年上なんて全然見えないよ」

それに乗るようにもう一人の生徒が僕に話しかける。

病気って言うておけば深くは聞いてこないだろうと思ったいたのだが、どうやらこの子達には無駄なようだ。

「企業秘密です」

僕は偽名を使っていた新聞部部長の決め台詞でごまかす。

未来から来たメイドの決め台詞とどちらにしようか迷ったのだが、こちらの方が好きな言葉だったのでこっちを選んだ。

「ええー」

それに対して不満の声があがる。

「じゃあさ、高畑先生って昔はどんな感じだったの？」

しかし彼女達がこの程度で身を引くはずがなかった。

次は違う質問を、とまた違う生徒が僕に向かって質問をしてきた。

この質問と同時に神楽坂がこっちに注目。

そういえばアスナ姫はナギがお気に入りっぽかったのだが、神楽坂はオジコンだったか。

「うーん、今はおじさんになっちゃってるけど昔は可愛かったかな
とりあえず真面目で何事にも素直で純粋な正義感の強い子供だった
ね」

「「へー」」

「あんまりいろいろ言わないでくださいよ。いと……愛姫さん」

僕は昔を思い出しながら自分の正直な気持ちを吐き出す。

それに感心する生徒となんだか少し照れてるタカミチ。

さつきから真剣にメモっていた神楽坂は何かにつぼったようだ。

おそらく妄想か何かしたのだろう。

頭を抱えて悶えているのを黒髪京美人の近衛が心配そうに見つめている。

オッサンの照れ顔なんて需要ねえよなんて言おうとしたら普通に需要があつたようだ。

そんな感じで歓迎会は楽しく和やか緩やかに過ぎていった。

次はエヴァンジェリンのキティちゃんハウスに行く事になっている。

鬼が出るか、蛇が出るか。

とりあえず鬼が出るのはわかってる。

第十一幕 鬼の晩餐会

「……此処か」

歓迎会を終えて、現在ログハウスのような外観のエヴァンジェリンハウスの前。

此処にキティちゃんがいるのだろう。

鬼の先輩として「おい、焼きそばパン買ってこいよお」とか言われるのだろうか。

「ついでにジャンプもなあ」とかパシられるのだろうか。

体育会系の先輩後輩の上下関係は苦手なのだが、吸血鬼はドSでプライド高そうで古風な鬼だしなあ。

「よし、帰ろう」

「お待ちください愛姫先生」

思い立ったが吉日とばかりに自分の思考に従いリターンした瞬間、メイド服姿の魔法と科学で作られたガイノイド【茶々丸】に肩を掴まれ静止するよう呼びかけられた。

いつの間に家から出てきたのだろうか。

「ロリババアの相手は嫌です」

僕はそれに対して無表情で言葉を返す。

茶々丸だったら相手どころか、クーデレのデレなし状態だったら是非嫁に欲しいぐらいなのだが、吸血鬼みたいな我儘で威張りん坊なロリっ娘は苦手なのだ。

これは戯言抜きの話で。

「マスターが呼びです。どうぞこちらに」

そう言われて引つ張られていく僕。

最近流されていくことが多いのだけれど、ここで逆らうのも馬鹿らしいし、僕はそのまま着いていくことにした。

茶々丸が開いた扉の中に入ると中にはファンシーな趣味の部屋が広がっていた。

吸血鬼のくせに見た目通りロリな趣味なのようだ。

「こちらです」

茶々丸は無表情のまま言葉を紡ぐ。

生まれてまだ何年も経ってないから感情が希薄なのは仕方ないのだろうか。

奥へ奥へ進んでいく。

吸血鬼が待ち構えるその場所まで足を進めていく。

気分は戦争前の軍人。

戦の前の侍。

蜘蛛の巣へ向かっていく蝶。

熊の巣穴に迷い込んだ登山家。

確実に何かが待ち受けているとわかりつつも僕は進んでいく。

「やあ、遅かったな殺人鬼」

「不老不死で他人より長い時間があるんだから遅刻ぐらい見逃してよ吸血鬼」

そして辿り着いた先、部屋に入ると中の状況を理解する前に声をかけられた。

僕はそれに軽口で返答する。

それから部屋を見回す。

案内された先にいた吸血鬼は、ワインを飲みながら優雅に構えていた。

テーブルには食事が並んでいて、少なくともこれから殺し合いを始めましようという雰囲気ではない。

「お招きありがとう吸血鬼。悪いけどお土産はないよ」

「最初から期待しておらんわ」

僕は軽口を叩きながらエヴァンジェリンが座っている席の前の椅子に座る。

茶々丸は僕から離れ主人の左斜め後ろに控える。

「今日は鬼同士で晚餐会つてところかい？」

「殺人鬼なんて下品な連中と一緒にされるのは御免だがな」

「吸血鬼なんて時代遅れと一緒にされるのは御免だよ」

僕が笑いながら尋ねると、吸血鬼はそれを直接肯定はせずともどこか楽しそうに返答してきた。

腹の探り合い。

お互い毒を吐きながらも相手の意思を探るべく心の読み合いのようなものをしている。

口ではこう言っているながらも、僕等は傍目から見れば仲良しに見えるように笑い合っていた。

しかし心の中は会議で自分の有利になるように進めようとする政治家のように真っ黒。

平和な学園に血の匂いがする鬼が2匹会合するなんて珍しいから吸血鬼も楽しいのだろうが、自分が負けた相手に全幅の信頼を置くなんて油断は流石にしないようだ。

僕は茶々丸が入れてくれたワインを毒なんか警戒することなく口に含む。

吸血鬼はそんな卑怯な事をするはずがないと理解しているからの行動だ。

しかし正直に言うとなりの世界と合わせても20年以下しか生きてない僕には、上物だろう安物だろうがワインの美味しさなんてわからず、褒めればいいのか批判すればいいのかすらわからなかった。

せいぜいチューハイぐらいしか飲んだことがない現代っ子なんだよ、僕は。

そんな考えが表情に出ていたのか、エヴァンジェリンは面白そうに笑う。

「クツクツク、見た目通りお子様か」

「見た目については君には言われたくないけどね。永遠幼女^{エターナルロリ}」

「ふんっ、そんな安い挑発に乗らんわ」

吸血鬼の挑発に僕が軽く挑発で返すが、吸血鬼は鼻を鳴らすだけで全く挑発に乗ってくることもなかった。

原作だと簡単に釣れてくれそうなんだけど、自分の同じ悪者サイドが相手だと対応も変わるのだろうか。

ワインを置いて食事を口に運ぶ。

うん、普通に美味しい。

ボギヤブラリーが貧困で庶民的な食生活を送ってきた僕にはこれ以上の説明ができないけど確かに美味しい料理だ。

慣れると普段食べる料理に軽く不満が出る程度には美味しい。

「さて、本題に入ろう。貴様は何故この学園の教師なんかになった？ 此処を貴様の狩り場にするつもりなのか？」

エヴァンジェリンが心底不思議そうに尋ねる。

もし「YES」と答えても彼女は疑問に思わないし、「ああ、そうなのか」とつまらなそうに一応納得するだろう。

しかしそれが答えではないと思っているからこそ彼女は僕に尋ねてきたのだ。

殺人鬼が平和な学園に就職なんておかしいだろう。

吸血鬼が中学生よりはマシだと思っけけど確かに客観視してみるとおかしい。

彼女が疑問に思うのも当然で自然だ。

「これから1、2年後に面白い事が始まるからさ」

僕は吸血鬼のその疑問に答える。

タカミチ達には聞かれても全く答えなかったその答えを。

英雄の息子による愛と勇気と感動の物語がこれから始まる。

流血と肉塊と絶望しか残らない僕の物語とは違う、主人公による汗と涙と青春の物語が始まるのだ。

僕はそれが見たい。

人間と人間のぶつかり合い。

人間と人間の傷の舐め合い。

欲望、願望、失望、絶望。

望みが叶い、望みが破れ、望みを忘れ、突き進む人間の姿が見たい。

人間が人間として人間らしく振る舞う姿が見たい。

人間が仮面を外し、本能のまま動く姿が見たい。

僕は人間達の傍観者として、時には干渉者として傍にいたいのだ。

だからこそ物語の中心である此処に残ることを決めた。

「未来予知か？」

吸血鬼が面白そうな表情で僕に問う。

「似たようなものかな。確かに僕の中には未来の知識があるし」

僕はそれに対して肯定で答えた。

僕には原作知識というこの世界の誰より恵まれた知識がある。

と、言っても僕みたいなイレギュラーを加えた物語でハッピーエンドなんて想像つかないから、確実に変わってしまうだろうけど。

「ふむ、聞いてもどうせ貴様は答えんのだろうな」

吸血鬼は僕の言葉に玩具を買ってもらえなかった子供のようにつまらなそうな反応を示した。

「……………」

…僕が答えずにいると彼女はやっぱりといった表情をし、目の前の食べ物にフォークを突き刺して食事を再開し出した。

…吸血鬼は僕とは違ってまるで貴族令嬢のように上品に優雅に食事を進めていく。

その様子を見てみると、僕は何故か何の前触れもなくただ唐突に思い付いてしまった。

吸血鬼が僕を食事に誘った意味。

吸血鬼が人形使いになった意味。

吸血鬼が茶々丸を作成した意味。

吸血鬼が部屋に人形を置く意味。

彼女は寂しいのだ。

一人が嫌いなのだ。

誰かと一緒にいたいのだ。

「エヴァ」

僕はなるべく親しみを籠めて、僕の意味が伝わりやすいように言葉紡ぐ。

「なんだ愛識」

吸血鬼——いや、エヴァンジェリンはその意図に気付いたようだ。

僕の想いが伝わったようだ。

僕達はお互いに友達のように呼び合い笑い合う。

吸血鬼は照れ隠しで少し怒りながら、殺人鬼は慣れない感じできちなく笑いながら、ガイノイドは突然の事態に全く意味が理解できないようで混乱しながら。

寂しがり屋な吸血鬼と寂しがり屋な殺人鬼が出会ったらこうなるのは必然だよな。

人間をやめても一人じゃ生きられないから零崎一賊なんてのができるのだから。

吸血鬼は先程から待っていたのだ。
食事の準備なんて歓迎ムードな時点で気付くべきだった。

もしかしたら吸血鬼は昨日からこうしようと思っていたのかもしれない。

僕はそれを考えて笑った。

エヴァがグラスを持ち上げる。

僕も同じように持ち上げて、エヴァのグラスに近付けた。

「「新たな友に乾杯」」

無理矢理な感じで仲良くなった僕達に事態についていけないガイノイドを加えて、鬼達の晩餐会は多いに盛り上がった。

第十二幕 英雄のお披露目会

あれからリベンジマッチ——ダイオラマ魔法球という外と中で時間の違う魔法道具の中で行うらしい——の約束をしたり、ナギの話で盛り上がったりと、とにかく会話は意外なほどに弾んだ。

平和な学園に閉じ込められた吸血鬼と平和な世界に閉じ込められた異端はどうやら気があうみたいだ。

殺伐と殺伐がぶつかり合うとどちらかの殺戮が起きると思っていたが、案外お互い馴れ合いを好む性格らしい。

僕としては最初に殺しそうになった時点で仲良くなるのは無理だなんて考えに至っていたのだが、やはりハンデだらけの状態で殺人鬼であり英雄である詐欺師に勝てるとは考えていなかったらしい。

相手の強さを見抜くのも一流の証というやつだ。

闇の福音の完全復活とその後の勝負が楽しみである。

ちなみに僕は最初は殺す気でなかったと追記しておこう。

何故なら僕の殺す能力で最も優れているのはあのシャボン玉の魔法だからで、最初から殺すつもりだったのなら初撃不意打ちで圧勝できるからだ。

名前もなく、ただ殺す事に特化した能力はそれだけ強力なのである。

何処からでも呪文なしで発生するが、触れたら弾けて相手の身体を吹き飛ばすので、手加減などできない使い勝手の悪い能力なのだ。だから死合では使えるが、試合では威嚇や魔法や飛び道具からの防御にしか使わない。使えない。

封印状態のエヴァには使えない、使わない。

「おい、そろそろ時間ではないのか？」

頭の整理をしているとエヴァから声が投げ掛けられた。

時計を見ると零時の10分前。

そろそろ世界樹前の広場に行かないと間に合わない時間帯である。

いや、そもそも今から行っても遅刻かもしれないけれど。

「そうだね。じゃあ、そろそろ行こうかな」

そう言っ僕は立ち上がる。

楽しい時間は終わって、これからつまらない時間の始まりだ。

「零崎一賊の知名度ってどれくらいなの？」

僕はエヴァを見つめながら魔法使い達に会う前に気になる事を質問する事にした。

もし、魔法教師がみんな知っているのなら歓迎会という名の大量

殺人になるんじゃないだろうかと不安なのだ。

もちろん僕も好きで殺したい訳ではないが、殺されそうになったら反射的に殺してしまう殺人鬼になってしまっているのだし。

そんなくだらない事を考えているとエヴァンジェリンは静かに口を開いた。

「この学園で知っているのは私とタカミチと爺くらいだろう。裏の世界では有名だが表の世界では貴様という英雄ぐらいしか知られていない。他の零崎は貴様と違って零崎らしく目撃者も含めて皆殺しみたいだからな」

呆れ顔という言葉がピツタリ表情でこちらを見つめるエヴァ。

僕のラブリーな家族達は世界一頑張ってはいけない集団なのだが、みんなとっても頑張り屋さんのようだ。

まとめてキスの雨を降らせてあげたいぐらい愛おしいよ。

なんて戯言が頭を過ぎる。

「なら大丈夫かな。エヴァも来るの？」

「私は面倒だから行かん。案内なら茶々丸をつけてやろう」

僕が尋ねると彼女は僕の考えを見通していたようで、完璧に完全に簡潔に簡単に僕にちょうどいい返事してくれた。

なんと優しい吸血鬼でしょう。

それなら迷わずに行けそうだと僕は安心感を抱く。

「じゃあね。また明日」

僕はそう言つてエヴァハウスから出て行つた。

返事はなかったがそれはそれでエヴァらしいと僕は笑つた。

案内人の茶々丸が遅れてやってくる。

そして一言挨拶を交わし歩き出し、僕もそれに無言で着いて行く事にした。

「ほっほっ、どうやら来たみたいじゃのう」

茶々丸の案内で着いた世界樹広場では魔法先生や魔法生徒達が裏方も含めて勢揃いだった。

滑瓢が僕の方を見てバルタン星人のような笑い声と共に言葉を紡ぐと全員一斉にこちらを見る。

なんかみんなの顔がやたら輝いてて気持ち悪いと僕は若干引いてしまう。

英雄の正体は元賞金首の殺人鬼でエヴァンジェリンと変わらない

存在ですよ、と声高々に打ち明けたい衝動に駆られるが、これからの生活を円滑に円満に過ごす為に我慢することにした。

「紹介しよう。新しく警備員になった英雄——零崎愛識殿じゃ」

滑瓢の言葉と共に周りがざわめく。

本人を目の前にして嬉々として近くの者と話し出すのはどうなのだろうか、僕は無表情ながら考える。

「あれが紅き翼の？」

「黒き制裁がこの学園に……」

「ごによ、ごそごそ、ぺちやくちやと彼等は僕に注目した視線を反らずに話している。

流石紅き翼に所属していた有名人と他人事のような考えが頭を過ぎった。

しかし一カ所だけおかしい表情の人間がいる事にも気付く。

褐色のスナイパーだけは顔色が悪い。

僕はやはり数々の戦場を経験した彼女は零崎の名前の本当の意味を知っているのだろうか、警戒心を強める。

そんな事していると爺から合図がきた。

自己紹介をしろという事だろうと解釈し、僕は一歩前に進み言葉

を紡ぎ出す。

「どうも零崎愛識です。昼間は南愛姫という名前で教師をしているので間違いなさらぬようお気を付けください」

淡々と単調に単純な挨拶を短縮しながら話す。

愛想笑い、営業スマイルなど前の世界から猫被りが仕事上得意な僕は、短めの挨拶を彼等にして様子を窺った。

ちなみに前の世界の仕事は接客業である。

「さて、皆も気になっておるじゃろうからは非魔法世界の英雄殿のお力を見せてもらおうかのう。……高畑君」

爺は彼等が静まってくると同時に僕に断りもなく語り出した。

その言葉と共に前に進むタカミチ。

ガトウの弟子VSガトウの戦友。

殺したくなるほど愛しく成長したタカミチ少年。

もちろんこの戦いが今日この時間にあるだろう事は予測通り予想通り予感通りである。

「とりあえずこの試合に僕が勝ったら君をパシってあげよう」

僕は無言で前に進み出たタカミチを見つめながら話し出す。

全く関係ないのだが、ちょっと欲しいものを思い出したのだ。

かの病蜘蛛^{シグザグ}の得物であり、僕の弟が得意な道具なのだが、そろそろ手札を増やさないと考えていたところなのでこの機会に手に入れて特訓してみようと考えたのである。

「……会ったばかりなのにパシられてばかりでなんだか昔を思い出しますよ」

苦笑いのタカミチはタバコを携帯灰皿に入れ、両手をポケットに入れて戦闘体制になる。

紅き翼時代はよく面倒事を押し付けていたのだが、この時代でも変わらない事を嘆いているのだろうか。

それとも懐かしさに喜びを感じているのだろうか。

——まあいい。

「さあ、どこからでもかかってきなさい」

僕が両手を広げて挑発すると共にタカミチは両手を合わせた。

魔力と気を融合させた究極技巧^{アルテマアート}【感卦法】。

最初からクライマックスですね、わかります、なんて僕は内心余裕たっぷりだった。

お互い言葉は不要、拳で語れとばかりに降り注ぐ居合拳を避けながら、僕はどうやって彼を殺さずに倒すか考える事にした。

シャボン玉——却下。
殺すつもりはない。

ナイフ——却下。

持つとどうしても殺してしまいそうだ。

先のエヴァンジェリンの件もあるし。

魔法の射手——却下。

成長したタカミチ相手にはあまり効果はないだろう。

身体強化——採用。

体術のみで倒してあげよう。

「——力の違いを見せてやるっ！！」

僕は挑発的な笑みを浮かべて叫ぶ。

行動が決まってからは速かった。

居合拳を避け、防ぎ、躲し、潰し。

近付いてからの流れるような我流拳法。

僕が殴り。タカミチが躲し。

タカミチが殴り。僕が躲し。

僕が蹴り。タカミチが避け。

タカミチが蹴り。僕が避け。

一進一退。

激しい攻防が目にも留まらぬ速さで続いていく。

ふむふむ、成長したではないかと僕は上から目線の感想を抱く。

しかしだ。

「——まだまだ修業が足りないね」

ハートブレイクショット。

心臓目掛けて放たれた拳は見事タカミチの胸を捉え、タカミチは「ごはっ!？」と言う言葉を漏らしながら吹き飛んだ。

「感卦法が使えるようと僕相手じゃ意味なかったね」

僕はニヤリツと笑い勝利宣言が如く言葉を紡ぐ。

観客と化していた魔法関係者は麻帆良の猛者にして学園長の右腕であるあの紅き翼の高畑?T?タカミチが簡単に手早く敗北したのを見て啞然としていた。

そもそもタカミチ少年は弱い敵との多対一ばかり経験しすぎて、一人の強者と戦う機会が少ないのだからこの結果は当然だ。

仕方ない事だけど、紅き翼や完全なる世界や弟との戦いで鍛えた僕には負けるのは必然だ。

零崎として覚醒からの密度の濃い時間を過ごし、ナギとの戦いで慢心を消し去った僕の敵ではない。

「……勝負ありみたいじゃの」

起き上がらないタカミチを確認してから滑瓢が終わりを告げた。

殺人鬼の歓迎会は何の問題も問答もなく文句なしの実力を僕が見せる事で締め括られた。

第十三幕 魔眼の乙女

朝早く起きて、書類仕事して、職員会議して、授業して、夜遅くまで書類仕事して、たまにタカミチをパシって、夜中に警備員の仕事をしてを繰り返して一ヶ月が経った。

「労働基準法見直してこいよコラ！」

僕は我慢できずに唸る。

教職員の仕事がこんなにも忙しいものだとは思わなかった。

いや、夜間の警備員の仕事も兼任しているからだろうか。

何処にも属していないフリーの魔法使いはまだいい。

しかし関西呪術協会の人間まで頻繁に来るのは有り得ない。

もっとしっかりまとめろよ詠春と怒鳴り込みたくなる。

今度の休みにでも怒鳴りに行こうかなあ。

使う暇なく貯金だけがどんどん貯まっていくし、せっかく買った携帯も使う機会がなく不満だらけの生活だ。

だから、だからこそこんなぐらいの愚痴は許されてもいいのではないだろうかと僕は溜息を吐く。

あと3日で冬休みで麻帆良に来て初めての長期休暇。

そんな風に勘違いして浮かれていたら、タカミチに「教師は冬休みも仕事ありますよ」なんて言われてしまったので長期休暇も結局はないので、僕のストレスも貯金と同じく溜まる一方である。

ストレスが溜まりすぎて学園を壊滅させてしまいそうだ。

ちょこちょここと侵入者で発散しているのだが、人間は敵だろうと殺してはいけならしくので、召喚された鬼や悪魔相手ぐらいしか殺す事ができず、更に不満が降り積もる。

今まで自分勝手に我儘に過ごしていた僕にとって、社会人の生活は辛く苦しく怠いとしか言いようがない。

吸血鬼はこれを生徒の立場で何年も続けてるみたいだから「流石ッス先輩」と褒めておいた。

もちろん何言ってるんだこいつみたいな目で見られたけれどね。

もしこの3日の内にタカミチが出張したら、7人殺そう。よし決めた。今決めた。

心の中で小さく宣言。

人間が大好きだから人間を殺したい。

昔は思わなかった感情がドンドン溢れていく。

麻帆良の平和はタカミチ次第。

なんて僕の決意が無意味に終わり、終業式の日を迎えた。

タカミチの隣でばーっと終業式をやり過ごして数時間。

今、僕は学校近くのファミレスにいる。

教師の打ち上げでも、クラスの打ち上げでもなく、ある女子生徒に呼び出されたのだ。

呼び出した女子生徒から考えて甘酸っぱい青春からは掛け離れていると思うが、さては何だろうかと僕は期待に胸を膨らませる。

「やあ、待たせてしまったかな？」

そんな風に待つこと数分で彼女は来た。

褐色ガンナーこと、龍宮真名。

またの名をマナ・アルカナ。

1―Aでエヴァに続いて裏の事情に詳しいだろう彼女。

零崎の名の意味をきちんと理解しているだろう彼女。

そんな彼女が零崎と二人きりになるなんていったい何を考えているのだろう。

自殺願望なら余所でやってほしい。

僕は快樂殺人鬼ではないのだ。

「数分待ったけど気にしないでいいよ」

「こういう場合は今来たところなんて言うんじゃないのかい？」

「ごめん。僕は年上好きなんだ。そして興味ない人間に気を遣うなんて馬鹿らしくてやってられないよ」

なんてお互い軽口を叩きながら、彼女は一枚のお札を取り出した。認識疎外の効力を持つものだろう。

いかにもこれから内緒話を始めますと言っているようなものだ。

「零崎一賊の長兄に聞きたいことがある」

——冷たい声。

若干緊張感を感じさせながら彼女は先程とは違う真剣な表情で僕を見つめてながら言葉を発する。

「なんだい？ 殺し方でも教えてほしいの？ それなら君の身体に直接教えてあげようか？」

それに対して僕は不敵に微笑み、先程と変わらない軽口で返す。

今、この場にいるのは南愛姫にんげんではなく零崎愛識さつじんきだ。

返答次第では平和なファミリーレストランに血の雨が降り注ぐ事になる。

それを彼女は理解しているのだろう。

彼女はごくりつと喉を鳴らし、僕の一挙一動に注目しながら、怯えを隠しながら話を進める。

「零崎直識^{ぜろさきただしき}の居場所を知りたい」

そして彼女は自分の目的を僕に伝えた。

——零崎直識。

僕の弟だろうということは面識もないし、初耳だが名前でわかる。

零崎なんて姓を名乗る害悪は僕達だけなのだから。

「残念ながら知らないよ。僕は次男にしか会った事がないからね」

僕は頭の中でどんな弟なのだろうなんて考えをしながら、そんな考えを態度には出さずに返答する。

僕の答えに落胆したのであろう。

彼女は暗い表情で俯いた。

「……そうか、ありがとう」

お礼を言う彼女の表情はやはり暗い。

しかし、僕は人に気を遣える人間なんかではないから彼女の心を
気遣う事なく気になることを尋ねる。

「僕の弟に何か用があるのかい？」

表情は笑顔、感情は警戒。

可能性が一番高いのは復讐。

しかし、家賊に仇なすものは、老若男女人間動物植物関係なく皆
殺しだ。

だからこそ僕は彼女にこの質問をしなければならない。

僕としては原作キャラを殺して、物語を歪ませるのは嫌なのだけ
れど、零崎の敵は僕の敵。例外は有り得ない。

「零崎直識は……、コウキは私のパートナーだったんだ」

彼女は暗い表情のまま語り始めた。

——だった。過去形。

つまりは零崎として覚醒して縁が切れてしまったのだろう。

そしてそんな恋人を諦めきれないから魔眼の乙女は僕に情報を求
めたのかと僕は納得する。

「立派な魔法使いを目指す正義感の強い普通の人間だったんだけど
ね」

懐かしい思い出を語る彼女の表情は沈痛だった。

零崎として覚醒したら関係ない。

自分が新しく作り変えられるようなものだから、過去と同じままではいけない。

僕のように特別な生まれ方をしたら少しは可能性があるのだが、零崎として正しく生まれた彼には関係ない。

殺さないという選択肢がないのだ。

こういう人間しか殺さないで鎖で縛って、特定の人間だけに零崎を行う生き方はできるが、誰も殺さないという選択は零崎にはできないのだ。

どれだけの聖人君子だろうと、零崎になれば例外なく人を殺し続ける鬼になるのだ。

僕も零崎であって零崎でない、悪魔に呪われて殺人衝動に目覚めているが、完全に殺さないという選択肢はまだ選べない。

常に全身を意識して堪えなければ、今すぐこの学園都市を壊滅させるだろう。

友達だろうが恋人だろうが、例外なく傷付け続けるだろう。

僕達はそういう存在なのだ。

「見付けたら教えてあげるよ」

僕はそう言つて、頼んでいた紅茶を飲み干して紅茶の代金を置き席を立つた。

もう彼女に興味はないし、ダラダラと雑談を続ける仲でもないから、この場に留まる理由も意味もない。

もちろん見付けたら教えるなんて戯言だ。教える気なんか一切ない。

殺人鬼なんかに出会わない方が幸せだし、わざわざ自分の手で原作を歪ませる必要性は皆無だ。

ファミレスから出ると、外と中の温度の違いに少し戸惑うが、気にせず足を進める。

零崎、零崎、零崎。

知らない零崎を初めて知る事ができた。

と、言つても知っていた零崎なんて自分以外では叶識しかないのだけだ。

僕を知らない零崎は僕をどう思っているのだろうか。

零崎のくせに英雄と讃えられる変わり者？ 零崎が生まれるキツカケを作った厄介者？

それとも零崎なのに殺さない死人だなんて思われちゃったりなんかしちゃったりしてるのだろうか。

人間が好きで人間観察趣味の僕だけど、鬼の観察、接触なんてのも悪くない。

「これは戯言なんかじゃないよ」

僕の独り言は街の喧騒に掻き消されていった。

第十三幕 魔眼の乙女（後書き）

Trick or Treat！（ご馳走^{かんそう}くれなきや悪戯するぞ！）

冗談です。

お気に入り登録、感想、お気に入りユーザー登録ありがとうございます。

漸く以前の改訂前より進む事ができました。

前の小説から読んでくれている方も、新しくなってから読んでくださっている方も（いるのかそんなヤツ？）ありがとうございます。

これからも気まぐれですが、頑張って更新していきたいと思います。

とりあえず11月11日までは毎日1話夜の8時に予約投稿してあるので安心してください。

それでは。

幕間零 殺人鬼の旅（前書き）

登場人物紹介

みなみあいき
南愛姫

教師（物語の語り部）。

いちのみやかほ
一ノ宮嘉穂

京都の大学生。

こしいわお
小石岩夫

雑誌のカメラマン。

あまゆきみぞれ
雨雪霰

旅館の従業員。

あまゆきあられ
雨雪霰

雨雪三姉妹の次女。

あまゆきひょう
雨雪雹

雨雪三姉妹の三女。

あかしゆうな
明石裕奈

麻帆良学園1 - Aの出席番号2番。

いずみあこ
和泉亜子

麻帆良学園1 - Aの出席番号5番。

大河内アキラ《おおこうちあきら》

麻帆良学園 1 - A の出席番号 6 番。

佐々木まき絵 ささきまきえ

麻帆良学園 1 - A の出席番号 1 6 番。

零崎愛識 ぜろさきいとつき

殺人鬼。

幕間零 殺人鬼の旅

冬休み。

学生にとって嬉しい休みの時間。

リア充達が最も盛る日のある期間。

今はその冬休みだ。

殺人鬼なのに真面目に仕事に勤めていた僕は、遂に休暇というものを頂いた。

もちろん、タカミチが言った通り教職員には冬休みなんて存在しないので、また何日かしたら学校での仕事が始まるのだが休みがあるのは素直に嬉しい。

昼は教師、夜は警備員の生活は思ったよりも辛く、投げ出したい気持ちでいっぱいだったのだから。

そして、そんな休暇中の僕の現在地は温泉旅館。

せつかくの休みだし詠春に会いに行こうなんて考えていた僕は何か此処にいる。

決して、ちらつと見えた温泉旅館の看板を見て、温泉なんてのもいいなあなんて考え、そのままホイホイと釣られたわけじゃない。

「嘘だ」

「嘘じゃない」

「嘘だ」

「嘘だよ」

まあ、そんな行き当たりばったりの人生も悪くはないんじゃない？

隣に座る茶髪の女性に笑い掛ける。

「愛姫ちゃんは嘘つきだね」

「僕は嘘をつかない事を信条にしてるんだけどね」

「嘘つき」

「褒め言葉」

そんな嘘つきの僕と愉快に話しているのは、この旅館で仲良くなつた京都の大学生。

一ノ宮嘉穂ちゃん。
いちのみや かほ

根暗で性悪な僕でも仲良くなれるほど、明るくて気さくな女性だ。

中学生のような容姿で一人歩いているのを見掛けて、迷子だと思
い声をかけてきて、気が付いたら仲良くなっていた。

もちろん年齢的には本来中学生なのだが、本来の年齢は隠して社
会人だと伝えている。

証明手段は車の運転免許証（偽造）。

戯言の影響で買ったベスパに乗る為に、滑瓢に頼んで作ってもらったのだ。

——真っ赤なコブラ？

僕、派手なのは苦手なんだ。

「てゆうか愛姫ちゃんが教師なんて未だに全然信じられないよ」

これでも教師DEATH

小萌先生みたいに子供（に見える）先生やってます。

タバコは苦手で、お酒は弱いけど飲めます。

「さっき僕の生徒に会ったでしょ？」

僕は得意げに笑いながら言葉を紡ぐ。

そう、京都で僕の生徒に会ったのだ。

佐々木まき絵、和泉亜子、明石裕奈、大河内アキラの四人組は、中学生の分際で温泉旅行に来ていた。

しかもその中の一人に予想外の現象を確認してしまったのだが、これはいいだろう。

有り得ないことではないのだから。

なんて、僕がこの時にこの事実をもっと深く受け止めていたら、

あんな事にはならなかったんじゃないだろうか。

最初から事情を知っていて、解決に望んでいたら、悲劇は起きなかったのではないだろうか。

僕にはまだ答えは出ない。

幕間一 始まりはいつも唐突に

「――僕と零崎は同じなのだろうか」

貸し切り同然の温泉に入りながら、僕は零崎について考える。

零崎は呼吸をするように人を殺す生き物だ。

しかし僕は零崎であって零崎ではない。

そしてこの世界に零崎が生まれた原因は僕だ。

ならば他の零崎も僕と同じ種類の零崎なのだろうか、叶識は、他のみんなは僕と同様に殺さない零崎になれる可能性を、殺さないを選べる可能性を持っているのだろうか。

そもそもこの世界で零崎が生まれていく理由はなんだ？

他の殺し名は存在せず、僕という零崎もどき以外本来いなかったはずだ。

なのに何故生まれたのだ。

「むう、……あ、そうか！」

思考をドンドン深めていくと、ある可能性を発見した。

零崎は零崎に共鳴する。

元々、零崎の可能性を持っていたから零崎が近づく事で覚醒して、目覚めたという可能性はどうだろう。

「接触しなければならぬではなく、近辺にいる事で目覚めるのなら、叶識の事も説明がつくし、ドンドン零崎が増えていく理由もわかる」

僕が叶識を覚醒させ、叶識が他の誰かに近づく事で覚醒させ、他の誰かが更に他の誰かに近づく事で覚醒して——これなら増えていく零崎についても、今までいなかった零崎についても説明がつく。

「あ、でも僕とそれ以外の零崎は同じなのかはわからないや」

僕は頭を抱える。

僕と他の零崎の違いについて考えていたはずが、いつの間にか考える事が変わっていた。

「はあ……、」

温泉から湧き出る湯気に向かって溜息を吐く。

そもそもこんな事で悩まなければいけなくなったのは予想外の現象のせいだ。

アレのせいで原作がどうなるのかわからなくなって悩んでいたのだ。

「——って、悩んでも仕方ないか」

なるよーになーれ。

温泉から上がり、浴衣に身を包む。

慣れない和服に困惑しながらも、僕は温泉旅行に満足していた。

休暇の時ぐらい悩みは忘れて身体を休めるべきだろう。うん、そうだ。

せっかくの温泉旅行なんだから、もっと楽しい事を考えるべきだろう。

「愛姫ちゃんっ！ 卓球やろうよ」

そんな結論が出た瞬間と同時に、浴衣姿の嘉穂ちゃんが現れた。

右手にラケット、左手にピンポン玉と準備は万端なようだ。

「温泉旅館と言えば卓球だよ」

笑顔の女性の誘いを断るのは、紳士としてどうかと思うので、苦笑を浮かべながら頷いて誘いを受ける。

そして僕達は腕を捲りながら卓球場に向かう事にした。

「愛姫ちゃんって何の先生なの？」

「英語だよ。それと副担任なんかも担当してる。部活の顧問なんてのはやってないね」

たわいもない話をしながら歩いて行く。

知り合っただけなのに、僕達は長年の友達のように仲の良い雰囲気だった。

「あ、やっぱり英語得意なんだ？」

「見た目から勘違いしてるようだけど、僕は日本生まれ日本育ちだよ。髪の毛は染めてて目はカラコン」

下瞼を人差し指で下に引っ張りながら笑うと彼女はニッコリと微笑む。

「わかりやすい嘘をありがとう。染めた髪はそんなに綺麗じゃないです」

そして自信満々に嘘だと見破った。

「君は僕の嘘を簡単に見抜くね。何かコツがあるの？」

「私って昔から勘が鋭いのだよ」

「ふむ、勘か。それはもはや超直感なんてレベルと言ってもいいかもね。君に会ってから僕の嘘は全て見抜かれているみたいだし」

年齢も含めて彼女は僕の嘘を見破っているような予感がする。

「最初から男の子つてのも理解してたしね」

「それはみんなわかるさ」

そんな風に話していると、卓球場についた。

「とうちゃーく」

嘉穂ちゃんが元気良く笑う。

室中には佐々木まき絵、和泉亜子、明石裕奈、大河内アキラの麻帆良中等部1年四人組、旅館の従業員の雨雪霏あまゆきみぞれさん、宿泊客の小石こいし岩夫さんいわお、の合計六名がいた。

「やつぽー愛姫ちゃんっ」

「一緒に卓球やろうよ！」

佐々木と明石が僕の手を掴みながら卓球台へと引つ張る。

元気いっぱいの中学生に誘われて、僕と嘉穂ちゃんは共に卓球に参加する事にした。

「愛姫ちゃん弱ーいっ」

しかし、明石と佐々木VS僕と嘉穂ちゃんの試合は僕が足を引つ張り、明石が綺麗なスマッシュを決め、僕が足を引つ張り、佐々木が見事なスマッシュを決め、僕が足を引つ張り、嘉穂ちゃんが華麗なスマッシュを決め、最後には負けた。

「愛姫ちゃんって運動苦手だったの？」

嘉穂ちゃんが苦笑いで尋ねてくるが、僕に人に自慢できるほど得意なものがあつた記憶がない。

特技の料理だつて実は並レベルだ。

「自慢じゃないけど得意なスポーツなんて出会つたことがないよ」

殺人をスポーツというのなら出会っている事になるが。

「あんまり気にすることないですよ。俺もさっきあの子達にコテンパンにされましたから」

なんて名前とは裏腹に黒髪で黒縁眼鏡をした細身の男性、小石岩夫さんが話しかけてきた。

彼は僕と嘉穂ちゃんと麻帆良四人組以外の最後の宿泊客で、雑誌のカメラマンをやっているそうだ。

ちなみにこの旅館には宿泊客七人に対して、従業員三人の仕事に圧殺されそうな人数しかない。

長女の雨雪霰さん。あまゆきあられ次女の雨雪霰さん。三女の雨雪霰さん。あまゆきひょうの三姉妹で営業している小さな旅館だ。

まさに隠れ家的温泉旅館って感じかな。

……こんな山奥の旅館に中学生四人が来るってどういうことなん

だろ。

「てゆうか、愛姫ちゃんと嘉穂さんってもしかして恋人？」

「うそつ、先生恋人とかおつたんや？」

どういう意味だ和泉。

「この旅館で知り合っただけの関係だよ」

「迷子の愛姫ちゃんを保護しましたっ」

「迷子にはなつてなかったけどね」

お互い一切照れもせずに話すと中学生ズは勘違いだと納得してガツカリとしたようだ。

この年頃の女子中学生は恋愛に興味津々だよね。

「つまんないのー」

「喜ばせようとしてないからね。それよりももう夜遅いし寝たら？
これでも教師だから生徒の夜更かしは注意するよ？」

目の前に人間がいるとどうしても殺したくなっちゃうんだよね。

此処に来るまでに五人程殺したんだけどなあ。

ちなみに遺体の処理はシャボン玉で楽勝でした。

現場にはただ血が残されてるだけで証拠はなし。

「ぶー、愛姫ちゃんの意地悪っ」

「まあまあ、仕方ないて」

「しょうがないから部屋で恋バナでもしますかっ」

「この前したばかりで誰も恋愛話なかったけど」

「恋はいつも突然だーっ」

「もうええから。じゃあね愛姫先生」

「「「「おやすみなさい」「」「」」」

「はい、おやすみ」

四人組はそう言つと一斉に出ていった。

さて、僕も寝ようかな。

せつかくの休暇なんだからじっくり睡眠を楽しみたいし。

「それじゃあ、僕も失礼するよ」

「あ、私も」

僕に続いて嘉穂ちゃんが手を挙げながら着いてくる。

「おやすみなさいませ」

「おやすみなさい」

二人に見送られ、僕は卓球場を後にした。

「明日の朝ちよつと探検しない？ 一人で森の中歩くななんてつまんなくてさー」

廊下を歩きながら世間話をしていると、嘉穂ちゃんは急に話題を変えた。

確かにそれはそれで楽しそうだけど。

「この激しい雨の中をかい？ しかも明日には更に酷くなるみたいだよ？」

夕方から降り出したのだが、今は風も強いし、正直お断りかな。

僕はどんな雨の中も傘を差さない人間だし。

「止んだらだよ。せつかくこんな山奥に来たのに勿体ないじゃん」
別に探検しに来た訳じゃないけどね。

あと3日で帰るからその時に止んでくれたら僕は構わない。

「まあ、晴れたらね」

「約束だよ？」

運動嫌いな僕としては是非この雨が3日続く事を祈るよ。

こうしてこの日は幕を閉じた。

しかしこの時から——いや、ずっと前から、もうあの事件は始まっていたのだろう。

僕はそんな事には気付かず、暢気に休暇を楽しんでいた。

幕間二 疑われた殺人鬼

目が覚めるとバタバタという大きな足音が聴こえた。

朝からうるさいし、しかもこの足音の主は僕の生徒であろう確率が高く、少しうんざりだ。

時計を確認すると9時。

窓の外は豪雨。

これなら今日もゆったり過ごせそうだが、外に出る事は出来ないだろう。

「さて――」

着替えて彼女達を叱りに行こうかな。

モノトーンの服に、胸元にナイフのいつも通りの姿になった僕は洗顔を済ませ、身嗜みを整える。

僕は人前でだらしない格好ができない人間だ。

それは真面目とか、格好をつけたいなどとは違い、誰が相手だろうと隙をみせたくなり深層心理の現れだと思う。

……自信満々に言ったけど外れていないと嬉しいな。

「愛姫ちゃん大丈夫っ!？」

——驚愕。痛烈。

扉を開けようとしたら自動で開いて、僕の額と侵入者の額で強烈なスキンシップを交わすこととなった。

そして痛みを堪えながら顔を上げると、額を押さえながらうずくまる嘉穂ちゃんがいた。

「君のせいで今大丈夫じゃなくなったけど何か言いたい事はある？もちろん責めている訳ではないよ？しかしこの状況において、謝罪なしで世間話を始めるのは些か不満があるというのは否定はできないけどね」

「そんなことはどうでもいいのっ！」

僕はこれから説教を始めてやろうと彼女を睨みながら話す。すると彼女は勢いよく立ち上がって叫び出した。

どうでもいいと申したか、嘉穂ちゃん。

僕が年上好きで君が年上だからといって、そんな相手の横暴を許容するような心の広い奴だと思っっているのだろうか。

否、否、否。

僕は自分程心の狭い、ケチ野郎はいないと思っている。

だからこそ君のその意見には異議を申し立てねば——

「……愛姫ちゃんの生徒が死んじゃったみたいなの」

——と、考えていたのだが、青白い表情でわなわなと震える彼女を見て、僕は閉口せざるおえなかった。

僕が疑わしげな表情で彼女を見つめると、彼女は嘘じゃないと言いたいかのように何度も首を横に振る。

ごめんねネギくん。

原作前に原作崩壊が起きちゃったみたいだ。

正直原作キャラが死ぬとしたら、僕が我慢出来ずに殺してしまうか、零崎化した人間が殺人を犯すかのどちらかと思っていたのだが、どちらでもなかったようだ。

しかし原因はやはり僕だろう。

僕というイレギュラーのせいでこの世界が変貌しているというのは間違いない。

嘉穂ちゃんに案内された先には、バラバラに切り裂かれた和泉亜子がいた。

魔法の痕跡はなし。鋭い切り口から、僕の弟が得意としていたよな系を使つての行為じゃないかと推測を試みる。

確かバンドだったり、ナギ（ネギ）といろいろやつたり、魔法世界に行ったりといういろいろ活躍していたはずなんだけど、どうやらそ

の光景を実際に見る事はできないらしい。

「一体誰がこんな——」

血塗れの少女を撮る小石さん、泣き崩れる二人とそれを宥める大河内、気分が悪そうにしゃがみ込む嘉穂ちゃん、予想外の自体に気絶した電さんと彼女支えている霰さん、警察に連絡しに行った霰さん。

誰も僕の疑問に答えられる人はいない。

仕方がないか。

こんなものを見慣れているのは殺人鬼の僕ぐらいなもんだよね。

僕はそんな事を考えながら辺りを見回す。

この部屋に泊まっている麻帆良四人組のモノらしき荷物（僕にとっては多く見えるが、女性は荷物が多いからこれが普通なのだろう）、開きっぱなしの窓、意外にも整理整頓されて散らかっていない部屋から犯人と争った形跡は見えない。

それにバラバラな遺体の手を見たが、手の平や爪に髪や皮膚はないし、血塗れでわかりにくいバラバラになっている以外に怪我などはないから、素直に殺されたようにも——いや、指先に細かい傷後があり、首には切断した傷口以外にもいくつか切り口があるから、最初に首にかけられた系で首が絞まっていくのを手で抵抗していたようだ。

「——って、なんだあれ？」

遺体の中に血で覆われているが少し違和感を感じるものを見つけ、僕はゆっくりと近付いていく。

そしてハンカチでそれを拾いあげた。

「これは……木材？」

拾いあげたものは小さな木の塊だった。

何かが欠けたものらしく、血を拭いてみると一部分が肌色をしている事から人形のような物の一部みたいだ。

この部屋には人形が飾られていて、それが抵抗した時に壊れて、部屋に散らかって、犯人が持ち出した？

いや、僕の部屋には人形なんてなかったから、この部屋もそれはないか。

「むむむ、わからな——」

「南さん。此处から離れて警察が来るまで大広間で待ちましょう」

思考に集中していたが、先程まで写真を撮っていた小石さんの言葉で引き戻される。

もう部屋の中には僕と小石さんしかいない。

「アハハ、すいません」

僕は曖昧に笑いながら小石さんに着いて部屋を後にした。

「それじゃあ、これからについて話し合おうか」

大広間に僕の声だけは響く。

皆揃って沈痛そうな表情だ。

「霰さん。警察はいつ来るの？」

「それが、土砂崩れがあつたみたいですからこれないようです」

なんとというバッドタイミング。

3日間雨が振る事を祈った僕がいけないのだろうか。

「なっ、それじゃあ俺達はこのままなんですかつ！？」

先程まで写真を撮っていた癖に、小石さんは急に取り乱す。

まあ、すぐに警察が解決してくれると思つたら無理だつたんだから慌てるのは当然か。

「落ち着いてください小石さん。とりあえず第一発見者は状況を説明してくれるかな？」

そう言つと麻帆良三人娘がピクツと反応する。

同じ部屋なんだから彼女達が発見するのは当たり前か。

「亜子が気分が悪いから部屋で休むって言ってたから私達三人だけでご飯食べに行つて、それでその後ゲームセンターで遊んでたの、……それでいつまでも亜子が来なかったから様子を見に行ったら……」

そこで明石の言葉が止まる。

現場を思い出してしまったんだろう。

「発見した時間は？」

「確か8：30辺りです。その後は私は雨雪さんに伝えにロビーへ。裕奈は気分が悪くなったみたいだから、まき絵が運んでいって――」

「ねえ、愛姫ちゃんは何がしたいのっ!？」

突然、佐々木が叫び出す。

確かに友人が死んだ直後に取り調べなものは中学にはきついでろっつ。

でもここで止めるという選択肢はない。

「警察は来れない。外には逃げれない。この状況でしなきゃ行けないことは犯人探したよ、佐々木」

「そんなの警察が来るのを待てば――」

「いや、確かにそうだ。この事件が今回で終わる保障はないんだ。犯人を見付けなきゃ安心なんてできない」

僕の言葉に反論しようとした佐々木の言葉を小石さんが遮る。

そう、僕以外のもう一人の殺人鬼を見付けなくちゃ、また犠牲者が出てしまうかもしれないのだ。

「大河内、鍵はどうだった？」

「かかってました。それで私が持っていたのでそのまま開けました」

「大河内達はずっと一緒にいたの？」

「はい、朝からずっと一緒でした。食事の時は大広間で一ノ宮さんと小石さんと雫さんと一緒にでしたし、ロビーには雫さんと霰さんがいました」

つまり麻帆良三人娘はアリバイありか。

「雫さん。客用以外に鍵はいくつありますか？」

「マスターキー一本です。従業員室で管理してます」

「雫さんは今朝は何をしていました？」

「私は朝食の用意を三人でした後、皆さんに配膳して、お客様の事は電に任せて二人でロビーの掃除をしておりました」

家族だから法律上はアリバイなし扱いだけど、この際それは無視しよう。

「私と小石さんと雹ちゃんは大河内さん達が来る前からずっと一緒にいたよ。食事の後も三人でお喋りしてたし」

つまり、嘉穂ちゃんと小石さんと雹さんはアリバイは完全に証明されている。

「なあ、犯人は外から入ってきたってのはどうだ？ ほら、窓は開いてたんだからさ！」

「こんな雨の中を歩いて、窓から部屋に入ったら部屋が濡れたり汚れたりするけど、窓枠は全く汚れていなかった。犯人が靴や服を脱いで侵入して和泉が無抵抗で死を待つ以外それはないよ。それにあの部屋は2階だからね」

小石さんの言葉に僕は首を振る。

風向きのせいで部屋に雨が入る事もなかったし、その可能性は低い。

「——愛姫ちゃんは？」

佐々木が首を傾げながら尋ねる。

僕はそれに苦笑を浮かべながら答える。

「アリバイなし。昨日の夜からさっきまで寝てたからずっと一人だ

よ」

部屋には鍵がかかっていて、窓は開いていたが部屋は2階だから侵入は無理。

しかし自殺は有り得ない。

他に宿泊客はいないし、外部犯なんて森の奥のこの場所じゃ可能性は低い。

これは僕ピンチ？

「つまり君だけが彼女を殺せるって訳だ」

小石さんに言われなくても、まずい状況になってきたのはわかった。

いつそみんな殺してしまおうか。

「一応反論させてもらうと消去法だけで犯人扱いされるのは困るな。それに僕には彼女を殺す理由がない」

小石さんの言葉に首を振る。

殺人鬼に殺人の罪を被せるとは、犯人さんはなかなかやりますのお。

まあ、『彼女を殺す理由がない』なんて理由なく殺す殺人鬼が言う事じゃないけどね。

「君は彼女達の副担任らしいじゃないですか。俺達みたいに初対面な訳じゃないし理由はありそうだ」

「しかし鍵の問題は？ わざわざマスターキーを従業員室に忍び込んでまで閉める理由がない」

「それこそ俺達に疑われない為なんじゃ？ それか自分だけアリバイがないなんて思わなかったとか……。現実には推理小説みたいに上手くないものだしね」

「凶器に使われたものは？」

「こんな山奥だ。処理するのは簡単ですよ。まあ、警察が来ればわかることですね」

探偵役から一気に犯人役へ。

偽の罪を被せられる殺人鬼なんて傑作だね。

「愛姫ちゃんは嘘ついてないよっ」

ここで救いの女神。

ありがとう嘉穂ちゃん、愛してる。

「証拠はあるのかい？」

「ないけど、愛姫ちゃんが殺したって証拠もないでしょ？」

ありがとう嘉穂ちゃん。

嘘が通用しないなんて、嘘臭いとか思ってたのは撤回するよ。

「そんなに庇うなんて君が共犯の可能性も――」

「共犯の可能性を話し出したら僕以外にも可能ってことになるけどね」

「そ、それは……」

これでなんとか挽回できた。

まあ、一番疑わしいのは僕なんだけど。

「とにかく君が一番怪しい事には変わらない」

「だと思いますので、どうぞ監視役でもつけてください」

「なら私が――」

「君は仲がいいからダメだ。ここは俺が引き受けよう」

そう言って小石さんが立ち上がった。

「俺以外は女性だし、彼は小柄だから俺なら体格や力から、殺されそうになっても抵抗できるしね」

オッサンと二人で過ごす殺人事件のあった旅館での休暇って……。

犯人が見付かったらたっぷりお礼をすることにしよう。

幕間三 誰が殺したヘン・ロビン

あれからの話し合いで、昼間は小石さんが見張り、夜は倉庫に閉じ込められる事が決定した。

倉庫に閉じ込められるなんて僕は園山赤音さんのように次の犠牲者になるのだろうか。

いや、彼女はクビキリサイクル的には犯人か。

——バラバラ死体を使って脱出は無理だと思うが。

てゆうか小石さんが犯人なら次に狙われるのは僕かもしれない。そもそも、次があるかわからないのが。

「考え事ですか？」

「このまま犯人扱いされるのは嫌なので、そろそろ真犯人を見付けてやろうかと考えていたところですよ」

僕は立ち上がりながら宣言する。

殺人鬼に罪を被せた馬鹿にお灸を据えねば。

「現場を見に行きたいので着いてきてくれますか？」

「私も行くっ」

次いで、嘉穂ちゃんが立ち上がる。

「小石さんが犯人だったら、愛姫ちゃんが危ないからね」

嘉穂ちゃんの優しさに涙。

しかし、自分に嘘は通用しないという彼女は犯人を知らないのだろうか。

もしくは嘉穂ちゃんが犯人？

——やめやめ。

疑心暗鬼はよくないよ。

そもそも裏切られようが僕は殺せないし、それならそれで潤さんのように信じて裏切られるようにしよう。

「……俺は犯人じゃないんですがね」

呆れ顔の小石さんも立ち上がる。

さて、現場検証だ。

部屋は麻帆良三人組の荷物以外はそのまま。

死体もビニールシートを被せたただけなので、血の臭いが充満している。

凶器はおそらく鋭い糸のようなもの。

第一発見者は麻帆良三人組。

三人組が部屋に戻る前のアリバイは僕以外完璧。部屋には鍵がかかっていたが、窓は開いていた。

鍵は大河内が1つ、マスターキーが従業員室に1つ。

共犯を疑うなら麻帆良三人組が霰さんと霞さん。

単独犯なら僕以外不可能。

旅館に誰か潜んでいるという事もないし、森に潜んでいるのは天候的に無理。

死体を発見した後は大河内はロビーへ行き霰さんと霞さんと合流して現場へ。

明石と佐々木はそこから少し離れた場所で休んでいて。

騒ぎを聞き付けた霞さん、嘉穂ちゃん、小石さんが現場へ合流。

嘉穂ちゃんはその後、僕の安否を確かめに僕の部屋へ。

一人になる機会があったのは、大河内と嘉穂ちゃんだがその頃には和泉は死んでいる。

やはり共犯の線を疑うしかないな。

「何かわかった？」

嘉穂ちゃんが僕の顔を覗き込む。

「凶器は糸のような細くて鋭いもの。単独犯なら僕以外は無理。死体は苦しんだ様子がないから気絶なり眠らせるなりしてからバラバラにしたのかな？ 気分が悪かったみたいだし。遅効性の毒物で殺された可能性もあるけど、僕は専門家じゃないからわからない。バラバラ殺人をした理由は不明。よっぽど憎かったか殺す事が好きなのか何か理由があるのか一切わからない。でもただ殺すだけならもっと簡単にできるから、何か理由があることは確かだね」

「君はなんとというか冷静ですね……」

「見慣れてるからかな。最初に死体を見た時は吐いたりしたけどね」
前世で小学生やっていた時にね。

「で、探偵くん。犯人はわかったのかにや？」

「わからないということがわかったと言っておくよ」

——って、あれ？血の色が違う？

「どうしたの？」

「うっん、なんでもないよ」

血が乾く速度なんて場所によって違うだろうし、別に気にする必要はないか。

「それよりそろそろ戻りませんか？ 正直あまりバラバラ死体と長い時間一緒にいるのは……」

写真撮ってた人がよく言うよ。

「そうだね。私も愛姫ちゃんとは違って死体と一緒にの空間にいるの好きじゃないし、それに賛成！」

「僕も好きな訳ではないよ」

死体愛好家じゃないんだからさ。

「あ、そういえば——」

「どうしたの？」

部屋から出た瞬間思い出す。

そういえば最初に死体を見た時に発見した木材を忘れていた。

「これ、何かわかる？」

ポケットの中から一部肌色に塗られた血に染まっていた木材をハンカチで包みながら取り出して、二人に見せる。

「なにこれ？」

「遺体の傍で見つけたんだ」

僕がそう言うと嘉穂ちゃんも小石さんも嫌な顔をする。

「ただの木の屑じゃないの？ 窓が開いてたし飛んできたとか」

「風の方角と濡れていない室内から考えて外からの異物ではないよ。それに一部分肌色だし、赤ん坊の拳ぐらいの大きさのコレが風で飛ばされたら、旅館の窓とか割れてるよ」

「それじゃあ、お手上げ」

「同じく俺も」

嘉穂ちゃんと小石さんは両手を上げて大袈裟に振る舞う。

ふむ、犯行現場にあったから重要なものってのはわかるんだけどなあ。

僕は木材を包んでポケットにしまう。

「あ、先生？」

廊下を通って大広間に戻っていると大河内にばったり出会った。

彼女は僕が犯人とは思っていないのか、警戒心は全くない。

「やあ、大河内。先生の代わりに容疑者になってくれない？」

「お断りします」

僕が軽口を叩くと、彼女は少し苛立ちながら拒絶し、そのまま僕を避けて廊下を進んでいこうとする。

「じ、冗談だよ！ ちょっとしたブリティッシュジョークだから！」

僕は慌てて前言撤回する。

無反応は辛いはず。

「何か用があるんですか？　ないなら私もう行きますけど」

大河内は不思議そうに首を傾げ僕を見る。助けを求めて後ろを振り向くが小石さんも嘉穂ちゃんも視線を合わせてくれない。

「あー、あー、うん、そうそう。大河内達はなんで温泉旅行に？」

僕は無理矢理用件を絞り出して彼女に尋ねる。

本当は事件について聞きたいが、この様子だと友好的に話を聞き出せそうにないし、でも何もありませんで終わりたくないしで苦肉の策だ。

「実はちょっとこの前まで亜子が元氣なくて、それにまき絵との仲も何かおかしくて、私達四人微妙な仲だったんですよ。……でもそれはちよつと前に解決して、それで今回は仲直り旅行みたいな感じですよ」

悲しそうに和泉の事を話し出す大河内。

そんな話を聞いて嘉穂ちゃんは泣きだしそうだ。

「せっかく裕奈のお父さんが用意してくれた旅行なのにこんな事になって……。なんで、なんで……」

大河内は静かに泣きだし、それを見て嘉穂ちゃんも涙を流す。

先程まで写真を撮っていた小石さんですら悲しそうな表情だ。

しかし、僕は泣けない。人の死を悲しむ事ができない。同情も共感もする事ができない。

零崎となつて壊れたのか、何人も殺して麻痺したのか知らないが、僕は一緒に長い時間を過ごした戦友の為にすら涙を流す事ができなかった。悲しいと思う事すらもできなかった。

そんな僕が少しの間過ごした生徒の為に泣けるはずがない。

所詮、空想だと思っっている世界の住人の死を実感する事なんてできない。

相手が前の世界の愛しい姉なら僕は泣き叫びながら暴れる事だつてできただろう。

いや、南愛姫のままで此処に立っていたら、彼女達と共に悲しみに浸る事ができたはずだ。

でも僕は南愛姫本人だけど南愛姫本人ではなくて、零崎愛識と名乗っているが自分を零崎愛識なんて思えなくて、僕は誰でもないから悲しめない。

殺人衝動という呪いを、悪魔に呪われてしまった瞬間から僕は変わってしまった。

戻りたいとは今更思わないが、それでも僕は人間に憧れる。

今頃ながら変質を自覚した。

僕はやっぱり殺人鬼だ。

幕間三 誰が殺したヘン・ロビン（後書き）

うさぎさんでやった名前ネタ。

南愛姫は、南は昔使ってた偽名の一つ（源氏名とはでは断じてない）。愛姫は昔バンドやってた時の超可愛い同性の先輩の名前。零崎愛識は戯言の原作から。

一ノ宮嘉穂は由来すらなく適当に。

零崎叶識（元は悲識）は感情の名前が良かったから悲しい、そしてそのままだとアレだから改変。

小石岩夫は山にある温泉だから山のイメージ。

雨雪姉妹は雨と雪が好きだから、個別の名前は関連しているのから適当に。

零崎直識（元は正識^{まさしき}）は正義の味方のイメージで正しい↓正識↓でもそのままだとアレだから改変。

昔から読んでいる方なら知ってる風巻進も嘉穂同様に適当。強いて言うなら風を巻き込んで進む。

昔から読んでいる方なら知ってる零崎守識^{かみあり}は折り紙が由来。

昔から読んでいる方なら知ってるジャンヌ・ダルクは作品でも書いていたようにみんな知ってるフランスの英雄。J a n n e D a A r cは確かに好きだけど、J e a n n e d ' A r cの方ね。

ちなみにバンドのジャンヌ・ダルクの名前の由来はライブをドタキャンした際に名前を変更することを計画して、ボーカルのyasuがデビルマンを読んでいて、すぐ変えるだろうと思っていたから、キャラクターが弱くて可哀相だったからそれにした、だよ！

幕間四 納得のいかない終わり

真っ暗な闇が支配する世界。

雨の雫を地上に降り注ぐ空は、真っ黒に塗り替えられていた。

月明かりすら雨雲に奪われた夜の世界で、僕は明かり一つ入ってこないじめじめとした空間にいる。

もちろん豚箱（牢屋）ではない。

やっと小石さんから解放された僕は旅館の外にある倉庫の中に閉じ込められていた。

窓すらない倉庫内は汚いし、狭いし、お金を払って泊まりに来たのにととても残念な気持ちでいっぱいである。

せつかく休暇をゆつくりと過ごしにきたのにこれはひどい。

犯人にはたつぷりお礼をせねば。

もう一つ大切な理由もあるし。

僕は倉庫の中に用意された布団の上に寝転がりながら決意をする。

寝返りを打ったら完全にアウトだなあ。

「——って、ああ……、そういえば忘れてたよ」

僕はパツと起き上がり、ポケットの中から携帯を取り出す。そし

てアドレス帳から昔からのパシリを見つけ、その電話番号に発信する。

——プルルル。

雨音に紛れて携帯の音が響く。

そして、しばらくすると件の相手は漸く電話に出た。

『もしもし、高畑ですけど』

ダンディズム溢れる洪い声。

今にもぶるああああと言いつ出しそうなタカマチではなく、いつも苦笑いをしている印象が強いタカハタ君だ。

「やつほータカミチ。少々報告があるのだよ」

僕は状況とは真逆の明るく元気な声を出す。

困難を打ち破る者こそ英雄なんですよ、とか馬鹿な事を考えながら自然に楽しそうな声を出す。

しかし、僕のこの声に騙されるとタカミチ少年はかなりショックを受けるだろう。

楽しい話かと思ったら悲しい話だった時はテンションの急降下で強く衝撃を受けそうだし。

『報告ですか?』

タカミチはそんな僕の考えを知らずに面白そうなものだと勘違いして、笑いながら僕に尋ねる。

しかし次の瞬間僕が出した話に困惑する事になった。

「君と僕の生徒が一人死んで、更に犠牲者が出るかもって報告」

『——はっ？』

僕が真面目な声に変わり報告すると、それを聞いて間抜けな声を出すタカミチ。

まあ、そりゃあそうだよな。

しかし僕は畳み掛けるように話しを続ける。タカミチの心情を気にする事なく話しを続ける。

「死んだ生徒は和泉亜子。犯人はまだわかってないけど、見付け次第始末するつもり」

残念ながら見逃すつもりはない。見逃すはずがない。

犯人は手を出す相手を間違えたみたいだ。

身内に手を出したら例外なく容赦なく躊躇なく、誰であろうと死んでもらう。

『始末って——いや、ちょっと、全然話についていけないんですが』

「殺すって事に決まってるじゃん。ちゃんと処理するから心配無用」

僕はいつも通りのお気楽な口調で淡々と単純に単刀直入に告げる。

タカミチはいきなりの連続で更に混乱していく。

『そういう意味じゃなくて……いえ、何でもありません。あ、ひとつ聞いてもいいですか？』

そして僕に何を言っても無駄なのがわかったのか早々と諦める事にしたようだ。

だけど聞かなきゃいけない事があるようで、苦笑する表情が見えてきそうな声で僕に一言断りをいれる。

「なんだいタカミチ？」

『僕の生徒を殺したのは愛識さんじゃないですよね？』

——沈黙。

了承せずに尋ねてみると、タカミチは真剣な声で僕に尋ねてきた。

零崎だからこそ疑われて当然の事だ。

僕がタカミチの立場なら僕（零崎）を疑う。僕（大量殺人鬼）を疑う。僕（人を殺す鬼）を真っ先に疑う。

「……もしそうだったら？」

僕は笑いながらふざけた感じで尋ねる。

『——たとえば、愛識さん相手でも僕は戦うつもりです』

すると、タカミチは覚悟を決めて返事をした。

出張で生徒ほったらかしにしてる奴の台詞じゃないね、まったく。

「ふふっ、違うよ」

『信じます。愛識さんは近い人間の大切な人を傷付けたりしませんから』

その信頼は零崎にはきついよ。

「愛姫くんはそうでも、愛識くんはそうじゃないかもよ?」

なんて言ったって零崎なのだから。

『信じます』

なのに彼は全幅の信頼を持って、返答してくれた。

「ありがとうタカミチ」

こんな殺人鬼の言う事を信じてくれて。

その信頼はいつか必ず裏切ると思っけど嬉しいよ。

「おやすみ」

『おやすみなさい』

ほんと、殺したくなるほど愛しいよ。

プーッ——プーッ——。

外側から鍵をかけられた倉庫内に電子音が響く。

脱出は可能。

しかし、容疑を晴らす為にはこの場に残り、あるかどうかわからない次の事件を待つ必要がある。

携帯をポケットにしまい、胸元からナイフを取り出す。

暗い倉庫内で光もないのに、それは鈍く輝いていた。

朝。時刻は携帯によると8：45。

天気は最悪で、雨は止みそうにない。

昨日よりも早く起きた僕は『早く小石さんや嘉穂ちゃんを迎えに来ないかなあ』なんて、呑気なことを考えてながら待っていた。

——ドンドンドンッ。

すると、早くも迎えが来た事ようだ。

倉庫を叩く騒音によって気分を切り替える。

ガチャツ——、という南京錠を外す音と共に扉が開く。

「愛姫ちゃん大変だよっ」

なんかデジャヴユ。

目の前で傘を差しながら慌てている嘉穂ちゃんを見て、僕は昨日の事を思い出す。

「その前に身支度を整えさせてくれないかな？ 人前で醜い格好をするのは堪えられないんだけど」

「そんなことより、また愛姫ちゃんの生徒がつ——」

「また殺人事件が起きたんです！」

——またかよ。

焦りながら用件を述べる嘉穂ちゃんと小石さんを見て溜息を吐く。

「はぁ……、とりあえず急ぐ必要はないし、先に着替えたりさせてよ」

僕の言葉に呆れる小石さんと怒る嘉穂ちゃん。

だって嫌なものは嫌なんだもん。

嘉穂ちゃんに説教をくらいながら、自分の部屋に戻って身支度を整えた後、すぐに現場に向かった。

部屋の中には首吊り死体。

犠牲者は明石裕奈。

天井の太い木にロープを引っ掛けて吊られているようだ。

足元に台が転がっているから自殺か、それとも自殺に見せ掛けた他殺か。

しかし明石教授になんて説明すればいいのやら。

しかも魔法世界編に参加するメンバーが更に脱落なんて、原作はどうなるのだろうか。

もしかしたらネギくんが来る前に全員死亡ENDなんてのもありそうだね。

「第一発見者は？」

僕が問い掛けるとみんなが麻帆良2人組を見る。

「佐々木と大河内か。状況説明よろしく」

そう言つと佐々木は俯き、大河内が震えながら話し出す。

「朝、起きたら……裕奈が首を、その……吊った状態で、死んでて、枕元にこれが」

大河内はそう言つて、右手に持っていた紙を渡す。

『この手紙を読んてる頃、私はもう死んでいるでしょう。

ごめんね、お父さん。

でも後悔はしてません。

亜子を殺したのも私、理由は墓場まで持つて行くことにします。

皆さん迷惑をかけてごめんなさい。

まき絵とアキラ。私の為に嘘をついてくれてありがとう。

愛姫ちゃん、倉庫なんか閉じ込められちゃうような事になってごめんね。

さようなら。

天国には行けないけど、あの世からみんなを見守っています。

明石裕奈』

声に出して読み終わった頃には二人は泣いていた。

「佐々木。……嘘つて何？」

「ずっと、一緒にいたって言うてたけど、本当は、裕奈は気分が悪くなつて途中でトイレに行く、って……ぐすっ……一人になつて」

つまり本当はアリバイはなかったのか。

でも妙に納得いかない。

現実はこんなものなのか？

遺書が偽物の確率は零。

これでも副担任だから筆跡はわかる。

他人を殺して耐え切れなくて自殺。

なんてもやもやする幕切れだろう。

僕は殺人事件の終わりを喜ぶよりも、殺人事件の虚しさを感じていた。

幕間五 終わらなかった悲劇

あれからみんな大広間に集合した。

みんなと言っても小石さんは首吊り死体を撮っていないのだが、それ以外の生きている人間は全員集まっている。

今回は自分で書いた遺書ありの自殺だから、わざわざ死体を調べてはいない。調べる必要性を感じられない。

疑いもはれて事件も終わった。

でも僕の心は晴れなかった。

「愛姫ちゃん」

そんな風に、もやもやした気持ちでぼーっとしていると嘉穂ちゃんから声を掛けられた。

僕は嘉穂ちゃんの方を見る。

「なに？」

「嘘のことについて聞かないの？」

嘉穂ちゃんが僕を真剣な眼差しで見つめる。

彼女の超直感、嘘が通用しないのが本当なのならそれは役に立つだろう。

終わった気でいる事件が再開する可能性もあるし、その場合は真犯人すら応用すれば誰かわかる。

嘘がつけない、真実だけで話さないといけないというのは、選択肢を狭める行為は、犯人にとっては反則過ぎて不満が出るだろう。

僕はそんな不満なんかどうでもいい。

けれど、思うんだ。

「——推理小説ってのはネタバレしたらつまらなくなるものだよ。最後の最後まで犯人がわからなくなる、犯人がわかった後もう一度見直したくなる作品が一番なのさ。最初から犯人がバレバレの推理小説や犯人がわかってもらえない推理小説なんか面白くないですよ？」

「これは現実だよ？」

「くだらない幕切れのね」

あまり興味なさ気に答えると、嘉穂ちゃんは何かを考え込むように顎に手を当てる。

正直犯人が死んでしまったのなら僕の出番はない、犯人が生きていても警察の介入を待つのもありだ。

僕は絶対に自分が解決したいなんて目立ちたがり屋で強い正義感を持つ人間なんかじゃない。

解決方法は問わないし、解決して犯人がわかってても基本的にはど

うもしない。

——今回はどうにかするけどね。

「わっちに嘘は通用しないのは嘘じゃないであります」

突然嘉穂ちゃんが似ていない物真似をしながらニヤリと笑う。

「素晴らしい鼻をお持ちなんですネ、狼さん」

僕はそれに対して棒読みで乗ってあげた。

嘉穂ちゃんは少し不満そうな表情だが少しは嬉しそうだ。

「でも、主様がわっちの話を聞かないと言つのなら、わっちの力が必要ないと申されるのなら、わっちは黙って主様が全て解決するのを待つておるであります」

嘉穂ちゃんはニツコリと笑う。僕に期待するような視線を向けながら楽しそうに、けれども何処か危なげに笑う。

僕はそれを見て気分を変える。

それはつまり、まだ解決していないということで、嘉穂ちゃんは真相を知っているということで、犯人はこの中にいるということ、また誰かが殺されるかもしれないということ？

「期待してるよ、愛姫ちゃん」

そんな言葉を残し、嘉穂ちゃんは部屋に戻っていった。

勝手に期待して、勝手に押し付けて、自分は勝手に投げ出して、僕に任せて彼女は大広間から消えていった。

——そしてその夜に死んだ。

殺人事件はまだ終わっていなかった。
いや、終わってまた違う事件がもう一度起こった可能性もあるが、とにかくまた人が一人死んだ。

「終わったんじゃないかったのかよ……」

流石に余裕がなくなったのか、小石さんはカメラを取り出さなかった。

「うちの旅館で三人も死ぬなんて——」

電さんはそう言って気絶する。

何度も起こる殺人事件に、ついに緊張感が切れてしまったのだらう。

そんな電さんを雲さんががちりと受け止め、心配そうな表情で見つめる。

「電、大丈夫？ 電、電を運んであげて」

「はい、姉さん」

そして気絶した雹さんを部屋から霰さんが運び出していった。

嘉穂ちゃんは、まるで第一の夜を再現するかのように――バラバラに解体されていた。

頭、腕、肩、脚、爪先、お腹、胸、指――様々な身体のパーツが真っ赤な血液と一緒に部屋中に散らばっている。

抵抗した形跡はなく、第一の事件の時に感じた違和感や異物は存在しない。

畳に広がっている血は固まっているから、みんなが寝ている深夜に殺されたのだろう。

寝ているところを殺して、そしてそのままバラバラにしたのだろうか。

悲鳴一つあげる事なく、自分が死んだ事を感じる暇なく、夢を見ているまま死んでしまったのだろうか。

とりあえずこれだけは言える。

「答え合わせはできなかったみたいだね、嘉穂ちゃん」

肉塊を見下しながら呟く。

嘉穂ちゃんの頭は眠っているかのように穏やかだった。

「大広間に行こう、みんな。犯人探しの再開しなきゃいけないみたいだ」

仇はとってあげるから安心してね、嘉穂ちゃん。
どのみち犯人は殺すつもりだったからついでだけどさ。

大広間にて全員集合。 気絶している雹さんと僕以外みんな表情は
暗い。

当たり前だろう。

三人、三人も死んでしまったのだ。 少し前まで仲良く話していた
知人が、旅先で会った旅先で仲良くなった知人が、無惨な遺体とな
って、物言わぬ死体となって次々と消えていったのだ。

人の死に慣れるなんて有り得ない。 一生忘れられない思い出とし
て残る。

だから僕みたいに普通でいられるのが異常なのだ。

「一人ずつ、一昨日の夜から朝までと昨日の夜から朝まで何をして
いたのか聞いてみようか」

しかし僕は彼等に遠慮しない。

他人の死を受け入れるのを悠長に待つてあげる事なんかしない。
するはずがない。

この中にいるのは確定で、この中にいる人間が殺したのが確定で、

僕がそんな犯人を殺すのも確定。

全て定まっている。

僕の言葉を聞いて、みんな一斉にこちらを見る。

しかし誰も喋ろうとはしない。

それならと、僕はまずは自分から語る事にした。

「まずは僕。一昨日の夜から朝までは嘉穂ちゃんと小石さんが鍵を開けるまで倉庫の中。昨日の夜から朝までは部屋に一人だったよ」

朝はアリバイありで夜はアリバイなし、アリバイ関係なく自分が犯人じゃない事はわかっているが。

「私達は両方共、朝は朝食の用意をしていて、夜は三人同じ部屋で寝ていました」

「ずっと一緒に？」

「はい、怖かったのでトイレも一緒に。夜も同じ布団で手を繋いで」

雨雪さんの話を聞きながら頷く。

彼女達は家族だから庇い合ってる可能性もある。だから一応疑わなくては。

しかし、こうやっていろいろ聞いて嘉穂ちゃんに確かめていたら、

嘉穂ちゃんは死ぬことはなかったんだろうか。

嘘が通用しないと自慢する嘉穂ちゃんと一緒に犯人を追いつめる未来なんていうのも存在したのではないだろうか。

もう遅い事だが、僕はそれを想像して笑う。

「俺は朝も夜も一人でした。朝は騒ぎを聞いて一ノ宮さんと君を呼びに行くまで一人で部屋に籠ってたし、夜は一人で部屋で寝ていたし」

次に話してくれたのは小石さん。

完全にアリバイないが、最初の事件はアリバイが完全にあるし、僕の予想では犯人ではない。

しかし決め付けや先入観は良くない。そのせいで思考を止めてしまうのはダメだ。

小さなヒントを探しだし、それを元に常識に捕われずに思考を深めるのが必要だ。

「私達は一昨日の夜から朝は裕奈を発見するまで寝ていて、昨日の夜から朝は二人共寝てました」

次は麻帆良二人組。

彼女達は友達が死ぬ度に、次々と部屋を変わっている。

どちらかが起きたら敏感になっているだろうから物音で起きるか。

これで全員終了。

ダメだ。僕には名探偵の孫や高校生探偵や神の弟のような推理力はない。

そんな事を考えていると、バンツ——と机を叩く音が聞こえて、僕達は全員注目する。

机を叩いたのは佐々木まき絵だ。

「ねえ、愛姫ちゃん。愛姫ちゃんが犯人なんでしょ？」

佐々木が静かに、それでいて怒りを籠めて僕に問い掛ける。

僕は黙ってそれを聞き続ける。

「亜子の時は愛姫ちゃんだけアリバイがないし、決まってるじゃんっ——」

勢いよく立ち上がり、僕を睨みながら叫ぶ佐々木。

でも、それでも確実な事がある。

「——僕に明石は殺せない。」

その言葉に黙り込む佐々木。

僕は倉庫に閉じ込められたから犯人候補の資格を失ったのだ。

しかし、そのまま黙り込んだままでいると思った佐々木の発言でそれはひっくり返される。

「裕奈は愛姫ちゃんが怖くて自殺したかもしれないじゃん！ それに死んだ人はみんな愛姫ちゃんに関係あるんだよっ！？」

佐々木の言葉を聞いて、みんな納得したかのように、それがあつたかと頷く。

僕を庇ってくれた嘉穂ちゃんは今もない。だから反論は無駄だろう。

「そうですね。悪いけど君は警察が来るまで、ずっと倉庫の中で過ごしてもらいましょう」

小石さんも立ち上がり僕を見つめる。

雨雪姉妹は、僕を殺人犯と決め付けたのか怯えた眼差しを向けている。

「はあ、……どうぞご自由に」

僕に言い返す気力はなかった。

遺書の存在を言い出す気にはなれないし、言ったところで無駄だろう。

またあの暗い倉庫の汚い床に布団を置いて寝るのか。

もう、僕は旅行には行かない。温泉なんてクソくらえだ。

幕間六 現実逃避

せつかくの休暇に生徒達に会う。嵐のせいで帰れない。殺人事件に遭遇する。犯人扱いされる。オッサンに入浴含めて四六時中見張られる。倉庫に閉じ込められる。仲良くなった人が死ぬ。

こんな休暇ありでしょうか？

「僕はこんな状況に何度も遭う、見た目は子供、頭脳は大人な探偵を尊敬するね。僕は今回だけでお腹いっぱいだ」

「はあ——」

倉庫に閉じ込められたまま独り言のように呟くと、扉の外にいる震さんが気の抜けたような返事をする。

そして僕は返事してくれる人がいるのを嬉しく思いながら更に話し出す。

「彼はそこの殺人鬼よりも多く死体を見ている。事件に巻き込まれている。まさに死神だね。彼を見かけたら死ぬかもしれない事をまず意識しなければならな——」

「あのう……」

「なんだい震さん？ 食事中に話すマナー違反は見逃してくれたら嬉しいんだけど」

震さんが途中で声を掛けてきたので僕はたわいない話を中断して

返事をする。

現在、食事を持ってきてくれた霰さんと扉越しに話している。

さつきまで小石さんもいたのだが、鍵を締めたらすぐに帰ってしまったから二人きりだね。決してロマンティックな雰囲気はないが。

「そうじゃなくて……、何て言うか随分落ち着いてるんですね？」

恐る恐るといった様子で霰さんは尋ねる。

一応第一犯人候補だから無駄な恐怖を感じているようだ。

「確かに倉庫に閉じ込められた状況は犯人にとって恰好の餌食だけど、僕は殺されるつもりはないからね」

「貴方は犯人じゃないと……？」

霰さんの言葉に頷く。彼女には決して見えないのはわかっているが普段の癖のようなものだ。

「僕はやるならもっと頭を使うさ。あんな単純な方法は使わない」

「えっ！？ それじゃあ――」

「犯人もトリックも解けたよ。ついさっきの話だけだね」

あいにく、閉じ込められていたから、暇な時間だけはたくさんあった。

その時間を推理に充てたらこんな簡単な殺人事件は余裕で解けた。

「始まる前から始まっていて、終わる前から終わっていた。証拠はないけど僕にはわかつちやったよ」

「……へえ、でももう遅いけどね」

僕の言葉に静かな返事が返ってくる。

ガチャッ——ガラガラッ——。

大きな音を立てて鍵が開き、ゆっくりと扉が開いていく。

雨はもう止んでいる。

「やあ、此处を開けたって事は——」

「うん、最後の一人だよ」

声の主は僕の言いたい事がわかっていたのか、全て言い終える前に返事をする。

——こんばんは、犯人さん。

「じゃあ、答え合わせしていいかな？」

「……どうぞ」

僕が尋ねると真犯人は勝手にしろと目で訴えながら了承した。

僕はその様子に満足して頷く。

「――それでは愉快に素敵に零崎を始めますっ」

手品を披露するマジシャンのように、舞台の上で演じる俳優のように、身振り手振りを交えながら言葉を紡ぐ。

そして僕の推理ショーが始まった。

「まずは第一の事件。佐々木、明石、大河内が発見した時は和泉は生きていた」

「バラバラ死体があっただよ？」

「佐々木達以外は見てないよ」

「三人が嘘をついたってこと？」

「違うよ。ヒントはバラバラ死体をたかが一般人の中学生がずっと直視できるはずがないってこと」

「……つまり？」

「三人が最初に見たバラバラ死体は偽物。和泉亜子は部屋に隠れていた。ドッキリでも仕掛けたんだろうね。まあ、麻帆良なら精巧な人形も血液も簡単に手に入るだろう」

現場には色が違う血が、それに一部肌色の木片もあった。

嘉穂ちゃんの時にはなくて、和泉の時にはあったのは、そもそも殺される前の状況が違うから。前提条件が違えば不思議はない。

つまり二度和泉は死んだいたのだ。

「ふーん……、」

殺人犯は興味なさ気に聞いているように見えるが、その瞳には焦りが浮かんで見える。

僕はその様子に正解を確信しながら続きを話す。

「和泉亜子を殺すのは簡単だ。彼女は血を見ると失神する。バラバラにした人形は予め糸でも繋いでいたらすぐに片付けられるし、窓から捨てれば調べに行く人もいないし問題ない。調べられても明石を殺した後なら明石のせいにできる」

「——でも殺す理由がないよ」

殺人犯は両手を広げて、さあ答えてみると問う。絶対にわからないと自信満々に余裕の表情を見せる。

普通ならわからないだろう。平和な日常を過ごす者なら検討もつかないだろう。同じ種類の者にしかわからないだろう。

だけど僕はわかる。

だって僕は同じだから。休暇中だから後回しにしたが、旅館でバツタリ会った瞬間に違和感に気付いたから。予想外の現象に僕は気付いていたのだから。

「和泉亜子が殺人鬼だからさ」

僕の言葉を聞いて、殺人鬼は固まった。僕の正解にうろたえていた。

「理由なく殺す殺人鬼。彼女みたいなのを『零崎』というんだ」

狼狽する殺人犯を無視して、そのまま話を進めていく。

「たぶん現場を見ちゃったんだろうね。それとも相談されたのかな？」

「何を――」

「でもあの娘は零崎だけど完全な絶対じゃない。限定された条件でしか殺せない。血を見ると失神する零崎なんて欠陥品でしかない。それに絞殺、毒殺、いろいろな方法はあるけど、どれも血を見る可能性は零じゃない。血を見てしまうから殺せない、血を見てしまうから殺して気絶を繰り返し返す――どちらだったのか知らないが、とりあえず彼女は零崎なんだ」

零崎でありながら零崎でない。

僕と似ている殺人鬼。

人を見ると殺さないという選択肢は選べないのに、人を殺すと血を見る事は当たり前なのに血が苦手な殺人鬼。異端の欠陥品。

けれどわからない事がある。

彼女は何故僕（零崎）に気付かなかった。彼女は何故見る者全てを殺さなかった。彼女は何故麻帆帆良で事件を起こさなかった。

無意識に自然に呼吸をするように殺す彼女は零崎ならば零崎らしく人間を殺しているはずだ。

なのに、そんな報告は受けていない。

最初から条件付きの殺人なんてのもおそらく不可能だと思うのに何故。

——まあ、いいか。

どうせ本人は死んだし、考えても答えが出ないことなのだから。

気分を変えて殺人犯を睨む。

「怖かったんだろ？ 次は自分かもしれないって。逃げたかったんだろ？ 殺人鬼からさ」

「でもさ、私はあの時一緒にいた人が——」

「それも簡単。そのままドッキリ計画を利用して嘘だと言えばいいのさ」

殺人犯は僕の表情を見て後退る。

今更、自分は犯人じゃないなんて言うのかい？

自分の足元に首を切り裂かれた囊さんがいるのにさ。

「第二の事件は簡単だ。同室なんだから鍵がかかっていようが殺せるさ」

「でももう一人が起きるかもしれない――」

「それについてはいくつか候補があるよ。予め同室の人間が被害者を薬で眠らせるか、第一の事件のようにドッキリでごまかすか、そもそも暗闇だから問題ないってパターンもあるし、バレたらバレたで殺していたってパターンもある。重要なのはそこじゃない。元々密室の中にいたってとこさ。遺書もドッキリを信じている明石なら問題ない。そもそもあのファザコンが父親に連絡しないなんて有り得ない。その父親が近くにいた僕に電話してこないなんて有り得ないんだ」

「……………」

「理由も簡単。ドッキリじゃないなんてバレたら無駄だからね。だから殺す必要があった」

無言でこちらを睨む殺人犯。さっきまでの余裕はもう目の前の人間にはない。

「だけど君にも計算違いが起きた。罪を被せて終えるつもりが、嘘が通用しないと豪語する人間がいたんだ。まだ事件は解決していないと理解している女性がいたんだ」

「――ノ宮嘉穂……………」

悔しそつに歯を食いしばる。

あんな得意を持つ人間なんて誰にも予想できないさ。

「そつ、…………だから殺した。夜中に出る時もトイレに行くとか言え
ばいい。優しい君の友人なら自分の友人が疑われることは言わない

だろう。そして嘉穂ちゃんはわかっていても抵抗しなかったんだろ
うね。あんな話をみんなの前でしたんだ。次は自分が殺されるなん
てわかりきっていただろう」

もしかしたらあんな話をしたのは嘉穂ちゃん自身が死ぬことで、
僕にヒントを出してくれたのかもしれない。

だからすつごく感謝してるよ。

——なんて、もちろん戯言だけださ。

「危険な綱渡りは失敗。せつかく嵐なんて奇跡を手繰り寄せたのに、
とても残念だったね」

僕は笑う。勝利を確信して敗者を嘲笑う。

「ね、佐々木まき絵さん？」

——殺人鬼殺し。

佐々木まき絵は僕を睨む。

手には部活で使うリボンと触れたら斬れそうな細い糸を持ってい
る。

あれが恐らく凶器だろう。

もしかしてリボンで絞殺してから糸で斬殺したのか？

「口封じで皆殺しなんて君は逃げてばかりだね。現実逃避してない
で自分を客観視してみなよ。君はもう戻れない」

「うるさい、うるさい、うるさい！……」

怒声と共にリボンが僕の首を絞める。

「私は悪くない！　だって殺されなくなかったんだもんっ！　裕奈は残念だったけど、私はまだ捕まりなくなかったから仕方なかったっ！」

リボンが僕の首を更に締め付ける。

彼女はまるで世界移動前に、僕の中の世界が変わる前に出会った通り魔のようだ。

全てを他のもののせいにして、傷付くのを恐れ、自分を守り現実から逃げている。

子供が駄々をこねるように喚く少女を見て懐かしさを感じるとは……。

「愛姫ちゃん。アキラは起きてたんだよ？　だから同罪っ！　寝てたと思ったら朝に『自首しよ？』なんて言ってきたんだよ！？　友達に捕まれて言うなんて信じられるっ！？」

そうか、大河内は全て知っていたのか。全部知ってて殺されたのか。

僕が信じられないのは君だと言ってやりたい。

でも言わない。この少女には言っても無駄なのはわかっている。

「一ノ宮さんは笑ってた！　元々自殺しに来てたから殺してくれて

ありがとうってさっ！」

山の散歩は場所探しだったのか。
もしかしたら無理心中に巻き込まれたのかもしれないかな。

「みんな私を馬鹿にしてるんだよ！ みんな私を悪者にする気なんだよ！ だから小石さんも雨雪さん達も殺したっ！ だから最後に愛姫ちゃんも殺して逃げる！！」

喚く少女を見て呆れる。

もう彼女に付き合う気にはなれない。

所詮、バカピンクに完全犯罪なんて無理か。

——スパッ。

胸元から出したナイフでリボンを切り裂く。

すると、佐々木は後ろに倒れた。

「くっ——、愛姫ちゃんそんなの持ってたんだ？」

しかし、彼女は直ぐさま起き上がりこちらを睨む。

でも僕は気にしない。

「僕はね、零崎なんだ。」

これからは僕（愛姫）じゃなくて、僕（愛識）の番だ。

「——えっ？」

「零崎一賊の長兄なんてやらせてもらってる。本名は零崎愛識って言って今まで何人も殺してきている」

「……何、言ってるの？」

佐々木は知っているはずの僕の知らない一面を見て困惑している。

僕はそれを無視してドンドン彼女に近付いていく。ゆっくりゆっくり一本一本足を運んでいく。彼女が知っている微笑みとは違う笑顔で歩いていく。

「零崎一賊は血の繋がりでなく、流血により繋がっている。でね、一見バラバラなようでみんな家族思いなんだよね」

「愛姫、ちゃん……？」

そして彼女の前で立ち止まる。

「零崎に仇なすものは老若男女人間動物植物関係なく、例外なく、特例なく、容赦なく、区別なく——皆殺しだ」

そして怯える彼女に、僕は銀色を振り上げた。

こうして、温泉旅館での殺人事件は幕を閉じた。

幕間終 終わりは新たな始まり

あれから、そう——あの事件、京都の旅館で起こった連続殺人事件が終わってから、僕は同じ京都のあの旅館から差ほど離れていない喫茶店で優雅にティータイムと洒落込んでいた。

あの少女、恐怖から逃げ、現実から逃げ、全てを他人のせいにして生き残ろうとしていた少女はもう存在していない。

僕が殺した。零崎である僕が、零崎に手を出したものに、何も知らなかった哀れな殺人鬼殺しに死を与えた。

僕はそれに対して何の感慨もない。達成感もない。一人の少女、原作で活躍するはずだった彼女の物語を終わらせた事に既に興味を失っていた。

後処理を単刀したのは警察ではなく、関東魔法協会。魔法は関係ないが、自分達が管理していた少女が起こし、管理され管理する側の僕が終わらせた事件を公にしたくはないようで、彼女達は交通事故故で死んだ事に偽造されるようだ。わざわざバラバラ死体を繋ぎ合わせて、死者の身体を弄んで生者を騙すそうだ。

佐々木まき絵は僕が殺した。大河内アキラは、雨雪三姉妹は、小石岩夫は、佐々木まき絵が和泉亜子と明石裕奈と同じように彼女がその手で殺した。

——だが、その事実の関係者以外誰に伝わる事はない。

「明石教授残念だろうなあ」

僕は無関係に無関心に、何事でもないかのように、ごく自然のよう
に淡々と呟く。

しかし明石教授、明石裕奈の父親にとっては残念という一言で済
ませればいい程簡単な問題ではないだろう。最愛の妻を失い、更に
娘まで失い、彼はまさに不幸で不運でどうしようもない程苦しく辛
いだろう。

妻はまだ理解できる。魔法関係の、所轄裏の世界の住人だったの
だから、死ぬ可能性は高かったのだ。納得はできないが気持ちの整
理は付きやすいだろう。

しかし娘の話は別だ。彼女は魔法なんて関係なく、普通の少女と
して普通じゃない父親に育てられ、普通じゃない事に巻き込まれて
死んだ。

——何故、何故、何故、何故。と彼は何度も答えの出ない問い掛
けを、誰に求めるでもなく続けているだろう。

今回、直接の責任はないが、間接的な責任は僕にある。零崎の僕
に、零崎が生まれる原因となった僕に、仮説が正しければ和泉を覚
醒させた僕にあるだろう。

だが、僕はそれを悲しむ事も、哀れむ事も、憎む事も、誇る事も、
喜ぶ事も、何もしない、ただあるがままとして受け入れ、その観察
結果を自身に記録するだけで、僕が死者に、遺族に何かを思う事は
ない。

それが僕なんだ。

——なーんて、こういう事を真昼間から普通の喫茶店で考えてる

のもおかしいし、もし読心能力者なんかいたら大変だ。少し自重しよう。

紅茶を、正確に言うならホットミルクティを口に運び、少し口元を笑みを浮かべる。

今日が長期休暇最後の日。

こうやって優雅に過ごせるのは素晴らしい事だ。普通の日常とはなんて偉大なんだろう。

普通から外れてしまっていた宿泊を乗り越えた今ならそれが心から理解できる。素直に喜べる。

「相席よろしいですか？」

そんな僕の感動を妨害する声に僕は思わず眉間に皺を寄せる。普段はしない明らかに『不機嫌です』と主張する表情に顔を作り変える。

冬休みとはいえ平日の、しかもあまり雰囲気が良いとは言えない喫茶店は空席が目立っている。わざわざ相席を求めなければいけない状況でもないし、何の目的があるんだろうか。

「……どうぞ」

仏頂面で短く返事をしながら声を掛けてきた空気を読めない人間を一目見ようと首を動かす。

そして僕は驚愕した。今まで生きてきた中で一番かもしれないレベルで驚愕し、目の前に映る光景に疑問を感じざるおえなかった。

——これはどういう事だ。一体全体何がどうなっているんだ。僕は夢を見ているのだろうか。これが白昼夢というものののだろうか。

「やつほー、愛姫ちゃん。お疲れ様ー」

そこには死んだはずの、一ノ宮嘉穂がいた。無傷で、何事もなかったかのように自然に立っていた。

「——はあ？」

僕は素っ頓狂な声をあげて目を丸くする。口を大きくだらし無く開けて目の前にいる人間をじっと見つめる。

「なにになになぁー？ 幽霊でも見たような顔をして、死んだ人間が生き返ったかのような顔をして、目の前にある現実を簡単に簡潔に受け入れられない、あるがままを受け止められない滑稽な人間を演じているように見えるんだけど気のせい？」

一ノ宮嘉穂は人を小ばかにした態度を取りながら僕の対面の席に着く。

そんなはずはない。彼女はバラバラになって殺されたはずなんだ。

僕はその現場を見たし、それに彼女が言うように目の前の事がどんなに摩訶不思議でも簡単に現実だと受け入れられる人間などない。

物事には、人間にはワンクッション必要なのだ。殺人鬼もそれは変わらないのだ。

結論、なにこれドッキリ？

「ノードッキリ！ 嘉穂ちゃんやっぱ死ぬのが嫌だから生き返っちゃいましたのだ！。あ、店員さん、私はホットコーヒーで！」

けらけらけらけら、と何が面白いのか大きな声で笑う少女。

ふんわりとした茶色の髪に小柄な体型、あまり化粧や装飾品で着飾っていないシンプルな容姿、それは僕が見る限り間違いなく一ノ宮嘉穂の容姿と一致していたし、口調や声や性格も本人そのものと思えなかった。

有り得ない事なのに。

「有り得ないなんてことは有り得ないのだよ。愛姫ちゃんもよく言うでしょ？」

不思議そうに首を傾げる嘉穂ちゃん。

確かによく言うがあんなものはごまかした。世の中に有り得ないものやことがないのなら僕の信じていない神様や、それ以外も全て存在してもおかしくないという事になる。

世界移動を経験した僕が言うのもおかしいが有り得ないものというのは確かに存在するのだ。

なんだこの状況は。一ノ宮嘉穂は死んだのではなかったのか。

「それが間違い。嘉穂ちゃんはピンピンしております故」

「……嘘がわかるのは読心術？」

僕は彼女を嘘やごまかしは許さないと睨み付ける。

しかし嘉穂ちゃんは表情を変えずにニコニコと微笑んでいる。

「ピンポン。いやあ、愛姫ちゃんに気付かれないように頑張っちゃったよー」

そして僕の質問にごく自然に答えた。

つまりはそういう事か。

「嘉穂ちゃんは魔法使いでしたー。身替わりとかよくできてたですよ？ 気付かれたら犯人扱いされちゃうから高い道具使ったんだよね！」

「戯言だよな？」

「それなら傑作だけど真実さ。ちなみに私は最初から最後まで私は全部まるっとお見通しでしたー。いひゃひゃひゃひゃひゃー」

下品な笑い声を聞いて頭を抑える。超展開と彼女の言動に僕は頭痛を感じていた。

つまり僕は最初から嘉穂ちゃんの手の平の上だった訳で、彼女は自身の死して僕を探偵役に、滑稽なホームズに導いていたのか、このワトソンくんは。

「それじゃあ、答え合わせといきましょうか——って、まき絵ちゃ

ん相手にやっただよな？ 約束破るのはひどいよ、ぶんぶん」

頭痛が酷くなった気がする。

「頭痛薬いる？ ちなみに認識阻害使ってるから会話は大丈夫だよ。あ、店員さんありがとっ」

嘉穂ちゃんはそう言っ、湯気が揺らめくコーヒー受け取る。

「——そんじゃあ、嘉穂様がもはや語られる事のない真相を、死者の代弁者として語らせていただきます」

そして不敵に素敵に魅力的に蠱惑的にニヤリと笑った。

「まずはアキラちゃん。彼女は最初から知ってたよ。でも友達を疑いたくなくて信じなかった、っていうより自分をごまかしていたのかな？ でも裕奈ちゃん殺しの現場を見て自首を促そうと頑張ったの！ 死ぬまでポーカーフェイスだったよねえ。そして友人想いのいい子だねえ」

「佐々木から聞いたよ」

「私とも答え合わせしようよ、もう」

ノリの悪い僕に嘉穂ちゃんは拗ねるが、殺人事件をノリノリで語るのはどう考えてもおかしいと思う。

殺人鬼の台詞ではないけど。

「ちなみに小石さんが友達の死体を撮つるという不謹慎な行動をしていても怒らなかつたのはまき絵ちゃんは犯人だし、裕奈ちゃんは

ドッキリだと思ってたし、アキラちゃんはまき絵ちゃんのことですれどころじゃなかったからだよ！」

「そんな事気にしてなかったよ」

「やつぱり人の死に慣れてる人にはわかんないかなあ？ てゆうか愛姫ちゃんってば一般人と違うからね。こういうところにもヒントはあるんだから見逃しちゃだめだめ」

「そりゃあ、殺人鬼だからね」

だめだめと言われても僕は探偵になった訳ではない。僕はどちらかと言えば探偵に追い詰められる犯人側だ。

そんな想いを込めながら僕は言う。

「ちなみに此処に来るまでに10人殺したのも見ました！」

しかし彼女は恐れるどころか既に知っていたようで、しかも僕の現場を全て見ていたようだ。

僕は溜息を吐く。

「あのシャボン玉可愛いねー？」

「僕のオリジナル魔法」

「なんでシャボン玉なの？」

「姉に初めて貰ったプレゼントがシャボン玉だからかな？」

自称神様が僕の記憶から作ったのだろう。記憶の底から大切な思い出を見つけ出し、それを利用したのだろう。

あれなら悪い事に使わないとでも思っていたのだろうか。
まあ、どうでもいい。

「うわっ、なんかシスコンっばい」

「家族は大切にするものさ」

「殺人鬼でも？」

「零崎にそれを聞くの？」

楽しそうに話す嘉穂ちゃんに対して僕は無表情でつまらなそうに答えていく。

僕達（零崎）は世界一家族想いの、家族に危害を加えるものには何が相手でも報復を加える殺人鬼集団だ。

それを僕（零崎の長兄）に聞くのはおかしいだろう。

「ふん……まあ、いいや。あ、アド交換しようよっ」

「なんか旅館にいた時より元気潑刺だね？そっちが本性？」

「あんまり変わらないよ。ほら、貸して」

そう言っ僕から携帯を奪い、手際よく赤外線通信をする。

「サンキュー。これからよろしくにゃーッス」

そしてすぐに携帯を返してきた。

「さて、ここからは君が一番気になっている疑問。久しぶりに会ったら零崎化していた少女は殺人を行っていたのか。また彼女は何故旅館で殺さなかったのか。殺さないという選択肢を選べたのか」

ゴクリと喉を鳴らす。僕にとってはここからが本番のようなものだ。

「答えは簡単。彼女が感じる血の恐怖が無意識の零崎のうよりも勝っていたから。それほどまでに彼女は血を見る事から逃げていたから。窒息させたり、毒で殺ろしたりを選べなかったのも、万が一血を見る事になる可能性で零崎を封印していたから」

彼女の言葉に絶句するしかなかった。

血の恐怖が『無意識に息を吐くように人を殺めてしまう』衝動に勝った？

殺さないという選択ができるはずがない呪いのようなものを封印した？

世界移動という奇跡を起こした神様を自称するものが消す事ができないと諦めたコレを、彼女は打ち破った？

「有り得ない。これはそんなに単純なものじゃな——」

「現実を見ようよ。殺す対象を条件付けて抗う君達の一部にはできなくても、彼女の恐怖にはそれができたんだよ」

僕は何も言えない。

「同室であるまき絵ちゃんを殺しそうになった。人間以外の動物は殺してしまった。自分を何度も傷付けその度に気絶した。けれど……彼女は人間に傷付けた事は一切なかった。これが真実」

彼女は血に何をそこまで恐怖していたというんだ。無意識を封じるなんて魂に刻み付けるような理不尽が彼女にあったんだ。零に限りなく近い可能性ですら拒絶して零崎を押さえ込むなんて偉業を彼女は何故できたんだ。

答えを求めるような瞳を嘉穂ちゃんに向けても、彼女は何も言わない。

僕は考えるのを止めた。ただ、真実を受け止めて『乙女の秘密』を聞き出すのを諦めた。

「嘉穂ちゃんは何でも知ってるんだね」

「何でもは知らない。知っている事だけだよ」

僕が諦めたような口調で話すと彼女は笑いながら返事をした。

嘉穂ちゃんが語る真実はこれで終わったようだ。

「ちなみになんて知ってるのさ？ 超能力者？」

——あの天才占い師のような。

「どの天才占い師かは知らないけど超能力なんかじゃないよ。私は情報屋なんてのを営んでるのだよ」

——情報屋？

「つまり私の頭の中には世界中の最新情報が集まっているって訳。例えば愛姫ちゃんが突然魔法世界に現れたとかも知ってるよ」

——誰も知らないはずの僕のこの世界での原点まで知っているのか。

「愛姫ちゃんに関しての情報が少ないからあの温泉旅館で直接調べようと思ったんだよね。そこで巻き込まれた訳さー」

——この世界の生まれじゃないからね。

「じゃあ、どの世界？ 直接調べようとしても魔法世界に現れる以前の情報が見えなくて苦労してるんだよね」

読心術は本物のようだ。

心の中で返事をしていても彼女はきちんと理解していた。

「嘉穂ちゃんには隠し事は無駄みたいだね」

「愛姫ちゃんの隠し事はわからないけどね。まず、姉なんて君にいいはずだし」

「まあ、企業秘密だよ」

「……はあ、手に入れた情報が少なすぎて無駄足だよ」

嘉穂ちゃんはそう言って、残りのコーヒーを飲み干して立ち上がった。

「次は愛姫ちゃんを丸裸にしてあげるからね？」

目を細めながら探るような視線で僕を見る嘉穂ちゃん。

「……勘弁してよ」

僕には彼女に言い返せる言葉はこれしかなかった。

お互い笑い合い視線を合わせる。

「バイバイ嘘つき」

「バイバイ物知り」

そう言って嘉穂ちゃんは笑顔で立ち去っていった。嘉穂ちゃん自身についての謎はたくさん残して、呆気なく消えていったのだった。

——あつ。

「伝票置いて行くなバカ野郎……」

最後まで負けたような気分で僕は店を後にした。

幕間終 終わりは新たな始まり（後書き）

終わった、終わった。漸くバラバラエスケープズムの改訂が終了した。

この話は個人的に狂愛のお気に入りです。こじつけが多く、推理すべき謎も幼稚で、犯人すらも最初の方から簡単にわかってしまうミステリーとは呼べないものですが、それでも狂愛にとってはお気に入りの章なんでござえますです。

実は狂愛はテンプレが苦手です。原作になぞるような二次創作なら原作の方が面白いですからね。……それでもテンプレなのはお話を考える想像力が足りないからです。

だからこそオリジナルストーリー的なものを書いてまんまんまんとくなのですよ。書き切れた事にこそ意味があると思っていますですよ。

さて、ここまで読んで下さった皆様ありがとうございました。改訂前から読んでくださっている方には更に感謝の言葉を申し上げます。せていただきます。

ちなみに不人気な嘉穂ちゃんですが、作者はお気に入りなので『最後の探偵役』として、主人公を事件に巻き込む『厄介者』としてこれからも登場していくと思います。

人間狂愛。

第十六幕 麻帆良の最強頭脳

世界の歪み、物語に発生した異常、正史とは違う運命を辿った冬休みの事件は終わり、今日は学生達の始まりの日、始業式の日がやってきていた。

これから3学期が始まり、生徒達は次の学年や卒業に向けて、更に学業や部活動に打ち込み、教職員達はそれを支えるべく精一杯サポートをする。

そんな大切な日の始まりは、彼女達には悲しく、辛く、涙が止まらない報告から始まる事となった。

——明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ、そして佐々木まき絵の四人が交通事故に巻き込まれ、帰らぬ人となって卒業する前にクラスから消えた。

クラスメートやあまり関係のなかった生徒や教職員は一同悲しい表情で報告を終えた後も過ごし、本来の事情を知る一部の関係者は複雑そうな気分のまま作業を続けている。

死者の家族には魔法による意識操作、記憶操作。裏の事情を知っている明石教授には事情説明を行い、正しい事件は偽りの事故として闇に葬られた。

今にも死んでしまいそうな表情の明石教授の顔は記憶に新しい。妻に続いて娘も失ったのだから当然だろう。

大切な家族の死を僕が知る限り二度経験し、自分はのうのうと平

和な日常を過ごしているなんて、当たり前のように生を歩んでいるなんて、彼は今どんな気持ちなのだろうか。

僕には全くわからない。想像することしかできない、できるはずがない。

「愛姫さん、ホームルーム終わりましたよ」

「ああ、ごめんタカミチ。ぼーっとしてたよ」

静まり返った教室での帰りのホームルーム、子供っぽく言つとおわりの会は特出する事がないまま終わった。

いつもつるさい1-Aの生徒はみんな騒ぐ事もなく、思いの外思考に集中してしまった。

今日みたいに騒がしくないと授業はやりやすいが、やっぱりどうしても違和感がある。まるで別のクラスで話しているようなそんな感覚だ。

「愛姫様、マスターから伝言です。今夜晩餐会を開くと」

「やあ、茶々丸。それなら美味しい料理よろしくね」

「かしこまりました」

そんな風に静かに悲しみに落ちる生徒に含まれていない生徒、絡繰茶々丸はいつも通り機械のように――正しく機械なのだが――用件を述べ、僕はそれにこやかに返事をした。

茶々丸はまだ堅い。

原作だと性格はロボットの的でなく、礼儀正しい生徒的な感じなのだが、未だにその兆しは見えてこない。

これから原作までに成長するのだろうか。それとも彼女もまた原作前に死んでしまうのだろうか。心が芽生えることもなく壊れてしまふのだろうか。

こんな考えなんて戯言のまま終わってくればいいな、と僕は思う。

「愛姫さん。僕は先に職員室に戻ってますから」

「あ、うん」

タカミチは少し急ぎながら僕に声を掛けて教室から出て行った。

おそらくクラスの人間の死の影響で仕事が山ほどあるのだろう。

僕もすぐに行く予定なのだけだが、副担任としてやらなきゃいけない仕事が少ない事を祈る。

「じゃあね、茶々丸。僕もそろそろ行くよ」

「はい、それでは」

茶々丸の綺麗な一礼を見ながら、僕は扉を開けて教室を後にする。

「やあ、愛姫先生。ちょっと話があるネ」

しかし待ち構えていたかのようなタイミングで現れたエセチャイナ野郎のせいで、僕はタカミチを追いつける事ができなくなってしまった。

「何か用？ 佐々木に『本物そっくりのお人形さん』を作った天才さん」

僕は少し苛立ちながら返事をした。

タカミチの様子からして仕事に大量にある事は確かだし、僕はさっさとそれを終わらせる為に職員室に戻りたいのだ。

それを妨害した彼女に少し毒を吐いてしまうのは仕方がないと思う。

「まさか、あんな事になるとは思ってたかたヨ」

彼女の言葉を聞いて、こいつは真相を知っていると確信した。

こいつの知る未来は僕がいる未来なのか、それともいない未来なのか。それによって話が変わるのだが、それを確かめる時間は今の僕にはない。

ちゃおりんしえん
超鈴音。

お料理研究会、中国武術研究会、ロボット工学研究会（大学）、東洋医学研究会、生物工学研究会、量子力学研究会（大学）に所属している『麻帆良の最強頭脳』の名で呼ばれる超天才児。

中華屋台『超包子』のオーナーでもあり、多くの研究会で重要なポストにつき、東洋医学研究会では会長も務めている勉強も運動も

万能な無敵超人。

その正体は、世界に魔法の存在をバラそうと計画している未来の魔法世界（火星）からやってきた未来人なのだが、個人的に彼女の行動や思想にあまり興味はない。

「それで用件は？ これでも出張の多いタカミチのせいで仕事が多いんだよね」

他の副担任より確実に。

「先生は未来人はいると思う力？」

「宇宙人、未来人、異世界人、超能力者、自称神様の全員に会ったことあるけど？」

宇宙人——ラカンなどの魔法世界人。

未来人——超鈴音。

異世界人——僕。

超能力者——魔法使い。

自称神様——あの人。

「……はえ？」

超は僕の返答が予想外で理解不能だったのか、目を丸くしてこちらを見ている。

僕はそれに対して突っ込んで時間を余分に使うことはしない。

「どうやら僕はキョンくんらしい」

「……真面目な話ネ」

僕の言葉に彼女は眉をしかめる。馬鹿にされていても思ったのだろう。

僕が相手の立場でも同じ事を考える。

しかし僕は真面目に話しをさつさと切り上げて職員室に戻りたいだけだ。

「僕はいつでも真面目だよ、未来人」

「——っ!？」

だからこそ相手の正体を知っている事を伝え驚愕させた。用件を手短に済ませる為にこちらから手札を切る事にした。

そしてこの反応で彼女が僕のいない未来から来たことがわかった。

もうこれで彼女に用はない。

「単刀直入に聞くが、愛姫先生は何者ネ？」

超は真剣な眼差しで茶化しても無駄だぞと目で訴え掛けてきている。

しかし僕はもはや真面目に相手をする気を失っていた。最初からなかった気がするが今は完全になかった。

「僕はね、今まで他人に本名を教えたことが一度しかないのを誇りに思ってるんだ。それとやめておいた方がいい。僕の本名を呼んだ人間は三人いるんだけど——例外なく全員死んでいるからね」

「ごくりっ——と息を飲む音が廊下に響く。」

超は僕の演技に騙され、戯言を真言として受け取り、僕に対する警戒心を高めたようだが、もちろん二つの意味で『戯言』だ。

前の世界での本名は南愛姫、こちらの世界での本名は零崎愛識と僕は認識している。

僕は嘘が嫌いだから本名しか名乗らないのさ。

「……愛姫先生の名前を呼んだから死んだと？」

しばしの沈黙の後、超は試すように確かめるように僕に問い掛けた。

「少なくとも僕はそう思ってる」

「貴方が何者かは知らないが、私の計画は邪魔させないネ」

「君の計画とやらは知らないけど、せいぜい邪魔にならないようにしておくよ。それじゃあね」

彼女の計画はどうせ失敗する計画だ。

しかも何がしたいのか知らないが、『敵に塩を送る』どころか『自分と同じ特別な刀を与える』ような馬鹿な真似をして、最終的に

十歳の少年に負ける。

絶対に成功させたいくせに、悪人になっても成し遂げたいくせに、慢心に慢心を重ねて、この目の前の偽悪者になりきれない偽善者は挫折する。

そんな超鈴音が僕に対しての悔しそうな感情を認識しながら、僕はそれを放置して別れの挨拶もせずに職員室へと向かっていった。

僕は思う。

仕事をサボるなんて無理無理。鬼の新田は殺人鬼でも怖いからね。

僕は学園一の嫌われ者である極悪人の吸血鬼、エヴァンジェリんととても仲が良い。

毎週何度がキティちゃんハウスと僕が呼ぶエヴァの居住区であるログハウスに食事を御馳走に行ったり、他愛ない話をしに来たり、親交を存分に深めている。

最近癒しが吸血鬼とその従者しかいない殺人鬼です。

「たれえうゝ あ萌えゝ」

「今日の貴様は気持ち悪いな……」

みかんを装備した火燵という人類の英知の結晶の中で吸血鬼と一

緒にぬくぬくと過ごす。

これが最近で一番の癒しだ。

「いや、最近癒しが少なくてね」

「殺人鬼に癒しは必要なのか？」

「吸血鬼も常に殺伐だと辛いでしょ？」

「私はぬるい毎日を過ごしすぎて、退屈で死にそうだな」

「僕は冬休みに連続殺人事件に遭遇したからお腹いっぱい」

「お前が全員殺したのではないのか？」

「殺したのは犯人だけだよ」

疑うなんて酷いよ、吸血鬼。

僕は甘酸っぱい蜜柑を口に含みながら拗ねるように口を尖らせる。

「で、貴様は土産も買ってこないしな」

「生首なら大量にあつたけど？」

「いらんわっ！ 京都土産でその選択はおかしいだろうがっ！！」

「常識的な吸血鬼（笑）」

「馬鹿にしとるのか貴様ーっ！！」

「エヴァンジェリン先輩を馬鹿にするはずないじゃないですか、ぷぷっ」

「笑ってるではないかつ！？ 貴様の首と胴体を切り離してやろうかコラッ！！」

「子供が物騒な言葉遣いしてはいけませんわよ。ミス？マクダウェル」

「あ、ああ、すまん——って、子供扱いするなっ！ しかもなんだその気持ち悪い口調は！？」

「ノリツツコミまでできるロリ吸血鬼。今なら5？8000円の大特価！ お求めは今すぐフリーダイヤル無惨な良い国まで」

「誰がロリだっ！？ それに売るなバカーっ！ しかも安すぎるだろうがっ！？ だいたい無惨な良い国ってなんだっ！？」

63071192で無残な良い国。

「もしもし、1セット購入したいのですが」

「「茶々丸っ！？」」

思わず僕まで驚いてしまった。

性格が放課後の時点から変わり過ぎていて二重にビックリしてしまった。

「やるではないか茶々丸」

「感謝の極み」

僕が褒め称えると茶々丸は無駄のない動作で綺麗に一礼をする。

「貴様ら私を馬鹿にしてるのかーっ！」

今日もキティちゃんハウスは平和です。

第十七幕 秘密の百合の花園（前書き）

今回の冒頭には百合ん百合んなRー15（18？）が含まれています。苦手な方は流し読み、もしくはこの話自体を読まないようにオススメです。

第十七幕 秘密の百合の花園

「ん？ どうした？ 顔が真っ赤になっているじゃないか」

スタイル抜群の大人な女性が小柄な少女を見下しながら吸血鬼のような歯を覗かせ楽しそうに笑う。

ベッドの上に押し倒され、首筋に這う生暖かい舌の感触に快感を感じながらも、それを必死に堪えようとしている少女には、返事できない。できるはずがない。

「やつ、ああんっ、おねえ、さまぁ……」

少女は恥ずかしそうに身体を震わせ、涙が溜まった瞳で女性を見つめる。

少女は「もうやめてください」と言いたかったのだろうが、しかしその仕草は女性には誘っているようにしか見えなかった。

「おねっ、むぐっ——んっ」

そして女性は少女の唇を強引に奪う。舌を絡ませ、唾液を貪り、少女の身体をまさぐりながら何度も何度も唇を奪う。

少女は女性に身体を触れられると跳ねるように身体を反応させる。快楽に表情を歪ませ、僅かな抵抗を見せながら女性になすがままに弄ばれ続ける。

「あっ、そこは……だめっ！」

しかし女性の指先が触れると少女の最も敏感な部位に触れると、彼女は強く抵抗して女性を突き飛ばそうと腕を伸ばした。

「なんだ？ アイヒメは私に触れられるのが嫌なのか？」

力の入っていない腕で押された女性は少し悲しそうな表情で少女を見つめる。

その表情を見て少女は慌て始めた。

「ち、ちがつ……そうじゃなくて、イヴお姉様に……そんな汚い場所に……んっ……触れさせるなんて、あつ、私には……できません」

快楽に震えながら少女は必死に首を振り否定する。

それを見て女性は妖艶に笑った。

「お前は私にただ身体を預けるといい。私はお前の全てが愛おしいのだ。だから私にお前の全てに触れさせておくれ」

女性の言葉に少女は恥ずかしそうにゆっくりと、しかし確実に頷いた。

その反応を確認すると女性は少女の大切な部位に触れる。

——ぴちゃり。

いやらしい水音が響くと少女は顔を真っ赤にして、女性から顔を

反らした。

「……濡れているじゃないか。いやらしいな」

「い、いやっ、言わないでっ……」

女性は触れた指先を舐め回しながら震える少女に笑い掛ける。

「ふふふ、たつぷりと愉しませてやるからな」

そして女性は少女を――

「何見てるの茶々丸？」

突然背後から聞こえたその言葉を聞いて私は本を閉じ、そして振り向きながらその薄い本を背中に隠す。

後ろにいたのはマスターの友人、南愛姫として私達の副担任をなさっている零崎愛識様でした。

「い、いえ、何でもありません」

私は少し吃りながら否定してごまかす。

彼女――訂正、彼は魔法世界では知らない者はいない程の英雄であると同時に一部の人間しか知らない殺人鬼一家【零崎一賊】の長男で、愛らしい見た目とは裏腹に私のマスターと互角以上の戦いができる戦闘者らしいです。

可憐な見た目、実力がある、鬼であるとマスターとは共通点多

く、この学園でお互いに一番仲が良い者同士だと私的に思っています。

私が今背中に隠しているのは早乙女さんに依頼して描いて貰った愛識様が女体化したアイヒメとマスターが大人化したイヴが姉妹の契りを結んで愛し合うラブロマンス。同人誌と呼ばれる薄い本でございます。

「へえ、そっか……」

愛識様はつまらなそうに呟き、興味を失ったのか私から視線を反らす。

良かったです。これで私の宝物は守られます。

マスターや愛識様に見付かれればお叱りを受けるでしょう。嘆かれるでしょう。燃やされてしまう可能性だってあります。

しかしにとってそれは受け入れられるものではありません。

マスターの不利益になる可能性を無視してでも私はこの本を望んだのですから。

キツカケは愛識様が夜遅くなっただからお泊りをすると決まった日。

あの日、私は見ました。

——美しい天使達を。

あの日、私は解りました。

——私が生まれた意味を。

夜にトイレに行かれた愛識様が寝ぼけてマスターの部屋へ。
そしてマスターが眠るベッドに近付くとマスターは母親のように
優しく抱き寄せる。

二人が抱き合いながら眠る姿を見て私は気付きました。

これが、これこそが、私が彼女達を見て感じたものが愛情という
感情だとっ！

それ以降、私はマスター達を見守りながら日々萌えさせていただ
きました。

しかし恋愛事に興味がないお子様の愛識様とサウザンドマスター
を今でも想っているマスターでは刺激的な事件は起こりません。

そこで私は『なければ偽造つくればいいのです』と思い付き、今に到
ったのでございます。

「茶々丸、これはなんだ？」

怒りを含んだ声が背後から聞こえてきて、私は直ぐに後ろを振り
向く。

——あれ？　ないっ………ない！？

そして気が付くと私の手から宝物は失われていて、背後にいるマ
スターの手の中にあつたのです。

「……………」

「くっ、これはっ」

無言で本の中身を見つめる愛識様と真っ赤な顔でぷるぷると怒りに震える可愛い——訂正、恐ろしいお嬢様。

私はその様子を見てごまかす事は不可能だと把握する。

「同人誌と言われるものでございます。マスターと愛識様を元にしたものを早乙女さんに依頼して手に入れました（キリッ）」

「そ、そうか——って、そういう事を言っているのではないわーっ！！」

私の言葉を聞いて、マスターは納得できないのか暴れ出してしまった。

愛識様が「どうどう」と宥めながら羽交い締めにしてマスターを止めている。

「ま、まあ、落ち着いて。それよりも茶々丸が感情に芽生えたんだし、祝ってあげたり——」

「主人とその友人の絡みを見て欲情する従者などいるかーっ！！」

「ここにあります」

「そう言う意味じゃないわ！ 貴様は今まで私達にそんな劣情を抱いていたのか！？ 私に忠実なのは貴様が私に発情していたからなのかっ！？」

「いえ、私はマスター単体でも萌えますが、お二人の絡みの方が萌えます。そして私自身が参加したい訳ではありません」

「そ、そうか。それならいいのか？」

漸く落ち着いたマスターが一応納得するかのような態度を示す。

「いや、茶々丸自身が変わった事やこんな本を持っている事はいいの？」

しかし愛識様の言葉でまた暴れ出してしまいました。

——ちっ、余計な事を。

「だいたいなんだこのイヴとかいうヤツは！ これでは私が女好きの変態みたいではないかつ！ しかも愛識がこんなに素直で可愛らしいなんて納得できんっ！！」

「最後のは余計だよ」

マスターの言葉に私は溜息を吐いた。

——まさかここまでダメなマスターだったとは。

「いいですか、マスター？ マスターは600年を生きている経験豊富な淑女です。ですからイヴがリードするのは当たり前です。普段ツンツンなイヴがベッドの上では大人になるのです。それに対して愛識様は未経験で恋愛感情すら未だに芽生えていないお子様。ですからアイヒメが恥ずかしがるのは自然です。そして初めての恋な

のですから嫌われたくない一心で素直になっっているのです。普段は悪戯好きの困ったちゃんですが未経験故にあれだけ恥ずかしいがるのです。そんなアイヒメを見て更に愛おしい気持ちが強くなったイヴがツンツンした態度をやめて自分が大人になり、彼女を深く愛する《いじめる》のです。そして――」

「そ、そうか。うむ、もういい……茶々丸。私達はわかったから」

「原作崩壊パネエのです……」

まだ説明はたくさん残っていたのですが、マスターが理解してくれたようなので私は説明をやめます。

愛識さんは何やら不思議な事を言いながら唸っていますが大丈夫でしょうか。

「ご理解いただけたなら幸いです」

「うむ」

こうして私の秘密がバレた一日は終わったのでした。

「あつ、あの本は没収だからな？」

「えっ」

第十七幕 秘密の百合の花園（後書き）

まさかの茶々丸百合オタ化。

茶々丸が主人萌えは予定していましたが、予定を突き抜けて予想外の方向に突き進んでしまいました。

第十八幕 殺人鬼の予定

現在2002年の3学期。

つまりネギ坊主が来るのは来年な訳だが、仮契約のパートナーは既に三人も死んでいる。

これが世界にどんな影響を齎すのだろう。

僕は白いベスパで職場に向かいながら、そんなことを考えていた。

ちなみにベスパは混合給油が面倒なのだが、ファンとしての想いでソレを我慢している。

まあ、ベスパの話はどうでもいい。

問題は物語。

メインキャラクターではないが、やはり影響は大きいのではないだろうか。

この世界は原作という正史に縛られている訳ではないが、何も行動しなければ、何も異物^{ほく}が干渉しなければ正しい歴史を描いていくはずだ。

原作キャラの死というものが、どんな影響を与えてくるのだろう。

そもそもこの世界はおかしい。

正史では存在しなかった零崎化。
物語にいなかった特別な存在の出現。
死ぬはずがない人間の死。

もはや、別世界として考えた方がいいだろうか。

ネギくんが零崎化していてもおかしくはない、ネギくんが引きこもりになっているもおかしくはない、ネギくんが変態になっっているもおかしくはない。

何が起こるか予測不能というのは当たり前の事なのだが、知っている世界が知らない世界になっていく感覚がどうも気になる。

よし、原作知識に過度に頼るのはやめよう。

自分の未来は自分で切り開けだ。

僕はそんな新たな決意と共にタカミチを轢いた。

「――へぶっ!？」

吹っ飛ぶタカミチ。

ベスパたんには傷一つ付いていない。

「おはようタカミチ。今日も元気そうだね」

なんて笑顔で挨拶すると、タカミチはふらふらと起き上がり、頭から血を流しながらきよろきよろと辺りを見回す。

そして僕の存在を確認すると、苦笑しながら挨拶をしてきた。

「おはようございます愛姫さん。……そのバイク物凄く硬いですね」

「傷が付いたり、壊れたりするのが嫌だったから、魔法先生にお願いして頑丈にしてもらったんだよ」

魔法の射手（一発で岩を砕く威力のある魔法）の10倍ぐらいの威力なら耐えられる仕様です。魔改造は男のロマン。

「そんなもので朝一から轢かないでくださいよ……」

「車と楽しいで轢くでしょ？ タカミチを楽しくしてあげようかと」

「楽しいのは愛姫さんだけですよ」

そう言ってハンカチで血を拭き、絆創膏を額に貼付ける。

流石広域指導員だね。怪我の治療は慣れてますってことか。

僕は鮮やかな応急手当に感心する。

「そういえば今日は愛姫さんにしては早いですね？ 新田先生に怒られても良かったですか？」

いつも職員会議にギリギリ間に合う程度の時間に来る僕。

ネギ先生は生徒と一緒に登校してたとか十才の少年の話で言い訳したいが、彼はまだこの学園には来ていない。

来ていても僕はタカミチより年上で身分を登録しているし無駄だ。

「答えはノーだ、タカミチ。僕は生徒に勉学を教える楽しさに目覚めたのだよ」

「嘘はいいです」

無表情で即座に否定の言葉を放つタカミチ。そんなに似合わないかな？

「滑瓢が何か話があるって言ってたから早めに来たんだよ。一応最高責任者の話ぐらい聞いてあげようかなあと」

「生徒が零崎化したことへの話ですかね？」

タカミチは途端に真剣な表情になる。

いつものヘタレメガネとは全く違う表情で僕に問い掛けてきた。

「それは報告書をまとめて提出した。……と言っても、兆候もわからないし、対策も予防も治療もできないけどね」

前例がないから仮説は立てられるが、誰が零崎になるかわからないし、どうやって零崎になるかわからないし、零崎になるのを防ぐ手段もないし、零崎になっても戻す方法はない。

「愛姫さんのように抑えられないんですか？」

「僕は特別だからね。ちなみに一人の覚醒で最悪、街が消える場合もある」

僕は零崎であって、零崎ではない。
名前自体偽物の零崎だ。

ちなみに街が消えるという話は魔法世界の資料を見て知った。

この世界でも零崎の危険性は変わらないらしい。

「……………」

無言で俯くタカミチ。

また冬休みみたいな事が起きないとは限らないから今から悩んでいるのだろう。

「はいはい、笑顔笑顔。そんな顔してたら神楽坂辺りが心配するよ？」

恥ずかしくて話しかけられない可能性もあるけど。

「……………すいません。それじゃあ、僕はそろそろ行きますので」

「新田先生に遅れるかもしれない報告よろしくー」

そう言ってタカミチは去っていった。

「——さて、行きますか」

滑瓢の用事ってなんだろうなあ。

「失礼しまーすっ」

ノックして侵入。

爺の部屋には爺一人しかいなかった。

「ほっほっほ、よく来てくれたのう、愛姫くん」

…… やっぱり気持ち悪い。

痴漢されたとか言って悲鳴をあげようかな。

「何か用？」

僕は新田先生以外は、この学園じゃ敬意を払っていない。

二足の草鞋の魔法先生は本職の魔法使いで僕に負けてるし、無関係の教員は別に尊敬するようなどころはない。

てゆうか、この学園の教師って基本的に生徒に振り回されてるし、最近の教師自体モンペやPTAに逆らえないし、新田先生ぐらいしかまともなのがない。

「実は君に頼みがあつての——」

あ、ヒゲグラこと神多羅木っちは格好良い。あのダンディズムは

タカミチより上だ。教師よりマフィアやSPに見えるけど。

「春休み——魔法——に——」

僕もサングラスかけようかな。

教師の時は伊達眼鏡してるし、急にしても違和感ないだろう。

「——ヘラス——テオドラ——」

あ、でもサングラスかけたら前が見えにくいな。

それに似合うかわからない——って、滑瓢の話聞いてなかったや。

「——で、引き受けてくれるかのう？」

「だが、断るっ！」

「ほっ!？」

あれ？　なんかデジャヴュ。

「あー、お主ちゃんと聞いておったかのう？」

「江戸川コナンの正体は工藤新一なんですよ？」

「バーローwww」

「チャドの霊圧が消えた……」

「心配せんでも日常茶飯事じゃい」

「それで、男ってバレないようにかなこさんと一緒に暮らせと？」

「鞠也様ハアハア——って、違うわいつ！」

この爺の気持ち悪さは天井知らずなのか。

血縁関係がある孫が不憫で泣ける。

「お主、聞いておらんじゃったじゃろ？ 春休みに魔法世界のヘラス帝国、夏休みに魔法世界のアリアドネー魔法学校、冬休みにウェールズのメルディアナ魔法学校へ出張を頼みたいんじゃないが」

なんという休日潰し。

てゆうか旅行は懲り懲りなんだけど。

「ヘラス帝国はテオドラ様と約束があるし丁度いいじゃろ？ その時にちょこつと用事を済ませてくれればいいわい」

あ、そういえば案内してもらった約束だったか。

「アリアドネーは総長グランドマスターに届け物を頼みたい。知り合いだし、あつちも会いたいじゃろっ」

確かセラスだっけ？

ナギのサイン貰ってた小娘の。

「メルディアナは2年の3学期に新しく雇う教師の様子を見てきてほしいんじゃ。あの、ナギの息子だしお主も会いたいじゃろ？」

何が悲しくて子守りをしにウェールズまで行かなきゃいけないんだ糞爺。

「パス。タカミチにやらせればいいじゃん」

「タカミチくんはいろいろ忙しくて頼めんのじゃ。だから他に全員と知り合いなのはお主しかおらんのう」

……タカミチ、後で焼き土下座ね。

僕は苛立ちながら八つ当たりを決意する。

「はあ、引き受けてあげるよ、糞爺。いつか息の根止めてあげるからね」

「ほっ！？」

殺人鬼このおれをパシリにするなんていい度胸してンじゃねエか。褒めてやんよ、三下ア。

「最後に言っておいてあげる」

「さ、最後っ！？」

「あんたのそのクソつまんなさそうな人生、あたしが面白おかしく演出してやるわー！」

「ラゼルたん……、きゅんっ」

ボタンツ——。

ドアを閉めて外に出る。

「おえっ、気持ち悪いにも程があるだろ」

詠春も大変な義理の父親を持ったものだ。同情してあげるから感謝してくれ。

第十九幕 夜の麻帆良

夜の麻帆良は昼とは違う色を見せる。

昼は穏やかな白、夜は危なげな黒。

魔法関係の貴重な物や膨大な魔力が秘められた世界樹を狙ってくる襲撃者と麻帆良を守る立派な魔法使いを目指す正義の魔法使いが争う戦いの夜が今日もやってくる。

「こちら零崎。今のところ異常なし」

『ご苦労様です。こちらも異常ありません』

タカミチの報告を聞いて携帯を切る。

今僕がいる暗い森の中どころか、結界の中にすら侵入者はいない。感知していない。

しかし万が一結界に感知されずに侵入してくる実力者の事も考えて、当番制で毎晩教職員や生徒の魔法関係者達の中で戦闘向きの人間達が麻帆良を巡回している。

基本的にはチーム制だが、近くに他人がいると逆に危険な僕や出張で予定が不規則なタカミチは一人で一チーム、実力者のエヴァは自分一人でも大丈夫だが面倒臭いという理由と嫌われていてチームを組み辛い理由から茶々丸と二人。もしくはエヴァ一人で一チーム。

魔法生徒二人に魔法先生一人のチームとそんなイレギュラー達を

学園長が上手く当番を割り当てて守っているのがこの麻帆良だ。

——プルルルル。

電話から響く機械音を聞き、素早く通話ボタンを押す。

『侵入者です。数は八人。おそらく関西からの陰陽師。そちらのポイントに北東から三人が接近中。直ちに迎撃お願いします』

短く簡潔に明石教授らしき声は必要事項のみ伝え電話を切った。

僕はそれを脳内で整理し、まとめ終わるとすぐに走り出す。

探知魔法など使えず、かなり接近しなければ魔力も感じられない僕には正直この仕事は向いていない。

得意なのはシャボン玉を用いた殲滅戦。もしくは身体強化や魔法の射手を交えてナイフで戦う正々堂々とした戦闘。

襲撃するのは得意だが、襲撃されるのは探す手段の影響で苦手だ。

しかしそんな僕の思いとは裏腹に襲撃者達はいとも簡単に見付かった。

前方で鬼などの妖怪を召喚している三人組を発見。

相手も既にこちらに気付いているようで、僕を睨み付けている。

「おいおい、せっかく召喚されたかと思ったらこんな嬢ちゃんが相手かいな」

「相手を見掛けで判断するな。ヤツからは濃い血の臭いがする」

「はっ……ビビりな烏族^{チキン}さんは見てるだけでもええでえ？」

「なっ、貴様っ!？」

「いいからさっさとやっちまおうぜえ」

大きな鬼が一匹、眼光が鋭い烏族が一匹、涎れを垂らしながらだらし無くこちらを見ている狗族が一匹。

量より質を優先したのか、実力があまりないのか、それともこちらを甘く見て油断しているのか。
たぶん油断しているのだろう。

僕は使い捨て用の投げナイフを三本懷から抜いて構える。

「嬢ちゃん。悪いけど召喚主の命令でなあ」

「悪いが死んでくれ」

「ぎやはははは、うまそうな匂いだ!」

「……………」

三匹は後ろの陰陽師を守るような体制を取りながら獲物を前にして余裕をかましている。

それに対して僕は何も言わない。

「何をやっている？ さっさとやれ！」

そして陰陽師のその言葉と共に三匹は一斉に飛び掛かってきた。

「おらぁあッ！！」

まずは狗族が真っ先に爪を立てて切り掛かってくる。

そしてそれをサポートする為に陰陽師が呪文を唱え、幾つかの火の玉が僕に向かってきた。

「……つまらない」

「ちっ！！」

僕はそれを指に挟んでいた投げナイフで切り裂いて掻き消す。魔法処理がしてある特別製は伊達ではない。

「もらったぁぁぁあ！！！！」

「遅いんだよ、ワンコッ！！」

「なっ——ぐぎゃあぁぁぁああ！！！！？？？」

そしてそのまま突っ込んできた狗族の身体に投げ付けた。それは両足と心臓に刺さり、勢いは失速し、地面に落ちて断末魔をあげて彼は消滅していった。

「やるやないか嬢ちゃん」

こん棒を構えた鬼が笑う。

上空で警戒していた烏族は何も言わない。

しかし陰陽師達は彼等のように余裕がある訳ではない。数を増やそうと召喚する為に直ぐさま呪文を唱え出した。

僕はそれを邪魔せず、笑いながら待つ。

「嬢ちゃん。何がおかしいんや？」

鬼が心底不思議そうに首を傾げる。訳がわからないと困惑する。

僕はそんな彼を見て、不敵に笑った。

「嬢ちゃんじゃなくて坊ちゃんが正しいよ、鬼のオジサン。僕は零崎、零崎愛識。英雄と呼ばれ、殺人鬼として生きる化け物さ。僕を目にしたものは屍と化し、僕はそれを踏み付けて道を作っていく。そして君もその一つになるのさ」

「なっ——零崎やとっ！？ 関東が黒き制裁を雇ったのは本当やったんか！？」

陰陽師の一人が慌て出す。戦争の英雄という大量殺人鬼が目の前にいる事に取り乱す。

「馬鹿を言つなや！ あんなガキが黒き制裁な訳ないやろ！ あいつが子供の姿で戦争に参加したのを何年前だと思ってるんやー！」

しかしすぐにもう一人が嘘だと判断して僕の言葉を否定する。それを聞いて取り乱した陰陽師は落ち着きを取り戻した。

「……そうやな。有り得ん話や。それにヤツは行方不明って話や。嬢ちゃん、嘘をつくんならもつとマトモな話にしておくんやったな」

彼が言い終えた瞬間、化け物と呼ばれる外見をした妖怪達が大量に現れた。そして全員が全員僕を睨み付けている。

「行けえええ!!!」

そして数十匹はいる妖怪達が一斉に飛び掛かってきた。

「——では、愉快に素敵に零崎を始めます」

僕はそれを告げると共にナイフを八本指に挟み込み、彼等に突撃する。

切り裂き、貫き、突き刺し、叩き潰し、薙ぎ払い、蹴り倒し、殴り掛かり、妖怪達は次々と悲鳴をあげる暇もなく消滅していく。

最初に召喚された鬼と烏族も後から召喚された妖怪達に紛れて消えていった。追加で召喚されていく異業達と一緒に消失していった。

一匹、また一匹、また一匹、二匹一緒に、三匹纏めて、次々と消されていく妖怪達の姿に三人組は恐怖していく。

消えた、消えた、消えた、消えた、また消えた。殺し尽くす前に妖怪達は深いダメージを負って帰っていく。

「さて、仕事時間終わったし僕は帰るかなあ。タカミチはまだだっけ？」

「僕は今日はこのまま朝までですよ。久しぶりの侵入者に＋して朝まで労働、朝からは教師の仕事です」

「マイドーン！ ガッツガッツ、あいとあいとですヨー！」

「励ます気……ありませんよね？」

「うん！」

僕は疲れた表情のタカミチを残して真っ直ぐ帰宅し、朝までぐっすりと快適な睡眠をとった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8926x/>

バラバラマジカル～魔法使いと殺人鬼～

2011年11月6日16時25分発行